

アニメ声クソザコリスナー装者の話

風峰 虹晴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

萌え声生主「おりん」を心の支えにしながら生きていくアニメ声クソザコリスナーのお話。

この作品は青川トーン様の『萌え声クソザコ装者の話』の二次創作、戦姫絶唱シンフォギアの三次創作です。許可は得ています

目次

無印

プロローグ | 1

動き出す歯車 | 4

メンタルオーバーヒート | 8

我ら日陰のダンゴムシ！ | 13

緊張失神大働き | 19

体力も貧弱 | 24

わかんない | 31

残念、私は巨乳だ | 34

幸運ダンゴムシ | 41

広がる日陰喜ぶダンゴムシ | 44

エスカレートする夢 | 53

おりんと銀髪とノイズ | 57

本気、炸裂ッ！ | 63

私とレーヴアテイン | 69

ひとりぼっちじゃない | 73

おはよ | 81

帰る日常 | 89

ちから | 97

力を求めるダンゴムシ | 103

G

We are the woman. | 110

さよならおりん、おかえりおりん | 119

心のオアシス | 129

並び立つ正体	139
あたたかさ	147
私は私じゃなくても私は	155
日焼け	162
脊髄反射は過去の反芻	173
チカラと器	182
融解、結合	188
強襲	194
精進	201
欲望 or 後悔	206
選択の結果	213
今後	220
G X	226
液晶越しの偶像	226

無印

プロローグ

「あつあつあつ……頼むからお母さん早く服選んでよ！間に合わないからー！」

「うるさいわねえ。あら、やっぱりこれもいいわね〜」

「あゝあゝ〜！」

私はかなり焦っていた。この後萌え声主「おりん」の配信予告時間が迫っている。なのに母が中々服を選び終えない。

私、織田 志乃（おりん しのは）は、日々「おりん」の配信を糧として毎日生きている。あれ無しでは全くやる気がでない。

「ん〜…これにしようかしら」

「うん、わかったから早く！」

私は母を急かす。迷い始めてから30分が経とうとしている。時間かからないと言われたから付き合っているのに、こんなにも時間を取られるとは思わなかった。

母がようやく服を選び終えた。私は早くしたので親が持っているかごを奪い取り、レジに向かう。

「あ、これもいいわね〜」

「はあ？」

レジに向かう途中、母が再び足を止めて並べられている服をまじまじと見る。折角自分でかごを持ったのにまるで意味がない。

「ほら、次来たときに買えばいいでしょ！」

私は母の腕を引っ張ってレジに向かう。これじゃどつちが母親かわからなくなってくる。

レジにはそこそこの列が出来上がっていた。私はイライラしながら順番が来るのを待つ。

ポケットからスマホを取り出し、時間を見る。今の時間は19:40。大体ここから車で10分程度なので、ギリギリ間に合いそうだ。

前の人が列からいなくなり、ようやく私達の順番が来た。私はかご

をレジに差し出し、店員さんが次々とバーコードを読み込んでいく。バーコードを読み込むたびに、どんどん値段が増していく。

店員さんがバーコード母は財布から一万円札を取り出して払う。店員からおつりを受け取ると、私は母の買った服を持ち、足早に店の外に出る。

「早くっ！」

「はいはい、わかったわよ」

◆？

配信を見終えて寝た次の日。私は少し遅めに起き上がり、服を着替え始める。私は私立リディアン音楽院高等科に進学した。

私は昔から声が可愛いと周りから言われ続けた。中学3年生になってもそれは言われ続けた。だから、この声を大好きな歌に活かしたい。そんな思いから私立リディアン音楽院高等科に進学した。

私は自分の部屋を出て扉の鍵を閉める。親には絶対に開けられないので、自分の部屋の鍵だけは自分で管理している。

「お母さん、おはよう」

「おはよう志乃」

テーブルには既に2人分の朝ご飯が置かれていた。

我が家は母子家庭の2人ぐらいだ。私がまだ幼い頃、母は浮気されていた上に、DV夫だったらしく離婚したらしい。

父親がいないことに、私は何も思っていない。今一番重要なのはおりんだ。それ以外の何者でもない。

「いただきます」

私は椅子に座って朝ご飯を食べ始める。母はその間に私のお弁当を作ってくれている。母が朝ご飯を食べるのは私が行った後だ。

私は早めに朝ご飯を食べ終え、洗面所に食器を片付ける。

部屋を出るときに一緒に持ってきた自分のバッグを手に持ち、玄関に向かう。

「いただきます」

「いってらっしゃい。気をつけるのよ」

私は母の声を軽く受け流しながら、私は外に出た。

私は学校の授業中、母が死亡したことを知らされた

動き出す歯車

ノイズ。人類共通の脅威とされる認定特異災害。触れた者を己もろとも炭化してしまう恐ろしい存在。

授業中に母が死んだと聞かされた。死因は、ノイズによるものだった。買い物中に襲われ、死んでしまったらしい。

冗談だと思った。だって、朝からずっとニコニコしていた。昨日だって、悩ましそうに服を選んでいた。

私は特別に早退させてもらった。私としては、授業を受けて居たかったのだが。

念の為持たされていた家の鍵を使い、家の中に入る。家の中は電気が付いていて明るい、雰囲気は決して明るいものとは言えなかった。

自分の部屋に入ってベッドに横たわる。今日もおりんの配信がある、それまで寝ていよう。

◆？

時計のアラームが鳴る。19:40に設定していたはずだから、今

は7：40なのだろう。

お腹が空いた。早退してから何も食べてない。途中で起きても無理矢理意識を眠らせたから、あまり動いてないはずなんだけどな…。

冷蔵庫からいくつか食材を取り出し、自分で軽食を作り始める。料理は出来ない訳じゃない。けど、母の方が上手いし早いので、母に任せっきりだったただけだ。

「…いただきます」

少なめの野菜炒めを作り終え、さつさと食べ始める。…お母さんが作った方が、やっぱり美味しいなあ…。

野菜炒めを食べ終え、食器を片付ける。時計を見ると7：55を示していた。

20時から配信開始なので、自分の部屋に行っておりんの配信を見る準備をする。パソコンを開き、待機する。

20：00になり、配信が始まる。

◆？

「2人とも大丈夫？」

「大、大、大、大丈夫です」

「……………」カタカタ

現在、私ほかの有名人『ツヴァイウィング』の「風鳴 翼」に、同じクラスの加賀美 詩織さんと一緒に引っ張られていた。

正直心臓がバツクバツク言っている。ツヴァイウィングのファンではないが、テレビでよく見かける超有名人なので、自然と緊張する。ちなみに、私は緊張すると口が全く動かなくなって本気で頑張っても人に怒られるレベルの小声しか出せません。

そういえば、おりんは翼さんの大ファンだったね。なんかおりんに悪い気がする。

隣で一緒に引っ張られてる加賀美さんは、とても震えている。私と同じで緊張してるのかな。

「2人とも大丈夫？とてもその、震えているようだけど」

「大丈夫です、私はクソザコプリンなので震えるものなのです」

「……………」カタカタ

「そのクソザコプリンとは何かわからないけど、その急に呼び出してごめんなさい。けれど大事なことなの」

「大丈夫です。誰にも言いませんし、この事は心に秘めて墓場にまで持っていくつもりです」

「……………」カタカタ

「妙に覚悟が決まってるわね。あと、織田さん本当に大丈夫？」

「だだ、大丈夫…です…」

心臓が停止する。全然大丈夫じゃない。全身の毛細血管が破裂しそうです。

それより、大事な事ってなんだろう。どうして、私と加賀美さんの2人なのだろう。

加賀美さんの声って、おりんの声にめっちゃ似てるなく。…もしかして本人？…いや、考えないでおこう。それだったら緊張が限界突破して体が蒸発しそうです。

少し歩いただけのはずなのに、私の全く知らない廊下を歩いている。ここって本当に学校？研究所っぽいけど…。

「来たわね」

「来たわよ」

「来たのね」

「何してるんですか3人とも……」

緊張のあまりにおりんが配信で使ってる定型文を使ってしまった。普段から使いすぎですね、はい。というか、この人も反応してきたよね？あとなんで加賀美さんとハモった…？

「ようこそ、加賀美 詩織ちゃん、織田 志乃ちゃん。詩織ちゃんはそれとも、「おりん」がいいかしら？」

「あ、っ……」

その時、私の緊張が許容範囲量を一気に突破しました。

私はいきなり意識がブラックアウトしました。解せぬ。

メンタルオーバーヒート

「……………ハッ！」

私は目を覚まして上半身を勢い良く起き上げた。

私はさっきの部屋の隅で横になっていた。あれ？どうしてこうなったんだっけ？

私はさっきの出来事を思い出す。

「……………あああああ…」

私はうなだれた。やらかしてしまった…。緊張のあまり失神するなんて小学校以来だ…。

「目を覚ましたかしら？」

「ヒエツ!?……………」カタカタ

「緊張しないでいいわ。私は櫻井了子、日本政府所属の組織『特異災害対策機動部二課』に所属する研究者よ」

「に、日本政府…？と、特異災害…？わ、私何されるんですか…？それに、加賀美さんどうしたんですか…？」カタカタ

「とりあえず落ち着いて、詩織ちゃんには既に説明し終えたので帰って貰ったわ」

「あつ、そうですか…」

私は数回深呼吸をする。正直緊張が抜ける気がしない。これは…近いうちにまた失神しますね（未来予知）。

「多少は落ち着いたみたいね。あなたにはこのリディアンで「あるもの」の適性があつたから協力をお願いしたくて来て貰ったの」

あるもの…適性…つまり…それは…。

「じ、兵器…とかですか…」カタカタ

「まあそう言われればそうね」

「ヒエツ！私兵器という物として扱われるの…？」ガタガタ

「違うわ、人聞き悪いこと言わないで頂戴。というかあなた詩織ちゃんと同じような反応するのね。呼んだのが今日なのは身辺調査が終わったからよ。母子家庭の2人暮らし。けど昨日親が死んで1人暮らし。もし協力してくれたら、これから必要になるお金も給料として

出るし、学費も一部免除するわ」

「……………」カタカタ

「どう？悪い話ではないでしょう？」

確かに悪い話ではない。正直お金に関してはどうしようと思っていた。生命保険は毎月入ってくるらしいが、それでもこれから生活していけるか不安だったのでありがたい。

が、どのような内容なのが非常に気になる。

◆？

シンフォギア。聖遺物の欠片のエネルギーを用いて鎧型武装、そのシステムの呼称…らしい、別名「アンチノイズプロテクター」。

このシンフォギアというのは、別名の通り認定特異災害「ノイズ」に對抗できるという、驚異的な物らしい。

その第5号シンフォギア「レーヴァテイン」を扱うことになったのが、私織田 志乃。

初めて聞いた時はまたぶっ倒れるかと思いました。正直家に帰って情報を整理してるだけで倒れそう。

私がやる「お仕事」は、ノイズと戦うわけではなく、毎日放課後、1

6:00〜18:00にシンフォギアを纏い、様々な訓練を受けるだけ：らしい。それだけで10万円貰えるらしい。恐縮です。倒れそうです。

このシンフォギアに適性がある人は、風鳴 翼さん、加賀美 詩織さん、そして私の3人だけらしい。

ごめんなさいこれ聞いた時は流石に倒れました。未来予知が当たりましたね（白目）。

私にとって今一番危惧してるのはおりんと間近にいることになるということ。私何回倒れるんでしょうね。

そろそろおりんの配信が始まるのでパソコンを開いて待機する。おりん脳味噌溶けてないかな？大丈夫かな？

『こんばんおりん〜』

20:00、おりんが配信を開始する。

『今日はちょっと脳味噌を酷使する事が多くて疲れちゃったよ〜』

あつ、溶けてないのか。

コメント欄は「おりんに脳味噌入ってたのか：」等のコメントが多々流れてくる。やはりおりんのリスナーは考えること殆ど一緒だね。

『ヒドイヨ！確かにプリンぐらいの容量くらいしか入ってないけどおりんも考えることは考えてるんだよ！』

可愛い、やはり我らがおりん、可愛い。コメント欄でも「プリン」「かわいい」等のコメントが流れている。

『とりあえず先にご報告、しばらく夕方の雑談配信枠はおやすみにして夜のゲーム実況枠をメインにしていきたいと思いきりマース！ちよつと機材のアテが出来たのでもしかしたらバイノーラル配信もできるかもね〜』

機材のアテ：ああ、シンフォギアのお仕事のやつかな？

コメント欄は「おりんの小遣いでバイノーラルマイクが買えるわけないだろ！」「おりん、まさかついに枕営業：？」「いや企業所属になるのか!？」と騒然としている。

『誰が枕じゃない！普通にお仕事だよ！コンプライアンス的に話せない

けどちやんとお仕事なので安心してくだばって欲しい』

わあ、さりげなく罵倒してる。国家秘密なんだよなあ…。

…なんかコメント欄に居てはいけけない人物が見えた気がするけど気にしないでおこう。おりんも気にしていないようだし。

おりんは誤魔化すようにいつもの「お歌」を歌っている。…コメント欄騒がしい！お歌に集中せいっ！

なんで「風鳴 翼」が公式アカウントで見にきてるんだろうなあ…（困惑）。

多分だけど、あの櫻井 了子とかいう人に聞いたのかな？何にしらおりん凄い、私だったらもう気絶してる（確信）。

風鳴 翼が現れたことにより、リスナーは急増し、開始時1200人程度だったのに現在6000人超え。見てる私が緊張で倒れそうです。

『なんか、変な人が見えましたが、私疲れてるのでしょいか、ちょっとはい、ハイハイハイ…とにかくですね！皆さん明日は一身上の都合でゲーム配信にさせていただきます』

おりんの1時間程度の配信は終了した。

私は少しだけスマホでSNSでおりんの配信について検索してみる。当たり前かのようにリスナー達によって騒然。これは…明日大変なことになってるかも…？

私は未だに残る緊張感に悩まされながら眠りについた。

◆？

やっぱりSNSで話題になってました（予言命中）

おりんについての記事が大量に作られてるのを確認し、久しぶりで戸惑いながらも作った朝ご飯を食べて学校に向かった。

学校に向かうと、校門に人だかりが出来ていた。

その騒ぎの中心にいたのは、翼さんと、顔を真っ赤にしているおりん……加賀美さんだった。

正直関わって注目されるのは倒れる危険性があると思ったので逃げた。加賀美さん、生きてね。

我ら日陰のダンゴムシ！

配信者「おりん」という存在に出会ったのは中学校の頃。おりんが初配信をした頃からずっと「おりん」という存在を知っていた。

母や親戚から貰ったお金を全く使わず、貯めていた。それを使い、親の許可を得てパソコンを買った。そして、好奇心から手を伸ばしたのが「おりん」だった。

本格的に「おりん」の配信にのめり込むようになったのは、おりんが本性を現した頃だった。

おりんの醸し出す闇に、私は深く共感し、いずれ心地良いと感じ、それなしには生きる希望が無くなる程のめり込んだ。

昔からメンタルが弱く、小学校の頃までよく緊張から失神していた。保健室にいる時間は他の生徒よりも明らかに多かったと思う。

人付き合いも苦手で、いつからか1人である方が心地良かった。

おりんと私達がいる日陰は、それらを許容してくれる非常に心地良い場所だった。

今は母だっていない。だが問題はない。私には「日陰」がある。「日陰」こそが私のいるべき場所なのだ。

けど日陰に多すぎる人達はキャパオーバーだ。日陰はひだまりより狭い。

今日もおりんが配信を開始する。∴待機人数多いな！見てるこっちが失神するわ！

『こんばんおりん〜今日はねえ初めての人を振り落とす為にバンバン攻めていきますからね、ここから先は闇の世界だと知るがいい』

初見さんや新規さんのコメントに紛れ、「きたないおりんだ！」「萌え声に釣られた人間よ知るがいい、これがおりんだ」「汚りん」の私達のコメントが紛れて流れる。流石おりん、絶妙な闇、ありがとうございます。

おりんがプレイしているゲームはR-17指定の名作FPS。多分初見さんや新規さんを振り落とすつもりかな？やるなあ。

ゲーム内ではおりんが操作するキャラが次々とゾンビ達の頭を潰

していく。うーん、グロいなあ…。まあ見慣れた光景ではあるんだけど。

『私の暴力性をですね、皆さんに御見せしようと思ひまして、ええ、こうしてこうしてやりますからね』

ゲーム内で次々と敵を潰していくおりん。プレイも容赦なく画面酔いを気にせずピョンピョン跳ねる。私達じゃなくておりんが酔わないかが心配だなあ…。過去に吐いたし。

コメントをちよくちよくしながら見ていると、いつの間にか0:0を過ぎ、日付が変わっていた。まだ10000人程の大人数が視聴していた。

『私はただの萌え声生主じゃありません、闇の萌え声生主です。石の下のダンゴムシ達の為の日陰、太陽の下に生きる者には不要な存在です』

そうか、私達はダンゴムシだったのか（納得）。

コメント欄では「俺達はダンゴムシだったのか…」「おっそうだな」「今日は翼さん来なかったな」等のコメントが流れる。

翼さん目当ての人まだいるのかあ…。そういえば、校門のところで翼さんとかがm:…おりんは何を話していたのだろう。

『それと先日の翼さんの件はちよつと抗議しましたからね！期待しても無駄ですからね！』

あつ、あれ抗議してたんだ。というか抗議するのか…（焦り）。

コメント欄も「抗議していくのか（驚愕）」「DEEP†DARK†ORIN」「翼さんに媚を売れ」等の反応が多く見られる。

それにしても、思ったよりも人数減らないね。私達みたいなのが多かったのかな？

配信開始してから3時間が経過した。視聴人数は10000程。結局2000人程度減ったんだね。

『まあ今日はこんな時間まで一万ものダンゴムシさんがね、付き合ってくれましたが、このバズりが落ち着くまで振り落としていくから覚悟しとけよ？』

リスナーllダンゴムシの方程式が確立しつつあります。

コメント欄では「ふりおとさないで」「よく訓練されたダンゴムシが残る」「草」「自分からリスナーを減らしていくのか(困惑)」と流れる。私は振り落とされんぞ、絶対にな。でも緊張感が抜けないこの人数は勘弁してください、何故か私が失神します。

『じゃあ次回はBLゲー実況すつか〜!!』

ヤメロオ！（建前）ヤメルオ!!（本音）正直私はそれに耐性がないんだ！

コメント欄も「やめて」「ゆるして」「やめてくれよ」「勘弁してくれ」「翼さんに汚いものをみせるな」と阿鼻叫喚になっていた。わあ、みんなの心が1つに（ヤケクソ）。

『じゃ、覚悟しとけ〜?』

おりんはそう言って配信を終了した。

私は今日の「お仕事」について思い出した。

シンフォギアを纏って、歌いながら動くのは疲れる。歌うのにも集中力を使わなきゃいけないから、頭をよく使う。同時並行が得意でよかった…。

でも、これだけで10万円貰うことについては、少し首を捻った。正直実感は全然ない。少しだけ申し訳なくなる。

明日も学校だし「お仕事」もある。もう寝よう。

◆?

今日の朝の校門には、人だかりは出来ていなかった。

授業中、私は単位を落としたくないので真面目に授業を受けている中、ふと加賀美さんを見ると、結構堂々と居眠りしていた。ああ、やっぱり加賀美さんは、「おりん」なのか。

加賀美さんの目の前で失神はしたが、リスナーだということは言っていない。…あれ？バレてはない…よね？

授業を終え、放課後。私は加賀美さんが「お仕事」に行こうとするのを見かけたので、私も加賀美さんに鉢合わせないようにちよこちよこ着いていった。

そして、地下に続くエレベーターに到着する。流石に待つのは時間がかかるので、加賀美さんと一緒にエレベーターに乗る。エレベーターの中には、翼さんもいた。

「こんにちわ翼さん」

「……ああ、加賀美と織田か」

「こ、こんにちわ、翼さん」カタカタ

加賀美さんが私の方をバツと見る。えっ、まさか気付かれてなかった!?! ショックなんだけど!?!

私今、失神しそうなのを壁にもたれかかって耐えています。カタカタ震えてしよっちゅう薄れる意識を感情で叩き起こして立っています。

翼さんの顔が私の目に移る。小さい頃お母さんに怒られまくってた私にはわかる。これは確実に怒ってますわあ…(泣)。

私何かしたかなあ? あっあっあっ…いいいい意識が…。

「何かあったんですか?」

「……………」カタカタ

「いや……加賀美が気にする事じゃない、これは私の問題よ。というかまた震えてるけど織田さん大丈夫?」

「わっわわわ私は大丈夫ですヨオ?」カタカタ

「そうですか…では私はデータ取りに向かい……………」

加賀美さんが発言し終えようとしていた頃、向こうから櫻井さんがやってくる。うつ、正直この人には謎の苦手意識が…。

「あつ、詩織ちゃんと志乃ちゃん。来て貰って悪いけど今日のデータ取りは中止よ」

「えっそうなんですか」

「ど、どうしてですか…？」カタカタ

「志乃ちゃんまた震えてるのね…。昨日新しい子が入ってね、その子の検査とかもあるからちよつと私が見てあげなきゃいけないの」

「そう、ですか…では私は今日はこのまま帰る事にします」

「わっ私も…そうします…」カタカタ

「ごめんね、でも明日はあるからちゃんと来てね？」

「了解です」

「わかり、ました…」カタカタ

今日はお仕事無しか、今私はこの緊張から逃げたいんですけど。

あつ、足震えてあんまり動けない。解せぬ。

「あ、それと司令が明日のデータ取りのプログラムは格闘と射撃だつて言ってたわよ、あなたの配信でセンスを感じたらしいわ」

「ブフアツｗｗｗｗｗｗ」プルプル

「アアアーツ!!?昨日の配信みられてたんですか!？」

すみません緊張が一時的に吹き飛びました。今は笑い堪えて震えています。

あの昨日の配信を見られていたとは…ｗｗｗｗ。おりん、痛恨のミ

スｗｗｗｗ

「なかなかの反射神経だつて褒めてたわよく？ただいかがわしいゲームは程々にしなさいとも…」

「ハハッ…はい…」

私と加賀美さんはエレベーターで地上に戻る。私が笑い堪えて腕で口を押さえながらプルプル震えてて、加賀美さんはショックからかめっっちゃ落ち込んでます。

「そういえば…さつき私の配信の話が出たとき、驚くほど反応してましたよね？」

「あっ……（汗）」

流石に不味かった！吹いたのは！いや、不意打ちだけはほんと勘弁……。櫻井さんめ……！あなたには罪はないが許さんっ！

「私は初期勢のダンゴムシです許してください」プルプル

「じ、じゃあ昨日の配信も……？」

「見てない配信なんてないですっ！」

「アアアッー!？」

一瞬にしてリスナーだとバレました。バラした感ありますけど……。

帰るとき、加賀美さんは更に落ち込んでました。その間私は怒られないかとビクビク震えながら帰ってました。

緊張失神大働

このシンフォギアを纏って訓練を行うというデータ取りのお仕事を始めてから早1ヶ月が過ぎた。

やっててわかる、全然この「レーヴァテイン」を私は使いこなせてないしそもそも性能も全体の1%程度しか発揮できてないんじゃないかなというレベル。

ノイズは私にとつて恨むべき存在…なのだろう。事実、母をノイズを殺された。これは私にとって衝撃だった。

が、何故かあまり怒りや恨みを感じない。恐ろしい程に。

まあ、私は全く役に立たないだろうから、前線で実際にノイズと戦うことはないだろうし、どうせ後方でなんかやってるだけだと思う。

精神安定剤はおりんの配信。最近人数が増えて何故か私がビビりながら配信を見ている。

けど精神安定剤は精神安定剤だ。私の心の支えであることは間違いないし、私の居るべき闇なのだ。離れる気はさらさらない。

そんな私には今、悩みが2つある。

1つ目にして最大の悩み。最近緊張する場面が多くなりました。というか緊張しやすくなつてしまいました。

私緊張すると、色々支障をきたすんですよ。というか負の感情に弱すぎるんですよ。

緊張の限界値が低いくせに限界迎えると失神するし、怒られるとすぐ泣くんです。…あれ？私もしかしておりんよりもメンタル弱いのでは？

そんなことはない、おりんよりもメンタルが弱い人なんてそうそういないんです。私がメンタルおりんより弱いなんてそんな訳ないじゃないですか。

「織田さん！」

「ピッ!? たった立花さん、なつななんですか？」カタカタ

「今日も訓練ですか！ 私もご一緒して…」

「私はデータ取りですし訓練一緒に関連しても役に立たないと思うの

で立花さんとは釣り合わないかなあつて…ね！おお願いします私にとつてお仕事なんです！すすすみません！」カタカタ

「そ、そうですか…」

2つ目。新しく入ってきた装者である、立花 響さんが、素晴らしいほどの陽キャで、私が泣きそうになるぐらい絡んでくること。

笑顔が眩しすぎて私緊張して泣きそう。なんか…優しさで。

最近なんとかおりんだと認識しても震えながらも失神は耐えられるレベルで加賀美さんと話せるようになったんだけど、どうやら加賀美さんも職場の人間関係のトラップにかかったようです。世の中世知辛い！

シンフォギアを使つてのお仕事は疲れてるので抵抗する元気なんてありません。体力まで貧弱。けど私はおりんには負けてない！…はず！…だよな？…う、うん！

◆？

『はい、始めました。ブラックおりんラジオ。今日のお題は「人間関係」のお悩み、皆さんありますよね。おりんもねー普段は人間界で生きてるからあるんだ悩み〜』

夜、おりんの配信が始まる。多分というか絶対翼さんが見れないからやつてるんだろうなあ…。

正直な話、ここでおりんには悩みを解消して吐き出してほしい。私話す時に失神に耐えるのキツイから。でも別のものを吐かれるのもちよつともう、流石にキツイ。

『おりんのね〜職場のね先輩と後輩が少し仲違いしててね〜両方から相談されてもう、ただのクソザコなおりんは心がもう軋みを上げてるんですよ！わかりますか！一応相談相手はいますけど！』

そしてその相談による失神回数軽く2桁。慣れないです。

コメントは「相談の悩みを相談するのか(困惑)」「俺はおりんが働いてる事に驚愕した」「大丈夫？おりん職場で迷惑かけてない？」「えらいぞおりん、人の為に頑張ってるなんて、パパも鼻が高いよ」と流れる。

親面してる人がいるなあ…。まあ私も改めて考えたらおりんが働いてることは異常事態だということに改めて感じた。おりんクオリティ。

『ということでも最初のお便り、ラジオネーム「机の下のダンゴムシ」ダンゴムシのリスナー多いですね。リスナーの総称をダンゴムシに変えたほうがいいでしょうか』

うん、大分おりんのリスナー＝ダンゴムシの方程式は定着してると思う。ダンゴムシ帝国が出来るのは近いぞ。もちろん日陰に出来るけど。

おりんの法則は決まった！

『最近おりんさんを知った新参ダンゴムシです。私の人間関係での悩みなんですけど、私は両親と上手く行ってません。大学卒業後就職したはいいいんですが私のオタク趣味を両親が認めてくれずグッズを捨てろといわれる始末…。どうすればいいでしょうか』なるほどですねーこれは一人暮らしを始めるのが一番です。

うちはまだ実家暮らしですが、両親は殆ど家に居ないです。殆どの家事は私がやってますから二人共私には逆らえませせん！おまけに最近は収入が入ってきて発言権がますます大きくなってるのでそのう

ち私は一人暮らししてやりますよ！ハッハッハ！聞いているかダン
ゴムシくん！君はこの萌え声生主おりんより下にいる！悔しければ
一人暮らしをするか家での発言権を大きくするかしたまえよ!!!次！』
それを聞いて、自分の状況、母のことをふと思いついた。

：やめだやめだ。今は今、過去は過去。何がなんでも過去は振り
切ってやる。

コメ欄は、「イキりん」「おりん家事できたのか」「嫁にほしい」「徹
夜配信でゲロを吐いた女だぞ」「やめとけ」と流れ続ける。

配信中吐いたおりん：あれだけは配信者の歴史に刻まれるほどの
出来事でしたね。

そういえば、nic○nic○でおりんの吐いた音声で音MADを
作った人がいる。あれは：正直正気の沙汰ではない行いですね…（遠
い目）

ごめんなさい真犯人は記憶曖昧で深夜テンションの私です。若気
の至りってやつです。

おりんはあれすつごい怒ってるからこれだけはバレたくない。バ
レたら殺される（確信）

『次のお便りは「定年退職マジカ」お勤めご苦労様です。「私はもうす
ぐ60にもなるのですが独り身です。このまま孤独に生き、孤独に死
ぬのでしょうか?」ガチな悩みを送ってくるんじゃないよ!し
かし恐れる事はありません!こうして私の配信に来ているでしょ
う!その間はあなたは孤独ではありません!等しく影に蠢く闇の住人
です!視聴者欄を見てみなさい。こんなただのクソザコ萌え声生主
の配信に5000人も闇の者がいるのです。あなたは孤独ではない。
私はオフで会うつもりはありませんが、リスナー同士でオフ会でもす
ればいいじゃないですかね?次』

コメ欄は「我らはレギオン、大勢であるが故に」「確かにおりんの配
信毎日見てる時点でダメ人間だな!」「良い事言ってるように見えて
無責任で草」「世の中、色んなダメ人間が居るんだな」「そういう君も
な」と少しだけ荒れ気味である。

確かに色々なダメ人間がいる。緊張で失神する人とか、怒られたら

泣きたくないけど泣く貧弱メンタルの人とか。あら、私じゃないですか。

そういえば、私ソルジャーレギオン、ビジュアルは好きですけど遭遇はしたくないです。2秒あれば死にます。

この後も配信は続いた。どんな配信であろうと、おりんや、リスナー達の存在は、私に元気をくれる。

◆？

翌日。私の元に翼さんが重傷を負って入院したことを知らされた。

体力も貧弱

私は昔から運動が大の苦手だ。周りができることが当たり前かのように出来ない。

このシンフォギアのデータ取りの仕事をしていても直ぐに体力が無くなるし、貧弱なメンタルと体力、どちらが原因なのか、はたまた別の理由なのかはわからないが、シンフォギアの力を全然引き出せない。

だって歌いながら動くとかめっちゃ疲れるじゃん!?!別に仕事内容に不満は持ってないですけどね!! (キレ気味)

要らない話をしました、本題に入りましょう。

シンフォギアには「絶唱」という装者の負担を省みずにシンフォギアの力を限界以上に引き出す歌がある…らしい。

威力は絶大、まさに必殺の威力を持つものではあるらしいが、その代わり装者に強大な負担をかけるらしい。

つまりどういうことかというところ、翼さんはそれを使ったから重症を負ったらしい。

シンフォギアは、簡単に言えば聖遺物の欠片。しかしその聖遺物の完全な状態であるのが完全聖遺物と呼ばれるものらしい。

その完全聖遺物「ネフシュタンの鎧」を纏った少女により「特別な装者」らしい立花さんが連れられようとしたのを阻止するために、翼さんは絶唱を使ったらしい。

…らしいらしいばっか言ってるとか言わないで、私、泣きますよ? 仕方ないでしょ! 私その場にいらないしそんなによくわかんないから!

加賀美さんは翼さんが重傷を負ったことにショックを受けていた。おりんだししゃあない。

けど、同時に安心した様に見える。多分立花さんを守ったっていう事実から人間関係の改善は見られるようだしね。加賀美さん2人からの挟み撃ち相談アタックで精神すり減らしてたっぽいし(配信から推測)。

けどね、これはね、マズい。

ついに私前線配置？やだよ私？死んじやう死んじやう。あつでも私一番弱いし3人も立花さんに加えて加賀美さんいるから大丈夫だよね！

…おりんだよ？無理だわ、冷静に考えたら無理だわ。私の前線配置率は上昇しました。アーナキソ。

「加賀美くん、織田くん」

司令来た。許して、私前線になんか配置されたら戦う前にプレッシャーによつて失神しちゃう。

「な、な、なんでしようか」

「……………」カタカタ

「織田くんまた震えているぞ。昨日の件はもう聴いてるな？」

「は…………はい」

「……………」カタカタ

あつ、また震えてた？ごめんなさいあなたの威圧と上司との会話（一方的に話される）による緊張で震えてるから抑えられないんだよね。失神しないでだけマシ。

「立花くんを狙った謎の少女が君達を狙わないと限らない」

シンフォギアをまともに扱えない私に完全聖遺物とかいうもので襲われたら私死ぬからね？…遺書でも書こうかな…。

「だからしばらくの間、授業とデータ取りの代わりに自衛の為に力をつける為に特訓を受けてもらう。ちなみに立花くんも参加するぞ」

あゝあゝあゝあゝあゝ!!死ぬ!!前線に出るよりかはマシ…？とか思った私はいないぞ!!

冷静に考えてみよう。私体力なのに特訓とかさせられたら倒れますよ？死にますからね？なのに陽キャ参戦は私を殺しに来ています本当にありがとうございます。

「きゅ…給料はですか…………」

流石おりん、目の付け所が私達とは違う（？）

「ああ、そうだなそれはキチンと出るぞ」

あつ、出るんだ。特訓なのに。まあデータ取りよりかは絶対に絶対

にキツイだろうから、当たり前かと言われれば当たり前？なのかな？
だよな？うん。

「し…しかたありませんね。では…よろしくおねがいます…」

「よっよ、よろしくお願ひします…」カタカタ

◆？

天国と地獄？いいえ、ただの地獄です。

午前中はいつも通りに授業を受ける。ここまでは全然いい。午後から処刑スタート。

特訓の教師は風鳴司令。あなたが私の処刑人ですか、ひと思いにやっちゃってください（ヤケクソ）

まずは走り込みから開始。おおう、普通に死ぬう…。あつ、加賀美さんも死にかけてる。何故だろう、ここまでおりんが頼もしいと思つたことは人生で初めてだ。

次は体操、体から変な音が聞こえたのは絶対に気のせい。

次に格闘戦の訓練。おっおう…立花さん元気だね。あ、また加賀美さんが死にかけてる。

次に組み手から始まる実践編。ヤメルオ!!私をそんな元気に投げ

るなあ!!あ、加賀美さんも元気に投げられている。

最後に走り込みという名のフィニッシュタイム。トドメかな？加賀美さんと仲良く死にかけてます。

もう0に近いほど消費した体力を振り絞り帰宅。今すぐにも倒れそうなところを耐えながらおりんの配信が始まるまで家事などをしながら過ごす。

ようやく配信が始まる。

『本日からは予告通り「お歌」配信をお送りします』

疲れながらもダンゴムシ達のために配信するその姿、配信者の鑑やでえ…。

30分の配信を見終えると同時にベッドに横になり眠る。正直私は疲れた！倒れそうなのを何回耐えたことか！

うん。これは私死ぬ。

2日目疲れが取れ切ってなあい…。いつもより多く寝ただけでなく…。私は理解ができないヨ！

一通りの家事を終え、朝食をしつかり食べてから学校に向かう。食べてないと死にます。体力無いから。

今日もまた走り込みから始まる。やっぱりキツイわ、これ。泣きそう。

最後に走り込みをして本日も終了。まだ…倒れるわけにはいかぬ！

3日目。おりいいいいん!!休んだのか!!まあ昨日の時点で目が逝っちゃってたのは見てて乾いた笑いが出たね。私狂いそう。

4日目。昨日は休んだこと怒ってごめんなさいだから今日休んだことは怒らないでくださいね？怒られたら私泣きますよ？

5日目。加賀美さん…また立花さんに相談されてる…(困惑)

加賀美さんによる悩み相談の悩み相談によると、立花さんは友達に

このことを話せないから友達の話いを断って特訓してるせいか関係がギクシヤクしてるそう。

ちなみにおりんは休めばいいと言ったらしい。私が言えることはただ一つ。

私に相談するなああああつ!!

ちなみに悩み相談を聞いてる私は目を合わせると緊張から謎の涙が出るので多少俯きながら震えて相槌打ってます。私弱い（確信）

立花さんが休んだのでクソザコ2人組VS司令。わー、絶望的な組み合わせだー、

立花さんって体力バケモンなんですか？私耐えれそうにないです、許して。

今日は配信が無かった。つまりどういことかわかるよね？

6日目、コンデイションは今までで一番最悪。だが天は私を見放していなかった。

今日は立花さんが「デュランダル」という聖遺物の移送の護衛の仕事に就くらしく、司令もお仕事らしい。私こんなコンデイションで特訓してたら本気で死んでる。

今日は昨日配信を休んだおりんのお詫び配信があった。

7日目。移送は失敗したらしく、中止になったらしい。詳しいことは知らん。

また特訓が始まる。1日空いただけで1日目の辛さを思い出したよ！

特訓が終わった後、立花さんは翼さんのお見舞いに行ったっぽい。私と加賀美さんは帰った。流石立花さん、体力凄い、

8日目。どうやら立花さんは翼さんと仲良くなれたらしい。よかったね。私は特訓で死にそうなんでタスケテ…。

9日目。そろそろ体力の限界：死ぬ：と思っていたら、また襲撃さ

れたらしく、特訓は中止になった。

司令は仕事に戻り、おりんは配信をし、私はダンゴムシになった。

10日目。翼さんが復帰し、特訓は終了となった。長く苦しい戦いだっただけだ。

また加賀美さんから悩み相談の悩み相談された(疲れる)。どうやら立花さんは襲撃者の少女とわかりあいたいらしい。また親友と邪険な関係になったらしい。

私を知るか!!こつちにまで流さないで(切実)

『はぁーい……おりんでーす、ようやく地獄の研修が終わったので久しぶりの雑談配信です……』

驚く程元気がないっ！まあ過程を見てきた私にとつたら配信できるだけ凄い(小並感)

コメント欄は「おりんに覇気がない」「おつおりん」「おりんが死んでおられるぞ！」とわいわい騒いでる。おりん特訓に耐えた猛者だから許してあげて。

『もうですね、体力が限界ですよ。上司は3日続ければ慣れるっていつてましたけどねえ!!そんなパワーがあれば私は今頃コミュ強陽キャのリアリアリア充ですよ!ナメクジをいくら鍛えたってナメクジに変わりは無いんです!』

うん、そうだね。ちなみに私はメンタル全く鍛えられなかったよ。はは、まだ日常過ごしてる方が鍛えられるね。

コメ欄は、「ついにダンゴムシからナメクジに退化したのか……」「おつ待てい生物学的ツリーの関係はないから変化だぞ」「どちらにしろ石の下の生き物には変わりないんだな」「おりんは一体どんなブラックな所で働かされてるんだ」と困惑の声が聞こえる。

ブラックつちやあブラックだけど……お金出るだけ全然いいと思うんだあ……。ブラック企業で働いてる方、お疲れ様です。

『おまけに先輩が入院して不在だったせいで後輩がどんどん私に相談してきてですねえ!それは上司に聞けや!って事まで聞いてくるんですよ!もう先輩退院しまして復帰しましたが、おまけに私抜きで

勝手に仲良くなってやがって！もう涙溢れ出ますよ！まあ私も相談相手にこれ相談してるんですけどね』

許して(切実)。痛み分けしないで、私も辛い。というか痛み分けできてない！相手に食らったダメージと同じ分食らわしてるだけだから！

コメ欄は「相談するのか…(困惑)」「なかなか」「なくな」「はなをすするな」「遠慮をしろ」と鬼畜感溢れるコメントが流れる。ちなみに私は毎日泣いています。

『ひでえ！私には泣く権利もないのかい！しかもなんですか！「おりんが十日研修で御(お)臨終(りんじゆう)」「誰が上手い事言えといったこのクソダンゴムシ！お前なんかクソダンゴムシで十分だよ！』

ごめんなさい私はクソダンゴムシです。

コメ欄も「草」「草草の草」等のコメントで溢れかえる。何気ない一言がおりんを襲うツ！ごめんなさい。

この後、何も得ることができなかつたという愚痴を言う配信が続いた。

わかんない

加賀美さんが体調を崩した。…待つて待つて！これはおかしいぞ！なんで私の方が体力が貧弱なはずなのに加賀美さんが…つてあつ…おりん配信者だったわあ。

多分今日は配信はない。ああ、私明日生きてるかな？やる気なくなっている上に追撃とか来ない？大丈夫？

仕方ない、今日はアーカイブでやり過ごそう。ゲロ配信は飽きるほど深夜テンションで頭おかしくなっているとときに嫌になる程見たのでもういいです。

もういいです。私は寝ます。早すぎますけど寝ます。だって眠いんだもん。恨むなら地獄の特訓を企画した司令に言ってください。

◆？

何もない空間。私はそこに立っている。

目の前に人が現れる。それは、シンフォギア「レーヴァテイン」を纏った私、織田 志乃。

彼女は私に詰め寄ってくる。そしてこう言った。

「私を手離さないで」

そう言つて、彼女は消えた。

◆？

「ヒエッ!!」

私はベッドから飛び起きた。何あれこええええええ!!絶対に何か良くない現象を予言しているぜえ…(焦り)

私はふとベッドの隣に置かれている「レーヴァテイン」を見る。えつと…私は私になんて言つてたっけ？

そうだ、「私を手離さないで」だっけ。どういう意味だろう。めっちゃくちゃ怖いんですけど。

こんなとき、相談相手がいればいいのになあ…。おりんは私の相談相手じゃなくて、おりんにとつての私は愚痴の捌け口だと思うから、私の相談をおりんにする訳にはいかない。

私は友達がいらない。友達は何れもないし作りたくないのだ。…うん、どう転んでも私は貧弱だわ。どーせ私はクソザコダンゴムシですよーっだ!

「お腹空いた」

私はそう呟いて台所に向かう。今日はなんか私の気分が暗い。なんでだろう？

そういえば、お母さんが死んだのを知らされたときもこんな感じだったっけ、あはは。

私は軽く作った料理を食べ終わると、自分の部屋に戻る。

私は置かれていた「レーヴァテイン」を手取る。お仕事以外で使ったことはないけど、いつも持ち歩いている。

これを持っていると、不思議と安心感に包まれる。なんでだろ？おりの配信も必要不可欠だけど、これも私にとってとっても必要なもの。

シンフォギアはノイズに対抗できる唯一の手段。お母さんはその手段を持ってなかったから死んだ。

私は無意識のうちにノイズを恐れているのか？

あーもうよくわかんないっ!! 考えてると頭の中がぐちゃぐちゃになるっ!! 私はダンゴムシっ!! この事実だけは私は生きていけるっ!!

「もう寝るッ!!」

私は寝たはずなのに再び眠りにつき始めた。

残念、私は巨乳だ

起きた。なんかもう…目覚めが悪い。昨日は配信も無かったしちよつと眠ったら意味不明な夢を見るし…。不幸が訪れてきてますねこれは…。

私は寝てる間もしっかり握っていたのであろう自分が纏う運命となった「レーヴァテイン」を握る。誰がこれを手離すかバーカ。一生こき使つてやる。

シンフォギアはノイズに唯一対抗できる手段。これさえあればノイズを倒せるんだ。ノイズなんか怖かねえ!!絶対につぶ殺してやるっ!!

まあ今のままじゃこれを使つても勝てる気がしない。強くならねば。

この「レーヴァテイン」は役立たずの低スペックなんかじゃない筈なんだ…神話通りなら。きつと私の願望を満たしてくれるはずなら。

朝ご飯を食べて学校に行く用意をする。今日こそは学校に来てもらうし配信してもらおうぞおりん。

今日はちゃんと加賀美さんは学校に来ていた。そして授業を終えると、私は二課に向かう。なんか久し振りな気がするぞお仕事。いや特訓も一応名目上はお仕事なんだろうけどさ…あれはお仕事と呼びたくはない。もしそうならブラックだゾ…。

「織田さんー!」

あ、ハイテンション陽キャワンちゃんだ。今日も絡んでくるのかめんどくさい。そのテンションは陰キャの私にとっては毒みたいなものなんです許してください。

立花さんは私に絡んだ後加賀美さんの方に行つた。私との会話は日常会話レベルでよかつた…(なお失神しかけた模様)。あ、加賀美さんすつごい嫌そうな顔してる。また人生相談か。

立花さんとやり取りして嫌そうな顔してる加賀美さんを見ていると司令降臨、私に緊張が走り一瞬意識が飛ぶ。非常に危険なんです

それは…。

「ああ加賀美くん、織田くん、丁度よかった。今日のデータ取りは中止だ。了くんが来てないのでな」

「サボりかな？私の意識キラーはお休みなのか、ありがたいようなありがたくないような。」

「じゃあ！詩織さん！今からなら大丈夫ですか!？」

「司令、訓練つけてもらっていいですか」

「安易に加賀美さんの思考が推測できる…。これは陽キャから逃げたな。でも敢えて地獄に行くほど嫌なのか…（困惑）」

「むっ、随分積極的だな加賀美くん、立花くん、織田くん」

「えっ」

「はい、力不足を思い知らされたので」

「うーん…うーん…うーん!!違う、何故私まで巻き込まれるのだっ!!私のはあの地獄はもう嫌だ!!まあいいや。やることないなら訓練した方がマシかも（思考放棄）」

「訓練のためにもう見慣れたトレーニングルームに行くと、翼さんがいた。」

「WARNING!!WARNING!!危ねえ!!あと一瞬気を引き締めるのが遅かったら倒れてた!!まあ一瞬落ちたんですけどね、戻ってこれたのは不幸中の幸い。」

「叔父さ…司令、立花と加賀美と織田も…訓練ですか?」

「ええ、翼さん。私も弱いままでは…ダメだと思ったので…」

「わわわ私も強くなれたら皆さんのお役に立てるかなとおお思いますて…」カタカタ

「加賀美…貴女は…」

「昨日は弱気になってしまいましたけど、私も私に出来る事をしようと思ひまして」

「おい昨日あなた休んでたでしょう。一体何があったんだ。詳細カモン。もしかして百合的なアレなのか?それだったら仲間のダンゴムシにも知らせなければ（使命感）」

「ごめんなさいそんなこととして注目されたら私誰もいないところで

失神しちゃいます。

「……なら私が手取り足取り、しつかり教えるから！それでもいいでしょうか司令！」

「うむ、やる気十分だな！」

おおう、それは私も対象に入っていないでしょうね。入っていないだ。うん、そうだろう。

あ、入ってる？ほんと？さいですか。私死にますね。

「まずはどれだけやれるか、模擬戦でその力を見せてもらいます」

「はい……詩織、胸をお借りする気で行きます……」

「……………」カタカタ

この後模擬戦ではなく一方的な試合展開だったのでただの翼さんの独壇場みたいになっちゃいました。解せぬ。

◆？

『辛い時〜辛い時〜何故か、何故かもっと辛い事がやってくる〜辛い時〜辛い時〜3人でお出かけを提案された時〜あぶれる私〜』

家に帰っておりんの配信を視聴する。ああこれ…悩み相談されたときの内容か。あのめっちゃ嫌そうな顔してたときにお出かけ提示

されたのを聞いたときは流石に可哀想と思いました。

コメ欄は「おりんの謎歌だ!」「世知辛い」「余りん」と哀愁漂う雰
囲気になった。世の中世知辛い!

『辛い時〜辛い時〜陽キャにめっちゃ絡まれる時〜めっちゃ逃げたい
私〜辛い時〜辛い時〜疲れている時に限ってかかってくる職場の先
輩からの電話〜』

悲しいなあ…。ああ、これが多分昨日の出来事なのかな?だとした
ら辛い。おりんお仕事やめないで。

コメ欄は「つらい」「つらい」「わかる」「つらい」と共感のコメント
が流れていく。

『というわけでおりんラジオ、開幕です。昨日は体調崩して今日は病
み上がり即重労働で私の体はボロボロですよ、労働者のみなさんの気
持ちよくわかりましたよ』

ええ…。相応のお金貰えてるからイーブンだってイーブン（震え）
決してブラックな職場ではない…はずっ!

コメ欄も「世知辛い」「やめやめろ!」「萌え声で生きていけ」との
コメントが見える。なんか数名ブラック企業に勤めてる方が見え隠
れしていますな…。

『今日のテーマは、貧乳と無乳です。ちなみに職場の先輩は貧乳です、
あれ』

残念!!私は巨乳だ!!私が誇れる物はアニメ声と巨乳なところだけ
だから!!顔?まあ自分好みではある。スタイル維持は辛いからしな
い…。まあそこまで太らないんですが。

『さて一通目、リバーシブルボディさん、背中かな?「私には乳があり
ません、乳が憎いです」凄い憎しみですね、あ、ちなみに私はいりま
す、残念でしたね』

あれ?おりん胸あったつけ?うーん…あ、あったわ。まあ翼さんよ
りかは大きいな。

コメ欄は「うそつけ絶対虚無だぞ」「おりんがマウント取りに来てる
という事はおりんは普通にあるぞ!」と嘘か本当かを推測するコメン
トが流れる。おりんがイキってるから本当。これでおk。

『次は……ルナーさん「私の方がおっぱい大きいわ！男だけど！」胸筋かな？贅肉かな？』

多分その方は胸筋だと思います。どこかでなんか見たことある名前とセリフだなあ……。

『次、荒野のヒップさん「尻ならある」胸はないんですね』

残念、私はまだ今のところはボンキュッボンだっ！スタイルの良さなら負けねえぞ！

コメ欄は「なんで男なんだ」「尻は大事だぞ」「わかる」とコメントが流れる。ここには変態しかいないのか（困惑）

うーん……これはまたおりんが頭を悩ませるような方が配信に来ちゃったかく……。

まあた風鳴 翼さんが、公式アカウントでまた見に来てるよー!?

『あのですねー翼さん、また公式アカウントになってますよ！』
そういえば前見に来たときに抗議していたなああって。

コメ欄も「翼さん来てるん!？」「ウエルカムトゥアンダーグラウンド」「闇の中へようこそ翼さん」「翼さんに媚を売って行け！」と大荒れ模様。頼むから君達は落ち着いて。

＜@風鳴翼【公式チャンネル】：おりんさん、コラボ放送しませんか？

うん。うん？うんん？あつそつかあ……（思考放棄）

『え、マ〜？マジでいってますか翼さん、ちよつとこの石の下のダンゴムシみたいな配信者とコラボって……ちよつと私の方が炎上してしまいますよ!?!』

KORABO!?!えっおりん翼さんとコラボしちゃうのっ!?!おりん燃えちゃうよ!?!

コメ欄は「炎おりん炎」「炙りおりん」「オフアーキター!!」「おりんが遠くに行ってしまう……」と阿鼻叫喚の地獄になっています。許して。『私はですね〜皆さんの日陰なんですよ、私がひだまりになってしまったらダンゴムシさん達が焼け死んでしまいます、だからこの話はどうですかね〜』

本当に私焼け死んじゃう。許して翼さん。おりんは遠くに行かな

いで。

しかしコメ欄は「いけ、おりん!」「おりんが高みに昇れば日陰はもっと増えるはずだ!」「おりんが居る場所が日陰だよ…」とコラボを促す声が聞こえる。

ヤメルオ!!おりんはもつとローカルな感じが大好きなのっ!有名な人の配信はなんか緊張するからたまに失神しかけて配信の一部を見れなかったという地獄を味わうから許して。

『だっ……だめですよ!私なんて日の下出てはいけないしつとりとした闇なんですよ!』

そっそうだそうだ!だから翼さん許して!正直コラボは見てみたけれど明らかにあなたのファンがおりんの方に来る確率が高いから!

∟@風鳴翼【公式チャンネル】:私も、海外への挑戦を考えています、今までのファンも大事にしつつ、新しいファンを増やす。おりんさんもそういうチャレンジをしてみませんか?

『そんな重大情報場末のラジオで流さないでくださいよ!?私にフロンティア精神はありませんって!』

海外マジですか。なんで最新の最新情報をこんなところで公開されるのかなあ…。

コメ欄は「おりんがクソザコと化してるぞ!」「どうか翼さん海外チャレンジマジか!」「おりんも世界に羽ばたくのか…:胸が熱くなるな!」でも今日のお題貧乳と無乳だったぞ」と騒然としている。今日のお題やめーや。私は巨乳だっ! (自信満々)

∟@風鳴翼【公式チャンネル】:おりんさん、だめですか? 『だっ…』

おっ、これは断るのか!?翼さんごめんなさい!おりんに悪気はないなら彼女の断りを受け入れて!!

『くそっ……一回だけですよ、たった一回!通話配信!それ以上は妥協しませんからね!!!』

あゝあゝあゝあゝあゝ!!!こうなりや私も応援するぞコンニャロー!!絶対にこれだけは見逃さない!!配信一回たりとも見逃したこ

とないんですけどね。

コメ欄は「ギター!!!」「おりん、ナイスガッツ!」「伝説に立ち会ってしまった」「祭りだ!祭りだ!」とお祭り騒ぎだ。やばいコメントの流れが早すぎて見えづらい!というかまたダンゴムシが一万匹突破してんぞ!

『とにかく日程合わせるために翼さんは後程メールフォームからメッセージください、申し訳ないですが今日のおりんラジオはここで終了です!まさかこんな事になるなんて想定してませんでしたからね!おい!ダンゴムシども!私には構わないけど翼さんに無礼なコメントするんじゃないぞ!以上!ラジオ終了!』

コメ欄は「おつおりん!」「安心しろ、おりん」「おりんがこんなに大きくなって俺も鼻が高いよ」とコメントが流れる。誰だまた親面してるやつは。

配信が終了する。変に緊迫の瞬間に立ち会った所為で私今体が震えて失神しそうです。

翼さんのコラボかあ…。おりん大丈夫かな?緊張しすぎて何かドジしないか今から心配だよ…。

とりあえず寝るツ!私は疲れたんだ!失神してでも寝てやるツ!

次の瞬間、緊張の糸がほぐれたのか一瞬にして意識がブラックアウト、解せぬ。

幸運ダンゴムシ

「私を手離さないで」

目の前で「レーヴアテイン」を纏った私が私にそう言った。

これは夢だつてわかる。自分で体を動かせない。これが明晰夢つてやつなのか。

「私を手離さないで」

私が私に歩み寄ってくる。私の手は目の前の私の手を掴む。ようやく動くようになった口で私はこう言う。

「離すかバーカ」

◆?

「ふえっ!?!」

夢か…。なんか凄い恥ずかしいこと言った気がするけど気のせいだろう。気のせいだったら気のせいなんだ。

SNSを見る。うわー…おりん…というか翼さん凄い人気だね。あとゲロ音MADの再生数これ以上伸びるのヤメロ。既にミリオン達成してるでしょ!?!これ以上は許してあげてよお!!これを作ったこ

とに私は反省と後悔をしています。ちなみにミリオン達成時は座ったまま失神してました。

とりあえず落ち着け私、家一人で失神して倒れるのは火曜サスペンス並みの所業だぞ。それだけはいけない。

私は朝の用意を済ませて学校に向かう。途中で加賀美さんと出会う。

「おおおはようございます加賀美さん！」カタカタ

「あ、織田さん。おはようございます」

挨拶し返された。なんか泣ける。朝早くから泣きたくないから我慢する。

「ええええっと…翼さんとのコラボ、おおおめでとうございます」カタカタ

「あ、ありがとうございます…」

加賀美さんに祝いの言葉を送ると、加賀美さんは顔を引きつらせて苦笑しながら私に返事する。流石おりん、メンタルが弱い。ごめんなさい私の方が弱いです（諦め）

加賀美さんと一旦別れ、私はさっさと学校に向かう。ようやくここへの登校に慣れたかも。

◆？

「えっ!?!まっまっマジですか!?!」

「ええ、全然いいですよ」

「アッ…!?!」

私は喜びと驚きと困惑と緊張によって一瞬にして意識がブラックアウト。

次目を覚ました時には地面に横たわっていて、翼さんのマネージャーである緒川さんに呼びかけられていた。あ、頭痛い。こりや思いつきり打ったなちくしょー。

「あだだだだ…ほ、ほほ本当に配信を見ていいんですか!?!」ガタガタ「はい、翼さんが是非と」

「あつ…ごめんなさい今すぐ支えてください!!あつ…」

私は気を失う直前に緒川さんに受け止められる感覚を感じて再び意識を失った。

次に目を覚ましたときは初めてここに来たときに気を失ったときと同じ場所に寝かせられていた。解せぬ。

なんと私、間近でおりんと翼さんのスタジオ配信を見ることになったらしい。いやスタジオ配信とか初めて聞いたんですけど。というか私本当に居ていいのか!?!倒れるぞ!?!

マジで倒れるかも。配信中にだけは絶対に倒れんぞ。

とりあえず緒川さんに謝罪とお礼をして話を聞かせてもらおう。

どうやら翼さん、機械が苦手らしい。まあ、これは想定内。だからスタジオで配信するらしい。はい想定外。

どうして私が出てくるのかが謎だ。と思ったら私おりんのリスターってバレてたっぽい。解せぬ。国の力つええ。

私は再び緒川さんにお礼を言う。私は地上に出て帰ろうとする。これは早く寝ましょう。正直まだ頭痛いんですよ。

広がる日陰喜ぶダンゴムシ

家に到着する。正直まだ信じられない。私がおりんの配信を見る
ことが出来るなんて。正直泣きそうです。あ、っ：頼むから家の中
で気絶だけは控えてって言うてるでしょ私！

家に帰ってきてから時間が経つと、おりんが翼さんとのコラボ配信
の告知をする。

コメント欄には「スタジオ配信マジで!? やったな!」「お昼時点で翼
さんの公式告知で出てたぞ」「おりんがんばれ、超がんばれ」「おりん
もデカくなったな」「大丈夫? おりん生きてる?」「おりん翼さんの
ファンだったもんね、よかったね」「でもおりん絶対クソザコ状態に
なってるぞ」「イキれないおりんが楽しみだ」と皮肉混じりの応援コメ
ントで溢れていた。というかまた親面してるやついるな?

更に、「いくらおりんが遠くに行こうともおりんの影に俺達はある
ぞ!」「おりんの居る場所がスタジオやステージになっても、おりんが
いるならそこは日陰だ」「だから安心して行け! おりん!」とおりんの
背中を押すようなコメントが。ごめんなんか泣きそう。お前らに泣
かされるとは一度も考えたことなかったよちくしょー。織田 志乃、
人生で一生の不覚。

おりんの配信が始まる。

『これから大きな舞台に立つ私でも、変わらずに日陰と思ってくれる
ならば、いつも通りあなた達は私の闇を笑え、それが私の救いで、一
番の応援だ』

お、おう(困惑)おりんらしくない発言! これはイキってますね(確
信)あれ? おりん泣いたのかな? 声がなんか泣いてる時みたいになっ
てる?

コメント欄は「おりんポエムだ」「おりんは日陰、俺達ダンゴムシ」「し
めっぽくするな」「気取るな」「イキるな」といつも通りのおりんを馬
鹿にするコメントが増えていく。流石おりん、こんなときでも馬鹿に
されるんだ。いいぞお前らもつとやれ。

『という事で君達には死んでもらう、今日はBLゲー配信だ、今日は女装少年モノだぞ!』

許して。BL配信は見たくないんです!!けど見ないと明日への活力がー!!あゝー!!ごめんなさいー!!!

コメ欄も「ウワーツ!」「ウワーツ!」「やめて」「ゆるして」「待ってた」「ノンケを引きずり込め」「急に汚りんになるのやめろ」と正に天国から地獄である。誰だよ蜘蛛の糸垂らしたやつは、絶対に許さんからな。

『ちなみにコラボラジオのタイトルは風鳴翼さんと私の名前からとつて「風りんコラボ」おりんラジオ／最後の審判で日曜日の20時半から部屋を立てますからよろしく!』

お、おう。だからBLだけはやめてね?

その後、配信中私は顔を真っ赤にしながら時折顔を塞ぎながら配信を見てました。うう…(泣)

◆?

配信当日までは特に何と言った出来事は起きなかった。まあ櫻井さんがなんかサボってるらしくそのお陰で加賀美さんと私と立花さ

んは特訓だよこんちくしょう。なんで筋肉痛にならないのかがふつしぎ。

一応戦えるには戦えるけど…立花さんと加賀美さんにも負けてるしなあ…。

この「レーヴァテイン」が使えるアームドギアは今のところ2つ。

1つは「レーヴァテイン」、剣だね、うん。

これかなり大きい両手持ちの剣でね、全長は私ぐらいある。なぜ持てる私。あんまり重いつて感じはしないけど片手ではあまり持てぬ。すつごく斬れ味がよくてすつごく硬いつていうか傷1つつかん。防御にも使えるとか便利、なにこれ。あとなんか炎を纏ったりこれを振るって炎を飛ばすとかもできる。汎用性高いねこれ。司令には真剣白刃取りされた。解せぬ。

も1つは「スチーム」、腕肩腰脚の左右に1つずつ付いている。これの噴射口から高温の蒸気を噴射できる。連続運転最大10秒。

これもかなり便利、後ろに噴射することで直線運動をかなり早くできるし、方向を調整すれば小回りも利く。相手の顔に吹きかければ不意も付けるし、しかもその場に撒き散らせば私の身を守ることができ。 「レーヴァテイン」は耐熱凄いからね。司令には速度強化しても受け止められるし、何故か目くらましが効かなかったよ…。

戦歴は司令に15戦15敗、立花さんに15戦5勝10敗、加賀美さんに7勝8敗。うーん…（微妙）

まだまだ弱いなあ…。 「レーヴァテイン」、私味方相手に戦いたくないよお…。

私が心の中でそう呟いた瞬間、「レーヴァテイン」のペンダントが淡く光って気がする。でもまあ、気のせいでしょう。だってシンフォギアは人じゃないし心があるかどうかわからないし…。

でもまあ、気にしたら負けか。とりあえず配信を待て、話はそこからだ。

◆？

日曜日。現在は翼さんと一緒に喋りながらおりんを待っています。正直倒れそう。まあ何か私が倒れたら一応受け取っというとは緒川さんに言っておいた。緒川さん優しい。

「……………というところが私はおりんの魅力だと私は思います！」イキイキ

「わかるわ。織田さんとは気が合いそうね」

「わっわわ私なんてただのダンゴムシです…」カタカタ

なぜか意気投合しかけてるのは何故なのだろう。だかしかし、嫌ではないのも何故かはわからん。

おりんが来た。

「こんばんは、翼さんと織田さん」

「待ってたわ……………詩織」

「……………」ガタガタ

ごめんなさい2人が揃った瞬間私緊張が一気にきました許して。今考えたらさつき翼さんとなぜ会話できた私。

翼さんがおりんに手を差し出す。しかしおりんはそれを取らない。チキったなおりん。気持ちはわかるぞおりん。

そしたら翼さんが自分から手を取りに行った。これ私されたら間違いない失神確定ですね。見てるだけで気を失いそう。というか

口の中があまーい。

「大丈夫、詩織が少し内気なのはわかってる、だから私が引つ張って行く」

その言葉を聞いたおりんが顔をあげる。あの表情はおそらく死にかけてるな？ 私にはわかる。

「あ……アツ……そう……そうですね！ 行きましょう！ 時間はもうすぐです、光と闇のラジオを始めましょう！」

「ふふっ」

私が死ぬのが先かおりんが死ぬのが先か、そこらへんの勝負だと私は思う。まあどちらにも既に瀕死だというのは多分異常。

『おりんラジオ、最後の審判』

『ゲストは私、風鳴翼でお送りします』

ついに始まったコラボ配信。私は緒川さんの隣で見守っています。完全に通知ですら音を消したスマホで配信のコメントを確認しつつ。なにこれ贅沢。

コメ欄は「はじまったぞ！」「おりんがイケボを演じているぞ」「萌え声を捨てるな」「マジで翼さんだ！」「とかスタジオ配信っておりん何者なんだ」「余計な詮索は寿命を縮めるぞ、主におりんの」と騒然としている。私は今耳が幸せでいっぱいです。心の中は緊張でいっぱいです。というか視聴数多いな!!おりんも緊張するわそりゃ、5万人ってなんで、イケボじゃんおりん。

『ええ、私も何が起きたのかさっぱりわかりませんがね、翼さんのお誘いで何故かスタジオで配信してるんですよ、人生何が起きるかわからないから一日一日を噛み締めて生きるんだぞみんな、ところでなんで翼さんは私とコラボしたいなんて思ったんですか?』

『リスナーの皆さんと楽しく話しているのを見たの、それを見て楽しそうだな〜私も混ぜりたいな〜と思って』

楽しい(笑)。思わず笑い声押し殺すのと緊張を押し殺すのに一

生懸命な私。あれを楽しんでいるのは中々の強者。私である。というか翼さんが混ざったらみんなそれどころじゃないよ。

『ところでおりんさんは私のファンという事だけど、私のどういう所を好きになってくれたのかな?』

おりんに恥ずかしい思いをさせたいという感情が見える見える…。おりんにとつて恥ずかしい質問されたなこりや。

『あつあつ……アノデスネ……私にはない輝きが、翼さんという光の輝きが……あまりに綺麗に見えたからです……』

おりん可愛い。私並みのメンタル…じゃないな、私よりもまだ強いなメンタル。泣きそう。いや、倒れそう。

コメ欄は「クソザコナメクジ」「終身名誉陰キャ」「非イキリ萌え声生主」「人気生主」といつも通りの罵倒ばかりで安心する。お前らは変わらんのな。

『ふっかわいいわね、おりんは……という事で最初の企画、私の持ち込み企画「おりんの可愛い所を上げてこう」これは私のマネージャーと私が過去のアーカイブやログから独断と偏見で選んだおりんの可愛い所をピックアップしてくコーナー』

『ウワアーツ!!なんて企画持ってきてるんですかね翼さん!?!』
やったぜ。なんと素晴らしいコーナーなんだ。正直気になるので嬉しい。ほらお前ら喜べよ。

コメ欄は「翼さんおりんを呼び捨てだーッ!」「仲良し」「おりんは可愛さを売って行け」「BLゲームで地獄を見せた女とは思えない」と楽しんでるコメントが続く。というかお前ら本当に楽しんでるな。私もだけど。

『おりんの可愛い所その一「声」その可愛らしい声を巧みに使い分けていく』

わかる。おりん配信の芯の芯、基本にして原点である。わかってらっしゃる翼さん。

コメントも「確かに」「それに釣られたのが俺達だ」「基本よね」ま、まあわかるけど……。と共感の声が。流石我らダンゴムシ軍団。

『おりんの可愛い所その二「イキリ失敗」頑張つて強がって見せるけど

強がれてない所』

イキリ成功殆どないよねおりん。失敗するのもいいけどもつと成功してもええんやで？

ダンゴムシ達も「クソザコおりんの代名詞」「おりん惨敗シリーズ」「わかる」と再び共感の声が。というかもう代名詞レベルなのか…頻度高いなあ。

『おりんの可愛い所その三「緊張するとふにやふにやになってしまう所」普段からおりんと接しているとよくわかるけど私の前だとすぐに弱々しくな……』

『ワアーツ！翼さんちよつとまっ』

まずいですよ!?!これは身バレか!?炎上案件か!?やりそう！誰か特定の仕事しそう!!許してあげて!!

コメ欄も『『普段』から!?!』『まっっておりんとリアルで繋がりに!?!』『いや待ておかしくないぞ、おりん……萌え声……全ては繋がった!』『音楽系でつながりねーなるほどなるほど……!?!』と騒ぎ始めた。落ちて着け落ち着け、とりあえずダンゴムシ達は鎮火に徹しろ。

しかしコメ欄は「まあ、別に不思議じゃないよね」「むしろおりんのトークスキルとかから只者ではないと感じていた……」「でもおりんの闇は本物だから……」「クソザコ化がリアルでも発動している時点で……」となんか予想と違う動きをし始める。よかった。燃えなくてよかった…。

『こんな風に心配性な所も可愛い所ね』

まさか狙ったのか!?翼さん…恐ろしい子!!まあ確かに可愛いね。表情も見れて私はっぴー。

コメ欄も「わかる」「翼さんにならおりんを任せられる」「おりんをいじっていけ翼さん」さっきの通り共感の声が。結構落ち着いたな。よし、トドメは私が刺そう。

(「最初から心配しているのはおりん一人だったというオチでは?」つと……)

コメントを打ち合えるとおりんがうなだれた。やったぜ。的確な攻撃ができて思わず私もにつこり。しかし未だに倒れそうである。

こんなメンタルの弱さに怨みを。怨まれたら私死んじゃいます。

『とこんな所ね、さて私の持ち込み企画はここまで、次はおりんの企画だけど大丈夫?』

すっごい笑顔だ翼さん…おりんめっちゃダメージ受けてる…大丈夫?おりん生きてる? (ドス黒い笑顔)

『翼さんの笑顔に免じて…許します…ですが、その代わりに私のワガママを一つだけ聞いてもらいます』

あ、許すんだ。めっちゃ気になるぞおりんのわがまま。とりあえずコメント欄のお前らも落ち着け。

『たのしみね、おりんの企画』

翼さんもおりんを笑顔で待つ。楽しみ…。

『いっ…一緒に歌って欲しいんです!!』

『ええ、一緒に歌いましょう』

キタツ!!キタコレ!伝説の瞬間に立ち会ったぞ私は!!この日を忘れないぞ私は!!(泣) だから倒れそうになるのやめろお私!!(震)

コメ欄は「おりん、良く頑張った」「泣いた」「大 勝 利」「おりん優勝シリーズ」「ありがとう翼さん」とドンパチ賑やかなお祭り状態です。お前らもつと騒げ。

おりんと翼さんは、翼さんが選曲した、『ORBITAL BEAT』を歌った。おりん半分泣いてたけど。私?私ですか?声めっちゃ抑えてますけどボロボロ泣いてます。嬉しすぎて。

配信は終了した。第2回の約束をして。配信が終了した瞬間、私の意識が手を振りながらバイバイしてブラックアウト、緊張の糸ほぐれたな。

◆？

翌朝、昨日の夜冷めやらぬ興奮と訪れたやばい深夜テンションがベ
ストマッチ。おりんメトロノームというタイトルで私達の昨日の配
信の切り抜きと私の醜態を交互に見せていく動画を勢いで作ってし
まい、確認したら日間一位になってしまいました。ごめんねおりん、
今回は後悔も反省もしてないよ。

エスカレートする夢

最近よく夢の中に「レーヴァテイン」を纏った私、いや、「レーヴァテイン」がよく現れる。めっちゃ怖い。

なにが怖いって私の声で喋ってるけど全然口調が違うのとめっちゃくちやフレンドリーに絡んでくるのが怖い。聖遺物って何？

というかなんか顔を紅潮させるのやめい、その感情が全くもってわからないからやめて（鈍感）

私は昨日の夜勢いで作ったおりんメトロノームというタイトルの動画の伸びに絶句した後、朝ご飯を作り食べ始める。

ねえ「レーヴァテイン」、あなたは私に何を求めているの？日常会話しか夢の中で話さないのやめて、私夢の中で失神するという前代未聞の現象起こっちゃうから。私そうなたら一生目を覚ませなさそう。

私は冷蔵庫の中の食材が減ってきたなうと思ひ、買い物袋を持って外に出かける。ちなみにこの買い物袋は、母が昔から愛用していたものである。ノイズに殺された時も、これを持っていった。

灰が付着していたが、綺麗に払い落とした。

お母さんに申し訳ない気がした。けど、お母さんに執着するわけにはいかないし、私はおりんの配信があれば生きていけるからノープロブレム。

「ねえそこの君、俺達と一緒に遊ばない？」

「……………」プルプル

完全に忘れてた。暇だし気分転換に少し遠回りしようという考え甘かった。この私の隠しきれないわがままボディのせいだネ！

ごめんなさい許してください。そういえば普段はお母さんと2人だったからナンパなんてされたことなかったな。これがナンパなのか。

正直怖い。怖くて泣きそう。何されるんだろう。

「黙ってないでこっち向いてよ〜」

「ヒツ…………」プルプル

私はシンフォギア装者。ノイズから人類を守る正義の味方。

しかし私は別にシンフォギア装者として戦っているわけじゃないし、殆ど一般人だし、寧ろそこらへんの一般人より弱い。

「ほら、一緒に行こうぜ」

「ヒイツ!?はっはは離してください…!」プルプル

手を掴まれた。泣きそう。というかもう泣いてる。本当に勘弁して欲しい。

「離してッ!」

私が手を思いつき振ると男の人の手が離れると同時に凄惨な風圧が発生する。

なにこれ。私こんなに力ないはずだよ？

…あはは、気のせいかな。目の前に夢でみた「レーヴァテイン」が見える気がする。目をこすって再確認すると、「レーヴァテイン」はない。気のせいかな。

「…チッ!舐めた真似しやがって…!」

男の人達は私のことを取り囲むようにする。ああ、本当にもうダメ

かもしれない。

「む、そこにいるのは織田くんか？」

そんな私を助けに来たのはまさかの人物、風鳴司令。正直に言う。勝ったな（確信）。

◆？

その後司令が威圧だけでナンパの人達を撃退した。強い（確信）。

夢の中に出てきた「レーヴァテイン」の話はしなかった。したら変に心配されそうだったから。

私は買い物を終えて家に帰る。今日のおりんの配信は昼に告知された通りなら懺悔室らしい。

配信が始まる。

『あなたの罪、許します』

私は早速コメントで「白状します、おりんの吐いた音で音MADを作りました」と書く。

『まず一件目「白状します、おりんの吐いた音で音MADを作りました」てめえかよ!!!絶対許さねえからな!?!』

ごめんなさい許してください。私の深夜テンションの仕業なんで

す。

コメ欄は「鼓膜を破壊するな」「許してなくて草」とコメントが流れる。これ一生許されないかな…（泣）

おりんと銀髪とノイズ

今日のおりんの配信はお休みである。ちくせう、明日のやる気は大丈夫かな？

でも流石に理由はわかる。今日は翼さんのライブらしい。おりんの悩み相談（笑）を聞くに、翼さんからVIP席を用意してもらったらしい。正直私はおりんほど興味はないけど、それなりには興味あるから羨ましい。

元々ツヴァイウイングは2人。しかし翼さんと、もう片翼である「天羽 奏」は、2年前にライブ中にノイズが大量に発生する惨劇により死亡した…らしい。

立花さんの扱う「ガングニール」というシンフォギア。元々は奏さんの物だったらしい。聞いただけの話だが。

今回のライブは2年前にそんな惨劇があった場所と同じ場所。つまり翼さんは、大事な人の死を乗り越え、前を向こうとしている。

少し気持ち暗くなると、半透明の「レーヴァテイン」が現れて、私の頭を撫でる。

レーヴァテインは最近ちよくちよくこうして出てくる。撫でられた感触はないけど、ペンダントを介して気持ちは伝わる。

フラフラしながら歩く。すると、ベンチに加賀美さんが座っていた。う、うーん…どうするべきか私…。ゆ、ゆゆ勇気を振り絞れば行けるはず！

「かつ加賀美さん！こ、こんにちはあ？」

「変な口調になってますよ織田さん」

おっと失敬。…ありがとうございますレーヴァテイン、だけど今はいいかなちよつと見られたりするの困るから！あ、しよんぼりした？ごめんね？

「なつななんんか落ち込んでますね、大丈夫ですか？」カタカタ

「え？ええ大丈夫です」

「いいいつも通りわわ私でよければきき聞きましたよるか？」カタカタ
「…ありがとうございます。私、友達って分からないですよ。憧れ

の人にせっかく友達と呼んでもらえたのに、何処に居ればいいのかまったくわからないんです。はつきり言って、その人の隣に居るに相応しいだとか相応しくないだとか考えてしまうんです」

「…いい、いいんじゃないですか？とっ友達ってよよ呼んでもらえるってここことは認められてるし証拠ですから、あああんまり悩むべきじゃないですよ」カタカタ

「…そういうもんですかね？」

「むむ寧ろ配信のときみたいにし、してたらあいと思います」カタカタ
「…そうですか」

私達はお互いに話し始める。レーヴァテイン大人しくしてて、感觸ないけどわかっているからね!?頭撫でてるの!!

途中から銀髪の女の子がやってきた。名前は雪音クリスというらしい。…なんかボロボロだ。

「クリスさん、また会いましたね」

「おう、何か悩んでるみたいだったからな」

「……………」カタカタ

「それじゃまるで私の悩みを聞きに来たみたいじゃないですか」

「あるんだな、悩み。というかそいつ大丈夫か？」

「常にありますよ、人は悩みと闘からは逃げられませんからね。織田さんは平常運転です」

「……………」カタカタ

私人見知りなんですよ。いつになっても初対面の人と出会うと緊張して喋れなくなるしたまに泣いちゃうし。

「じゃあ、お悩み交換会でもしましょうか」

「なんだよそれ」

「私、配信をやってるんだけど、よくダンg……リスナーの皆と悩みを打ち明けたり、一方的にぶついたりして発散してるんだ」

「あんたのリスナーってなんだか迷える子羊みたいなイメージがあるな」

迷える子羊で……私は別に迷ってまないですしい。

「ただのダンゴムシですよ、石の下にいる様な日陰の生き物みたいな

「奴らです」

「グブウ…」 チーン

私のメンタルがー!!私のメンタルそのものがー!!…ありがとう、今頭撫でてもらうのは嬉し。

「すげえ例えだな…おいそいつなんかダメージ受けてるぞ」

「だ、大丈夫です…貧弱メンタルに加賀美さんの言葉が…」プルプル
「じゃあアンタの悩みを打ち明けてみるよ、言いだしっぺの法則って奴だろ」

加賀美さんは私に言うようにクリスさんにも悩みを打ち明けた。
…ん?嫌な予感がする?まあ、今はちよつとペンダントで大人しくしててね。

「難儀な奴だな、アタシやソイツに今こうしてるみたい隣に居てやればいいんじゃないか?」

「それはあなたとの関係がそんなに深くないから出来てはいるんです。
…織田さんとの付き合いは浅くはありませんが。私が怖いのは幻滅、あの人に嫌われたら生きていけない、かもしれませぬ」

そんなもんかなあ。そんなこと、あんまり考えたことはなかったなあ。私は悩みは即刻解除できるものしか悩まない。それはそれ、これはこれ理論。スパツと割り切っちゃうのです。

「……わからなくもない、な」

その後も加賀美さんとクリスさんとの悩み相談は続いた。…私もたまに投入されるんですけど。なんで?

「ツ……!?!」

クリスさんが何かの異常を感じ取ったらしく、私と加賀美さんの腕を掴んだ。

「どうしました?」

「なつ、なななにかあつたんですか?」カタカタ

正直倒れそう。私泣きそうです。緊張であればばば…!

「炭だ、ノイズが近くに居やがる」

よく見ると空中に黒いのが飛んでいる。これがノイズ。つまりお母さんを殺した元凶。

「いつつも迷惑掛けてんなお前!!」

「ごめん、クリスさん、ちよつと内緒にして欲しい事があるの」

「こんな時になんだよ、危ないから逃げるぞ」

「私、ノイズと戦えるの」

加賀美さんはクリスさんにそう告白した。非常事態。国家機密とかは関係ない。いい判断だ、流石おりん。

どうやらおりんの端末に着信が来たらしく、スピーカーをオンにしてくれる。

『はい、加賀美です』

『加賀美くん、織田くんもいるな!?』

『…は、はい、います…』カタカタ

『すぐにその場から離れる!ノイズの反応を検知した!』

『司令、私。戦います』

『わ、私も、戦います』

『加賀美くん!!織田くん!!』

『翼さんはライブを楽しみにしてました、いつも守られている分、今日くらいは私が守ってもいいじゃありませんか』

『私は……………』カタカタ

『待て、加賀美くん』

加賀美さんは司令の言葉を無視して端末の通信を切る。すると、シンフォギアのペンダントを手に持つ。

『おい、アンタ…………それは…………』

クリスさんは加賀美さんを持つてる方の手を離す。

「表の顔はただの学生、裏の顔は人気配信者、そしてその正体は正義のヒロイン、さて…………この中で嘘はどれでしょう」

加賀美さんはシンフォギア「イカロス」の聖唱を唱える。闇の中、更に黒い闇が私に纏わりつき「月」の様な灰銀の装甲を纏う。答えは明白、至極簡単。我々ダンゴムシには簡単すぎる。

「こ、答えはに、人気配信者!」

「織田さんなんで答え言っちゃうんですか…。…正解。答えは人気配信者です。所詮はちよつと最近流行ってるだけの配信者にすぎない

の」

「わっ私達ダンゴムシにはひひ非常に簡単な問題です！私の前でだだ出したのがううう運の尽きです！」カタカタ

「大丈夫……大丈夫です、クリスマスさんは私が守りますし、ノイズは全部倒しますから……」

おりんは震えている。当たり前だ。怖いと思うから。

「何が大丈夫なんだよ、震えてるじゃねえかよ」

クリスマスさんは加賀美さんの手を再び手に取る。

「アタシも戦うよ」

クリスマスさんも歌を歌う。すると、クリスマスさんもまさかのシンフォギアを纏った。

「大丈夫だ、アタシはお前を信じる。大人どもみたいに私に変な同情だとかで近づいたんじゃないって、だからとつととノイズ共を倒しちまおうじゃねえか」

二人はシンフォギアを纏い、戦う決意を決めた。私だけ逃げるのか？一番弱いから？

逃げてもいいの？いや、私は逃げたいの？ノイズは私にとって宿敵、倒すべき相手……なんだよね。

目の前にレーヴァティンが現れる。レーヴァティンは私の手を握る。そっか、さっきの嫌な予感、これだったんだね。

手が暖かい。私はレーヴァティンが握る反対の手で、シンフォギア「レーヴァティン」のペンダントを握る。

私はレーヴァティン、レーヴァティンは私。

——力を貸して、レーヴァティン

私は聖唱を口ずさむ。いつもと何かが違う。いつもはない、非常に心地よい安心感が私を包む。

「…私も戦います」

クリスマスさんと加賀美さんは私を凝視する。いつもなら緊張する。けど今は全然緊張しない。

「3人で、頑張りましょう」

「…はい、そうですね」

「ああ！やろうぜ！」
私はクリスさんと加賀美さんの手を握る。やってやろうじゃねえか。

本気、炸裂ッ！

私は現在上空を飛行中です。加賀美さんのギアで連結して抱えられています。クリスさんは背中です。

「足元が無いから不安なんだが」

「クリスさんの頭が胸に当たって違和感がありますけど、大丈夫です……っう」

「お前今「くさい」って感じの声出しただろ!？」

「なんでそんなに鋭いんですか！確かにちよっと匂うなって思いましたけど」

「……2人とも何やってるんですか……」

上の二人が騒がしい。このテンション絶対今から戦うッ！って感じじゃないよ……私だけハブられてる、悲C。

「加賀美さん加賀美さん」

「ん？なんですか？」

「ノイズが見えてきたので真上で私を切り離してください」
「……………は？」

「私は地上戦しか出来ないの、空中戦は任せます」

「そ、そうじゃなくて……大丈夫なんですか？」

「大丈夫だと思います」

だって、レーヴァティンが、「任せて」って私の中で言ってくる。ならば私は、それを信じたい。私はレーヴァティン、レーヴァティンは私だ。

ついにノイズ達の真上に到着する。私もレーヴァティンも準備はOK、いつでも行ける。

「じゃあいってきますよ織田さん！どうなっても知りませんからね！」

「はい、お願いします」

すると、ギアの連結が外れ、私は落下を開始する。怖くはない。

近くにノイズが飛んでくる。着地の落下速度減少に蒸気噴射は使いたいし、このまま見過ごしてくれるとは思えない。

私は虚空から現れたレーヴァティンを両手で掴む。

「そりゃあっ！」

そして、私は飛んできたノイズを、上手く体の向きをレーヴァティンに手伝ってもらいながらノイズを斬り伏せる。

「ううう…だっしやああああ!!」

地面にノイズが大量にいて鬱陶しかったので、両手でレーヴァティンを思いっきり地面に向けて投げつける。空中に浮かんでいたノイズも巻き込みながら高速で落下していき、地面にぶつかるると同時に地面が砂煙に包まれた。

私は顔を下にして体を一直線に。抵抗が少なくなり、落下速度が増していく。そして、地面にぶつかる前に体勢を元に戻して全力で蒸気を噴射する。

落下速度は殺しきれなかったが、コンクリートの地面に小さいクレーターが出来た程度で、上手く着地できた。

着地した先には先程投げたレーヴァティンが、地面に半分ぐらい埋まって突き刺さっていた。

私はそれを勢い良く引き抜く。ノイズ達は2つの勢力に拡散。加賀美さん達の方と、私の方。

「…っしやおらああああ!!」

私の叫びと共に、私を包むレーヴァティンも呼応する。ノイズはぶっ潰す、手加減なんてしねえぞオラア!!

「セイツ!!」

私は大きく横にレーヴァティンを薙ぐ。剣と、剣の剣風でノイズ達が消える。

「イイヤアアアツ!!」

そのまま後ろに突き刺さったレーヴァティンの勢いを利用して後ろに大きく跳ぶ。そしてそのまま後ろにいたノイズにレーヴァティンを叩きつける。それだけで何体ものノイズを倒すことができる。

「アアアアツシャツラアアア!!」

隙を作っちゃダメだ。私はそのまま思いつきり横に凧ぎながら跳ぶ。そして、空中で横回転と共にレーヴァティンを振り回す。

「ツ…加賀美さん、クリスさん…!」

要塞のようなノイズが加賀美さんとクリスさんを狙っている。しかし、向こうを信用しなくてはならない。

レーヴァテインが私を後ろから抱きしめる。暖かさが伝わる。
「ツシャアッー」

ようやく蒸気噴射をする機構が、全身10秒蒸気噴射連続運転の代償のクールダウンから抜け出した。腕の噴射機構を、クールダウンに入らない程度に使い、更に剣に炎を纏わせて思いつき一回転して剣を振る。

速度アップによってより強くなった剣風に、レーヴァテインの炎が加わり、大量のノイズが一気に消え去る。

ノイズ達が加賀美さん達の方を見る。どうやら対空攻撃のよう。

「こつちを見ながらくたばりやがれええええ!!」

させるかアホ。私は炎を再び纏わせたレーヴァテインを、背中の装甲から各蒸気噴射機構に繋がっていて、取り外し可能、ある程度伸びるプラグを右腕の噴射機構から引っこ抜き、引っ掛け、投げる。レーヴァテインは高速で回転しながら次々とノイズを潰していく。

プラグの伸びが上限に達して、私はそのままレーヴァテインに引っ張られる。私はプラグを引き寄せ、レーヴァテインを手取る。プラグを右腕の噴射機構に突き刺す。

「くだばれやあああッー!!」

私はそのまま右脚を伸ばしながら右脚の噴射機構を起動、そのまま前方にいるノイズに飛び蹴りの形でトドメを刺した。

地上のノイズは全部倒し、地上の状況は終了した。それと同時に、要塞型のノイズにミスイルが命中するのが見えた。

加賀美さんが地面に着地し、ギアをクリスさんから切り離すと――
??いた。なにやってんだああああ!!

私は初戦闘、死なずに済んだ。：加賀美さんとクリスさんは、最悪だったみたいだけど。

◆？

戦闘は終了、私は自分のスマホを見る。：残念おりん、ライブは終わっちゃったみたい。レーヴァテイン、私は大丈夫だから撫でなくていいよ。

「で……どうすんだよ、あたしを無理矢理にでも連れて行くか？」

「しませんよ、そんなこと」

「わっ、私もそんなことしししたくないです……」カタカタ

クリスさんは見た感じ悪いって感じはしないし、私達に協力してくれたから悪い人じゃないのはわかる。：まあ、男勝りな喋り方ではあるけど。

「私は貴女の意味を尊重します、クリスさんが来たいと思った時にも来てください」

「……………」コクコクカタカタ

ああ……まだ人見知りが適用されてる……仲良くなるんだったら、早くこの緊張をなんとかしないと……。あ、レーヴァテイン手繋いでくれるの？ありがとう。けど緊張は和らがないかな？

「お前、本当に変わってんな。アイツらの仲間なら無理にでもアタシを追っかけてくると思ったんだがな」

「私を立花さんみたいなの陽キャと一緒にしないでくださいよ、私は自分からそういうグイグイいける性格じゃありません」

「……………」カタカタ

「あんなに熱くなつてたのかー?…ソイツはいつになったら落ち着くんだ?」

「す、すいません…」

ああ、ほんと、自分の弱さに泣きたくなる。今泣きそうなんじやなくて、緊張で倒れそうだけど。レーヴァテイン、もし倒れたら支えてね。

「それは……大事な人の晴れ舞台を潰されたくなかったから……」

「はーん、アイツだな。風鳴翼」

「っ!」

「凶星かーそつかそつかあお前の言っていた友達っていうのは風鳴翼の事だったかあくそりや立つてる場所が違うわな」

おりんめつちや顔とか言動に感情出るよね、正直でよろしい。私は感情が正直すぎて逆に拗らせて倒れそうです。こんな自分が情けないよ…。

「でも、だからこそ横に居てもいいんじゃないか?」

「えっ」

「なんでもねえ、ただちよつと……一人は寂しい、だらうなって思っただけだ」

「クリスさん……クリスさんも、一人が嫌になったなら、いつでも……私の所に来てくれてもいいんですよ?」

あ、勇気出したおりん。私の何百倍もの勇気、羨ましい……。私ですか?いつでも震えてるクソザコダンゴムシです。うーん……一応頑張ってみよう。

「はっ、んな事できるかよ、これ以上お前に迷惑はかけたくねえ」

「そんなに迷惑に思っつてない、むしろ私の知らない所で死なれてたりしたら……」

すると突然加賀美さんが尻餅をつく。えっ!?今は気絶だけはしないでね!?そしたら私も一対一とかいう敗北確定の戦いで気絶してクリスさんが困惑しちゃうよ!?!…あ、疲れが出ただけ?なるほど、そうでしたか。焦ったあ…。

加賀美さんはクリスさんによって家に送られた。私は一応大丈夫だったのですが、そのまま自分の足で家に帰る。

家に到着すると同時に、二課から電話が入ってくる。どうやら私を心配してくれたみたいだ。心配はレーヴアテインだけで充分ですよー。

私はベッドに飛び込む。あんまり上手く動けなかったかな？ちやんと戦えたかな？そんな心配をしながら、私は眠りについた。

私とレーヴァテイン

今日は加賀美さんが休んだ。どうやら体調が優れないみたいだ。大丈夫かな？

私は少し寂しくなり、授業中にも関わらず居眠りをし始める。正確には眠ることがメインではない。「夢を見る」ことが私のメインだ。

私は前の人で先生が見えないように体勢を調整し、机に伏して寝る。

◆？

夢の中。普通なら明晰夢なので動けない。けど、何故かはわからないが手足は自由に動かせる。

現実とは違い、半透明ではなくくつきりと実体があるレーヴァテインが私の方に寄り添ってくる。

レーヴァテインの見た目はレーヴァテインを纏った私。だが私よりも幼い。つまり私と出会う前の姿。なぜ知ってるかは知らないけど、気にしないでおう。

「ねえねえレーヴァテイン」

「なにー?」

「私、みんなの役に立ててるかな?」

「それは、わかんない」

「そうだよね」

私はその場に座り込む。すると、レーヴァテインが飛び込んできたので受け止めて目の前に座らせる。

「志乃ちゃん撫で撫で〜」

「はいはい」

私はレーヴァテインの頭を撫でる。レーヴァテインを目を細めて嬉しそうな顔をする。

わかってる、こんなことができることは、明らかに異常なことは。でも、こうして楽しく緊張せずに会話できるのは、お母さん以外にはいなかった。だから会話するのが楽しい。

「志乃ちゃん」

「なに?レーヴァテイン」

「嫌いに…ならない?」

「ならないならない」

私はそう言つてレーヴァテインの頭を撫で続ける。これ私なんだよね…姿形は…。

「志乃ちゃんだーいすきー!」

「グツ!」

なんだ今のは!心臓が!心臓が大ダメージを!メディー!ツク!! あっあっあっ…死にそう死にそう…。

「志乃ちゃん大丈夫?」

「だっ、だいじよぶだいじよぶ……」

レーヴァテインが焦つて頭を撫でる。よかつた夢の中で、現実だったら鼻血確定だ…。あっ、なんか心臓が苦ぴー。あー倒れそ。

「ありがとレーヴァテイン…」

「よかつたー!志乃ちゃんぎゅー!」

「ちよつまっ…あゝっ……」

苦しい苦しい苦しい!!聖遺物だからかわかんないけど物理的にも

苦しいしなんか精神的にも苦しい！心臓がギユツて!!ギユツて!!
すると、いきなり世界が真っ暗になる。

◆?

「んええ…?」

私が目を覚ますと教室だった。

「織田さん、織田さん起きなさい！」

私は寝ぼけながら顔を起こす。う、うーん…助かったのか、それとも逆なのか…。

「きやああああ!!」

周りから私の顔を見て悲鳴があがる。え?なに?なんで先生も青ざめてるの?!

私はふと寝ていた机をみる。なにこれ、血?赤黒く染まってるんだけど…。え?火曜サスペンス?何か事件でも起こった?

私は鼻から何かが流れてるのをようやく知る。まさか……………。

私は鼻から流れてる液体を手の甲で拭く。血がべっとり手の甲についてた。ついでに掌も血で汚れてた。

「おわあああああつ!!」

「早く洗ってきなさい!!」
怒られました。だよーねー。

◆?

「あー…やっと止まった…」

場所は変わって女子トイレの洗面所。授業終了のチャイムと同時に手と顔を洗い終えて、鼻血も止まった。災難だった…。ありがとうレーヴァテイン、私は大丈夫だよ。

ひとりぼっちじゃない

二課に連れてこられ、シンフォギア装者となってレーヴァテインと出会ってから2ヶ月が経った。

私は屋上で寝ている。もちろん寝るのが目的じゃない。前の私の心の支えはおりんの配信。けど、今は、おりんの配信と、レーヴァテインがないと生きていけない。

「…ねえレーヴァテイン」

「なにー？」

「なんで私は押し倒されてるのかな？」

現在私はレーヴァテインに押し倒されています。なんでか？わからん。というかめっちゃドキドキして夢の中で失神して鼻血を出すとかいう謎の状況になるよ!?

「……………あはは?..♪」

レーヴァテインの顔は目の光が無くなって不気味に笑ってる。なにそれこわい。

「なんで笑ってるの?..ねえなんで服に手を伸ばすの?..やめて!..そんな展開よくないやっやめやめろおおお!!……………おっ♡」

◆?

「…はあっ!?!はあ…はあ…」

なんだこの夢は、レーヴァテイン怖い。何をされたか思い出せないし思い出したくない。

：レーヴァテイン、ごめんなさいなの?もうしない?あ、しないの?ならおっけーです。

こんな感じに、別に1人レーヴァテインがいるから1人じゃないし十分楽しい。ただし配信だけは見る。見ないと死んじゃう。

「あ、加賀美さん」

「織田さんもここにいたんですね」

すると扉から加賀美さんが屋上に出てきた。そっか、加賀美さんもここお気に入りだったっけ。

私がここで寝てる理由はもしかしたら二課から何か呼び出しがあったときにすぐ行けるから。まだ司令の前に立つと怖いしよく失神します。

「ここに居たの2人とも」

「ええ、学校だとここが一番落ち着きます」

「わっわわわっ私もでっす!」カタカタ

「私もそう思う」

屋上に翼さんが来る。もう泣きそう。助けてレーヴァテイン。とりあえず勝手に肩に乗るのやめようか、軽いけど見られてるんだっただら恥ずかしすぎる。

加賀美さんと翼さんは2人で会話している。おりんが遠くに…行かないで。ちくせう、聞いている限り甘々だぞ。

すると、3人の端末が同時に鳴る。

『ノイズが現れた!翼はそっちに向かってくれ、織田くんと加賀美くんはリディアンで待機だ』

やっぱり何かしらの連絡はあると思った。まあ私は待機だよね。というか空飛べる加賀美さんの方が有用そうだし、私も戦闘では負けてるから当たり前だよね。

「そういう事だから……行って来るわ」

「はい、じゃあ私は何時もの様に帰りを待ってますよ」

「わっ、わわ私も！ごっごご健闘をを!!」カタカタ

「そう拗ねるな、詩織のしている事も立派な仕事だよ。志乃はとりあえず落ち着いて」

ん!?名前呼び!?まあ一応楽しくは話すときは無きにしてもあらず……が！今日初めて名前呼びされて失神しかける私。一瞬意識がブラツクアウトで危険信号。

「……無事に帰って来てくださいね」

「がっががが頑張ってくくくくくくくください！」ガタガタ

「当然よ」

翼さんは行ってしまった。ちらりと加賀美さんの顔を覗く。……なんか、悲しい顔をしているなあ……おりんらしくない。

すると、私と加賀美さんの端末が再び鳴る。

『なんですか、司令』

『また何か……?』カタカタ

『加賀美くん、織田くん、もしもの場合……君達にも戦ってもらわなければならない』

『……何故ですか?』

『今、4体のノイズがスカイタワーへ向かっている。おそらくそれは陽動、もしもこのリディアン……いや、二課本部がノイズに襲われた場合……』

『わかりました』

『り、了解……です』カタカタ

『いいのか、加賀美くん、織田くん』

『いいんです、これもお仕事……いえ私のやりたい事かもしれませんね』

『わ、私もやります！だ、だって私装者ですし！』カタカタ

私達は通信を切る。思いつきり息を吸い込んで、隣に立ってるレーヴァティンを見つめる。レーヴァティンは、勇ましく笑い、私を見つ

める。

すると、爆発音とともにノイズが現れる。

「負けない…私はレーヴァテイン、レーヴァテインは私…！」

聖唱を唱え、隣にいたレーヴァテインが消え、私は赤と黒のレーヴァテインを纏う。いなくても、声が聞こえる。レーヴァテインの声
が。

私は屋上から飛び降りた。

近くで特異対策機動部一課が、生徒のみんなを避難誘導をしていた。そこにノイズが近くに現れる。

ノイズに対抗できるのは、アンチノイズプロテクター、シンフォギアのみ。

私はレーヴァテインを出現させて力強く握り、味方に当てないように調整しつつレーヴァテインを振り回す。空中からは加賀美さんが機銃を撃ちノイズ達を掃討する。

「避難誘導に集中してください!!ノイズは私達が引き受けます!」

「うううっしやあっ!!早くッ!逃げてくださいッ!ラアッ!!」

加賀美さんに大型は任せる。私は避難誘導の妨げになりそうなノイズを片っ端から排除していく。

加賀美さんはギアで剣を形成し、機銃を放ちながら突っ込んでいき、回転しながら加速して巨大なノイズをえぐり倒す。

こっちも負けてられないよね、レーヴァテイン。

加賀美さんは巨大ノイズの口の部分に機銃を叩き込むと、巨大ノイズは爆発する。

「逃げて!!!」

巨大なノイズを見た直後に加賀美さんがそう叫ぶ。

巨大なノイズに向かって機動部隊員達が銃を放っている。しかし、

後ろから小型のノイズ達が。

「やらせると思ってたのかあああああッ!!」

私は炎を纏わせたレーヴァティンを微調整して思いつきり地面に向かい叩きつける。炎が飛んでいき、後ろにいたノイズ達が全て一気に爆発する。

「一撃で仕留めるッ!!ラアアアアアアッ!!」

私は巨大なノイズに向かって走る。途中小型のノイズ達が襲ってくるが難なく蹴散らす。そのまま私はジャンプして、蒸気をフル回転。前方に高速で突っ込み、腕の蒸気噴射を使い最大速度の突きをする。

そのまま巨大ノイズを真ん中から貫通する。巨大ノイズば爆発し、いつの間にかノイズは消えていた。

「はあッ…はあッ…」

全身の装備の機械部分から排熱の蒸気が勢いよく吹き出す。見た限り犠牲者は0人に抑えることができた。

加賀美さんが校舎の中に対スピードの飛行で入っていく。私もそれに合わせてレーヴァティンを消し、同じ速度で走る。

校舎内で私の足音が響く。私達以外誰一人いない校舎は、初めてだ。

すると、誰かに無理矢理こじ開けられたようにされていたエレベーターのドアを発見する。

私は加賀美さんにイカロスのギアで連結され、一緒にしてに降りていく。

すると、天井が破壊されたエレベーターがある階層があったので、着地してギアの連結を外してもらい、中に入っていく。

そこには戦闘の名残である破壊後と血痕が大量に見つかった。かなり壮絶な戦闘だったみたい。

加賀美さんが端末でロックを解除して、中に入る。…レーヴァティン、心配するのはわかったから、落ち着いて。…普段なら私が落ち着かされる場面なのね。

「まだ追いかけてくるか、しつこい奴らだ」

そこには、金色の鎧を纏った女性がいた。

「動かないでください、動けば撃ちます」

加賀美さんはその人に向かってランチャーを向ける。やっぱり、敵って認識するよねー。

「飛べるだけしか取り得の無い玩具、耐久性も他に比べて劣る、おまけに装者はただの小娘。そっちはその玩具と比べるとマシだが、装者がメンタルが貧弱なただの小娘」

こつちの特徴を言い当てる…この声…やっぱり。というかメンタルのこと言うな！気にしてるんだぞ！

「櫻井…：了子…：…！」

「加賀美詩織、織田志乃、命が惜しければその来た道を引き返し、怯えてなさい」

この人は何かモニターに向かって操作している。近くにカプセルがあり、そこには一振りの剣が。

そういえば、二課よりも更に地下に、「デュランダル」っていうほぼ完全な聖遺物が保管されてるって。…つまり、これが目的？

加賀美さんもそれを理解したらしく、機材に向かって機銃をばら撒いていく。

「貴様!!」

櫻井さんは巻き込まれまいとその場から跳んだ。

「シャアッー」

「ガッ…!?!」

見逃すと思ったのか？私は身軽な状態のまま空中の櫻井さんの腹に飛び蹴りを食らわせる。

加賀美さんはそこにスモークグレネードで煙幕を張る。私もそれに便乗して、その場に蒸気を振り撒いて、二重の幕になる。

私は蒸気の熱にレーヴァテインの温度を合わせるようにして、身を潜める。すると、加賀美さんがランチャーから3発、何かを発射する音が聞こえた。

「ちいっ！小賢しいマネをー」

櫻井さんが叫ぶ。未だに二重の幕に隠れて見えない。

「投降してください、次は……命を奪います」

加賀美さんは櫻井さんに向かってそういう。けど、声と足は震えている。多分はったり、撃てない。

「甘いな、本当に甘い、お前は戦いを知らな過ぎる」

「何を言いますか」

「お前には撃てない」

二重の煙幕が晴れる。そこには、右腕をトリモチによって固定されていた櫻井さんの姿。

「撃ちますよ……」

「本当に甘いよ、お前も奴も……だから勝てない」

「何を……」

すると、櫻井さんの鞭が動く。多分、加賀美さんを狙ってる。

レーヴァテインが私を止めようとする。私だって本当ならこんなことしたくはない。

けどおりんはみんなの闇、居場所がなくなる。いうなら私の居場所も。

「ラアアアアッ!!ガッ…アアッ…!!」

「ツ!?織田さん!」

私の腹のど真ん中を鞭が貫いていた。凄く熱い。今すぐにも気絶しそうな痛み。

「愚かな……」

「えへへ…づ、づがまえた…!」

私は鞭をこの手で捕まえる。凄く熱くて、痛くて、気絶しそうだけど、気絶に耐えるのは慣れてる。

私は鞭を掴んで思いつき横に投げる。

「レーヴァテイン…!!——!!!」

私はレーヴァテインの絶唱を発動する。絶唱により現れたレーヴァテインは、大きく、歪に、殺傷力を増し、強大な炎を纏う。

「——ツ!!!」

その一振りの剣を、櫻井さんに向けて。

「ガアッ!!」

しまった。少しずれて息の根を止め損ねた。その瞬間、私の顔に冷たい感触が訪れる。

倒れた。それを自覚しつつ少しずつ意識も薄れていく。腹からは血がドクドクと溢れ、血溜まりが出来上がる。

加賀美さんが寄ってくる。何か言ってるようだが、目もぼやけて見えにくいし、耳も聞こえない。

私の意識は、消えた。

おはよ

暗い。何もなくて真っ暗な場所で、私は縮こまっていた。

もう何日経つかわからない。ここにはおりんの配信だってないし、レーヴァテインも、呼んでも来てくれない。

「レ……ア……イン……」

私は自分が最も頼りにしている聖遺物であり、「私」であるレーヴァテインを呼ぶ。もう3桁は彼女のことを読んだはずだ。けれど、レーヴァテインは来てくれない。

「――！」

「ツ!?レーヴァ……テイン……?」

小さく自分の名を呼ぶレーヴァテインの声が聞こえ、私は立ち上がって周りを見渡す。しかし、視界は真っ暗な暗闇。私以外に、何も見えない。

「…気のせい……か…」

私はその場に縮こまる。。もう生きていても楽しくない。レーヴァテインが、おりんがないこの今の時間は、本当にからっぽで、色が無い。

「――！」

「……………」

再びレーヴァテインの声がどこかから聞こえる。さつきよりも大きな声。

けど、今度は立ち上がらずに、その場に縮こまったままだった。どうせ、気のせい。

「――！」

「……………」

また、レーヴァテインの声が聞こえる。さつきよりも更に声が大きい。

もしかしたら、近づいてきている?もしそうなら、レーヴァテインと会うことができる?

淡い希望を一瞬抱くが、変に希望を抱いて後悔するなら、と思い希

望をねじ伏せる。

「――！」

「……………ッ！」

再びレーヴァテインの声。更に声が大きく明瞭になる。もうこの気持ちは抑えられない。

会いたい、レーヴァテインに、私は会いたい。

「――！」

「レエエヴァテイイイインッ!!」

瞬間、真つ暗だった空間が眩しいぐらいに真つ白な空間に変わる。

後ろから足音が聞こえる。私は泣きそうになるのを堪えながら後ろを振り向く。そこには、シンフォギア「レーヴァテイン」を纏った少し幼い私、レーヴァテインが走ってきていた。

「志乃ーッ！」

レーヴァテインは私に飛びつく。私に飛びつくと同時に、私のことを強く抱きしめてきたので、私もレーヴァテインのことを抱きしめ返す。

「ねえ志乃」

「…なに？」

「私を手離さないで」

そのお願いは、レーヴァテインが初めて私に言ったことだった。私はもちろん、こう答える。

「手離さないよ」

そう言つてレーヴァテインを強く抱きしめる。

次の瞬間、真つ白な空間が、消えていった。

◆？

「……………ん…ん…？」

私はゆつくりと目を開けた。目に入ったのは白い天井。ここは…病院？

次に自分の状況を確認する。横には電子モニターが設置されていて、点滴をされていた。

すると、病室（？）の中に看護師さんが入ってくる。

「あつーめ、目を覚ましたんですか!?先生ー!!織田さんが目を覚ましたー!!」

看護師さんは慌てながら病室を出て行ってしまった。頼むから静かにしてクレメンス…。なんか動きにくいので、多分筋力落ちた？

ゆつくりと上体を起こす。すると、近くにシンフォギア「レーヴァテイン」のペンダントが置かれていた。

私はそれを手に取る。すると、いきなりベッドの隣にレーヴァテインが現れる。

現れたレーヴァテインは今までとは少し違う。今までは半透明だったその姿は、くつきりと見えている。

レーヴァテインは私の頭を撫でる。今まではぼんやりとした感覚だったが、本当に頭を撫でられている感覚が伝わる。

レーヴァテインの手を握る。本物の人みたいに、暖かくて、柔らかい手だった？

「れ、レーヴァテイン、ど、どういうこと?」

「志乃ちゃんのわかりやすいように言うとね、仮面ラ○ダーエグ○イ

ドのパ〇ドみたいな感じ」

「非常によく理解した。というかなんでそれ知ってるの…」

私はゲーム病か？レーヴァテインは私に取り憑いてるわけじゃないでしょ……。

「というかそれなら…」

私はレーヴァテインの服装に目を向ける。レーヴァテインの服装は、シンフォギア「レーヴァテイン」そのもの。レーヴァテインの説明そのものなら、レーヴァテインは日常生活を送ることになるのでは？

「え、えつと…レーヴァテインはどうするの？」

「うーん…志乃ちゃんと一緒…ダメ？」

「わかった許す。だから今だけはよくわかんないけど多分リディアンの制服あるからそれに着替えて！」

「はい」

レーヴァテインが返事する。次の瞬間レーヴァテインが身に纏っていたシンフォギア「レーヴァテイン」が消え、真っ裸のレーヴァテインがそこに立っていた。

「早くッ！服着てッ！」

「？」

レーヴァテインは不思議そうな顔をしながら病室の箆笥を一つ一つ探し始める。すると、箆笥の中からリディアンの制服と、私の下着を取り出す。頼むから早く着てください恥ずかしくてまたベッドで寝ちゃいます。

着替え終わったレーヴァテインは、正直滅茶苦茶可愛かった。私よりも小さいので、服が少し大きいけど、これはこれで可愛いから許す。

「えへへ♪可愛いでしょ♪」

「自分で言うの…？まあ可愛い」

「志乃ちゃん鼻血ッ！」

「ふえ？！」

意識を鼻に向けると、何かが流れてるのを感じる。

鼻をつまんで鼻血を止めつつ、レーヴァテインから渡されたティッ

シユを受け取る。ありがたひ。

◆？

「自由だーッ！」

目を覚ましてから約一ヶ月、私は退院した。

色んな人が私に会いに来てくれた。加賀美さんに司令に立花さん。それに翼さん。翼さんが来るたびに騒然とするのやめてください数回は気絶して病院が更に騒がしくなるから！

レーヴァテインについてのことは、二課内の機密事項の一つになった。つまりレーヴァテインを出せるのは誰もいない病室ぐらいだった。正直そんなタイピングが少ないので悲C。勿論配信は欠かさず見てる。まあ大体夜遅くなんでコソコソイヤホンつけて見えます。

退院したてで多少はリハビリしてたけど、体力更にはないです…。家までが遠い。愛しのパソコン…。

「志乃ちゃん大丈夫？」

「だいじよ…だ、だいじよばない」

「あともうちよつとだから頑張れー」

「うん、頑張る」

私はレーヴァテインに応援されながら歩く。レーヴァテインがバテるの見たことないんだけど…？一応私の小さい頃の姿…なんだよね？リディアンの制服だけど。

歩き始めて十数分、ようやく我が家に到着する。鍵を開けて中に入ると、靴を脱いで急いで自分の部屋に戻る。

「じゃあレーヴァテイン、配信の時間になったら起こして！」

「えっ？病院でたくさん寝たのにまた寝るの？」

「そそ、じゃあね〜」

「む〜…夢の中に潜り込むもんね〜だ！」

私は我が家のベッドで寝始めた。

◆？

『はい、あらあ〜わかっちゃったあ』

なぜそんな櫻井口調に…。というかおりん過去何回わかったと
いってわかってないことがあったか…。

コメ欄は「うそつけ、絶対分かってないゾ」「わかった（わかってない）」「おりんに謎掛けをやらせるな」とおりんの発言を否定するコメントがたくさん流れる。

『はあ!?なんでダメなんで……ああそういう事ゝ完全に理解しました』

やっとわかったのか…(困惑)私すぐわかったよ…?やはりおりんクオリティ、理解までが長すぎる。

コメ欄も「ダンゴムシ並の知能」「壁にぶつかってようやく曲がる女」「翼さんにやってもらえ」と再び罵倒が飛ぶ。流石ダンゴムシ、容赦がない。

『おりん、そろそろ私が代わるわ』

『えーっ後少しの所でしたのに!』

おりんと変わり、翼さんが操作が変わる。

コメ欄は「やった!翼さん来た!これで勝つる!」「おりんは大人しくしてろ」と歓喜の声が大量に。流石翼さん、ダンゴムシの心を掴む掴む。

『ん?ああ……わかったわ』

流石翼さんマジ文武両道。みんなの憧れの存在だね!まあおりんの配信に来るといふ割とローカルな存在。

コメ欄からは「わかった(わかってる)」「やっぱり翼さんがナンバーワン」「おりんは歌だけ歌ってろ」「翼さんもゲーム配信やって」と和気藹々としたコメントが。

『いやいや、私の本業は歌手ですから。でもおりんの歌がいいのは同意しますね』

禿同。レーヴァテインだってお歌上手だよ!何回かしか聞いたことないけど…しかも子守唄…。

『私のラジオが……奪われている……これは面倒な事になった……』
おりんは悲しみの声を上げる。まあ、おりんは翼さんなら、とか思っただけだ。

コメ欄は「がんばれおりん」「クソザコナメクジ」「人気配信者」とおりんに対する罵倒と励ましのコメントが同時に流れる。ダンゴムシはおりんに辛辣である。

私が戦って奇しくも倒れた事件は、司令からルナアタックと呼ばれる事件として聞いた。そんな事件から結構な時間が経った。

夜空に浮かぶ月は欠け、はるか昔は玉のように美しいと言われていた丸い月はもう見れない。まあ、あまり月に愛着はないけど、日本人としては多少悲しい。

レーヴァテインのことは隠そうとしたけど司令に抗える気がしなくてバラしました。「——だとお!？」で笑いそうになるのと同時に緊張による失神直前の状態が合わさって変になりました(その後もちろん気絶)。

お腹に穴が空いた私ですが、なぜか塞がってしまいました。レーヴァテイン曰く、「体を少し乗っ取って自分自身を纏わせた」らしいです。意味がわからない。

とうか当たり前かのように人の体乗っ取るのやめてもらえる？多分他のシンフォギアはできないよね?…できないよね?

まあそんなことはどうでもいいとして、レーヴァテインとの入院生活は楽しかったからおつけーです!…まあ、寝てる間にイタズラするのはマジ勘弁…。

『おりん、そろそろ時間よ』

『そうですね、じゃやりますか、アレ』

ついに来た!おりんと翼さんが揃ったときの恒例行事!

コメ欄も「来たのか!」「来た!」「お歌の時間だ!」と喜びの声で溢れかえる。

おりんと翼さんがパート分けした曲を歌ったり、ダンゴムシ達がリクエストした曲を歌ったり。というか、私がリクエストした『Justin's』歌ってもらえて嬉しい…。一回どんな曲か聞いてたけど。ごめんね。

配信が終了する。

「楽しかったね!」

「そうだね、じゃあ私は寝るかな」

私はレーヴァテインにそう言ってベッドにダイブする。

新しい日常、大切にしなきゃ。

帰る日常

「広がる 宇宙の中 Can you feel? 小さな地球(ほし)の話しよう♪」

現在は放課後、私は新しい二課に向かっていた。新しい本部は船。私は別に乗り物酔いは大丈夫なんだけど、加賀美さんはダメみたいです。吐かないでくれよ? (焦) その前に緊張で倒れる私の方が問題なんでありましてですね…。

加賀美さんは今クリスさん達に絡まれていたはず。南無阿彌陀仏。私には関係ありません、巻き添え食らわしたら許さねえからな? その前にゲロ音MADのことで怒られそうで怖いです。

「志乃ちゃん楽しそうだね!」

隣にレーヴァテインが現れる。服装はいつもリディアンの制服なので、こうして並んで歩いていると、仲のいい姉妹みたい。見た目は昔の私だしね。

レーヴァテインがこうして現れる時は、大体人がいないとき、もしくは私が呼び出したときだ。前者の方が明らかに多いんだけどね: 勝手に出てくるから最初の方はびっくりして泣きそう。

「一緒に歌う?」

「うんッ!」

「Tell me the truth 信じてた未来が 崩れ去ろうとしてる♪」

仲良く2人で歌う歌詞の内容じゃないよねこれ。というかなんで歌詞知ってるのレーヴァテイン…。

◆？

「I. この手の中 I I. 進むべき L i f e I I I. 生きていくだけ♪」

「来たな織田くん、レーヴァテインくん」

「しっ、司令！ここにここにちわ!!」

「こんにちわ〜」

新しい船の二課に到着する。ちなみに4曲目を歌い終わると同時に到着しました。どうしたら司令に慣れますか……？（深刻）

今日も訓練という名のお仕事：ではなく、レーヴァテインについてのちよつとした検査。

私とレーヴァテインは2人一緒にメデイカルルームに入り検査を受ける。と言っても、特に新事実はなさそうだけど。

レーヴァテインと私はDNAは全く一緒、完全に一致。けどレーヴァテインの活動エネルギーとなるのは私の生命エネルギー、食事は可能だけど嗜好品らしい。

レーヴァテインは毎日私と一緒に三食一緒に食べる。だから、学校に行くときも2人弁当を作り、屋上で2人と一緒に食べる。バレそうになった時は焦った……。本当に加賀美さんに感謝。

レーヴァテインの肉体はデータ的には12歳らしい。納得の可愛さである。自分で言うのはなんだけど……。見た目に性格が完全にベストマッチ！ヤベー！

確かに体の代謝は大きくなったと思う。いつもより食べる量が1.5倍ぐらいになったと思う。立花さん食べる量多いですね……。

腹が塞がった理由は、正直わからない。レーヴァテインもどうやっ

たのかは覚えてるけど、どういう原理で治ったかはわからない。神話でのレーヴァテインは、回復の効果など一切ない。

まあ、今は特に気にすることではない。レーヴァテインが可愛いからおっけーです！

◆？

「でっでではー！」

「ばいばいー！」

私達は検査を終えて二課を出る。私って昔からそんなに胸あつたっけ…。レーヴァテインが平均より明らかに大きいです…。レーヴァテインが明らかにメンタルが私より強いのに泣きそうです。

「志乃ちゃん！」

「なに？レーヴァテイン」

「お歌歌いながら帰ろう！」

「いいよ。何歌う？」

「えつとねく………『NEXT LEVEL』！」

カ〇トじゃねえか！なんだそれ知ってるの!?っていうか選曲が殆

ど仮面ラ○ダーなのは何故!?

「い、い、いよ」

「わーい!じゃあ行くよー!せーのっ!」

「君が願うことなら すべてが現実になるだろう 選ばれし者ならば♪……………」

……………ついで来れるなら…♪」

歌い終わると同時に、私達は家に到着した。歌上手いねレーヴァテイン。とうかなんで知ってるの…(2回目)

「志乃ちゃんどうするの〜?」

「ちよつと早いけど晩ご飯作っちゃおっかな」

「わーい♪」

私はレーヴァテインにそう言ってエプロンを身につける。エプロン姿の私に惚れな♡まあ男性に話しかけられたら倒れるんですけどね。

冷蔵庫と冷凍庫の中から食材を取り出しながら料理し始める。

料理し始めて数十分、晩ご飯が出来上がる。

「いただきます」

レーヴァテインは器用に箸を使いながらご飯を食べる。箸の使い方上手だなく。私より上手かも?私この時こんなに上手く箸使えてたっけ?箸の使い方が違うって怒られてたなく。

「志乃ちゃん食べないの〜?」

「ん?食べる食べる」

しまった、ついうっかりレーヴァテインが食べてるのを見るのに集中し過ぎて自分が食べるのを忘れてた。私もレーヴァテインに続いて晩ご飯を食べ始める。うん、普通。

ご飯を食べ終わるとレーヴァテインは自分で食器を台所まで持つ

て行って片付ける。偉い、可愛い、だっこしたい、レーヴァテインは私のもn…ハツ!?正気を!?

私も食べ終わってレーヴァテインのも合わせて食器を洗い、自分の部屋に戻る。おつ、予告だ。…あ、20:00からか…。それまで私何しよつかなく…。

「志乃ちゃんどうしたの?」

「ん?時間まで何しよつかなくって」

「じゃあ歌歌って!」

また歌ですか。レーヴァテインはシンフォギアだからなのか歌が非常に好きである。歌うのも好きだし聴くのも大好きです。

「えっと…何かリクエストある?」

「うーん…」

嫌な予感がするぞ…:仮面ラ○ダーシリーズなのは確かであるなこりゃ。

「そうだ!『Wish in the dark』!」

息子応援歌!?えっ?!?よりによって挿入曲?!いや好きだけどき!

「わ、わかったよ…」

「わーい!」

くっ…!笑顔が可愛すぎるっ!抗えぬ!あーもうぎゅって抱きしめてどこにもいかないようにしたい…。

「Deep Inside誰の為 Deep Inside何の為
チカラ求めて彷徨う…」

…:闇がひろがる風景(パノラマ)♪

「やっぱり志乃ちゃん歌上手ー!じゃあ次はねく…」

「次!」

…この後めちやくちや歌わされた。

◆？

『こんばんおりんく今日もおりんゲーム実況はじまるよ』

あゝ……声帯がなくなる……。アニメ声無くしたら個性がなくなるから泣けるぞ私は……。

コメ欄は「謎解きはやめろ」「謎を解け」「謎を解いたり解けなかったりしろ」「翼さんに解いて貰え」と謎解きを催促する声。ちなみにダンゴムシ間では「〇おりん」という時間単位が出来上がっています。が、1おりんが15分なのでなにかと使い勝手がいいです。

『じゃあ今日はメック落としまーす』

今日はメックフオールというFPSゲームをやる模様。私もやってるよ、偶に部屋に入るぐらいにはやりこんでます。レーヴアテインが上手すぎるの……(泣)

コメ欄は「メックフオールが来た」「今日はパイロットか」「ロボを労われ」とロボに対して優しい言葉が。ただしおりんには届かない模様。流石「クソブラックパイロット」の異名を持つ女だね！

『部屋は立てたので入ってきてもいいです、今日はメックフオールなんでミュートはしてもしなくてもお好きにどうぞ』

「レーヴァテイン、やる?」

「んー…今日は見る!」

「ん、わかった」

私は配信の視聴をレーヴァテインと共に続行する。レーヴァテインもおりんの配信の虜です。やったねおりん! ダンゴムシが増えたよ! (おいバカやめろ (建前) ナイスウ! (本音))

コメ欄では「イキりおりん」「まあメックなら配信聞いててもわからないしな:」「ムームの配信で隠れてる場所ばれたのは草だった」とゲームに対するコメントが流れる。

『じゃあルールは消耗戦、メックは今日はサムライで行きます』

西郷かな? そういえば柴犬可愛いよね。お金ないから飼いません。レーヴァテインにねだられたら買います。

コメ欄は「脳死自爆やめろ」「薩摩やめろ」「自爆しもす!」と何故か薩摩弁のダンゴムシが現れる。

開始から数分、おりんはいつも通りの動きでスコアを稼ぎながら準備を整える。準備が整い次第すぐにメックに乗り込み、まだ準備が整っていないプレイヤーを狩っていく。

『養分のみなきーん、たのしんですかー!』

「ヘッドショット少ないね、エイム力もうちよつと鍛えればいいかな?」

「レーヴァテインガチのコメントやめて」

レーヴァテイン、ゲームも大好きです。プレイヤースキルが高すぎて怖い。

コメ欄は「相変わらず性格の悪い動きだ……」「弱者にイキる姿はまさにおりん」「悪役ムーブがうますぎる」と好き勝手なコメントが流れる。流石ダンゴムシ容赦ない。

相手の準備が整ってきたのか他のプレイヤーのメックに襲われる。

『そろそろヤバイので自爆しまーす』

おりんはそう言うとのちにダッシュして行って自爆する。完全にウル○ラダイ○マイトである。

『やりました。』

「えー、あれは勝てるでしょ〜…」

レーヴァテイン、驚きの発言。耐久力低いキャラで2体1で勝てる発言は強い（確信）

コメ欄は「やりやがった!」「メックを労われ」「知恵捨て」と罵倒の嵐である。これは酷い。レーヴァテインは可愛い。

おりんが早々にスコアを稼いだので大差で勝利でした。

『おつおりん、とりあえず告知だけど「うたずきん」さんの新しい動画が近々あがるのでお楽しみに〜』

勿論見えています。「うたずきん」とはクリスさんのことである。歌が上手くてレーヴァテインが嬉しそうに見るのが微笑ましい。

コメ欄も「身内の告知をする配信者の鑑」「うたずきんすこすこのすこ」「翼さんとうたずきんと三人で歌え」とうたずきんに関するコメントも流れる。この3人で歌うのは凄いだらうなあ…。

『んじゃ、明日はBLゲームをやるよ』

「レーヴァテイン、次の配信は見ちゃダメだよ?」

「えー、見たーい」

「ダメー!」

レーヴァテインにはこんな汚いもの見せられない!見せると私が倒れます（自責の念で）

コメ欄も「おまたせ」「清楚になれ」「うたずきんを見習ってお歌を歌え」「助けて翼さん」と阿鼻叫喚の悲鳴のコメントが流れる。

配信が終了する。そろそろ寝る時間なので、私はベッドに飛び込む。すると、レーヴァテインも隣に飛び込んでくる。

「志乃ちゃん寝るの?」

「うん。レーヴァテインも寝る?」

「うんッ!おやすみ志乃ちゃん」

「おやすみ、レーヴァテイン」

私達は夢の中に入る。夢の中でも、一緒だよ、レーヴァテイン。

ちから

「だあああああッ!!」

私はノイズに向かいレーヴァティンを振るう。多くのノイズが剣と剣風に巻き込まれ、崩壊していく。

私は今、二課のトレーニングルームを使わせてもらっている。ルナアタックという事件があったとき、私は殆ど役に立つことがなかったから、少しでも力をつけようと思った。……まあ、レーヴァティンから提言されたからやってるだけなんですけど。

ノイズ達が増える。ノイズ達は短時間で大量に湧くように設定されている。息をつく間もない。

「ハアッ!!」

私は回転しながら剣を振るう。それに炎を上乗せし、跳ぶ。

「っしやオラアッ!!」

私は空中で剣を振るって縦に炎を飛ばす。すると、一直線上にいたノイズ達は、一瞬にして焼却される。

一定数小型ノイズを倒したら出てくるようにした大型ノイズが姿を現わす。大型ノイズは私に対し、飛び道具を使用してくる。

「おおわっ!?!」

私はそれを剣を盾にする。しかし、後ろから小型ノイズが迫ってくる。

剣を地面に突き刺し、大型からの飛び道具は防ぐ。その間小型は……

「殴り倒すッ!」

私の意気込みに呼応してギアから蒸気が噴き出す。私は思いつきり右腕を左から右に振る。それと同時に右腕から蒸気を左に噴きださせる。それに当たった数台のノイズは崩壊する。

「らあああああッ!!」

今度は左腕を蒸気で加速させつつ正拳突きをする。目の前にいた小型ノイズは崩壊し、その欠片が吹き飛ぶ。

地面に突き刺していたレーヴァティンから響く音が鳴り止む。

「つしやあつ！」

私は地面からレーヴァテインを引き抜き、大型ノイズに向かってダッシュする。途中で襲いかかってくるノイズはタイミングよく斬っていく。

「ああああああッ!!」

私は大きくジャンプし、大型ノイズに向かって剣を振り下ろそうとする。しかし、大型ノイズは攻撃が当たる前に飛び道具で攻撃してきた。

「ツガッ…ツアッ…」

私は大きく吹き飛ばされ、仮装のビルに直撃する。

「いッ…かつ…」

すると、仮装空間は消え、シンフォギアが解け、レーヴァテインが現れる。

「志乃ちゃん大丈夫!？」

「つつう…大丈夫大丈夫」

私はレーヴァテインを宥めるようにして頭を撫でる。ああ、髪の毛の感触が気持ちいい…。

私はトレーニングルームの壁にもたれながら休憩する。前の私なら、自主的にトレーニングとか、しなかつただらうなあ…。めっちゃ疲れるし…。

◆？

あれからも自主訓練をして、クタクタになりながら私は家に帰る。

「志乃ちゃん大丈夫?」

「だ、大丈夫大丈夫」フラフラ

「大丈夫に見えないよ!私が歌って元気つけてあげる!」

嫌な予感。どういふ系統かの曲かはもうわかつたぞ。

「君らしいペースで さあ行こう♪」

はた〇く細胞!?予想の斜め上を行っていたよ!?といふかなんでそれ知ってるの!?

レーヴァテインが歌い終わると同時に私達は家に到着する。疲れた…。もうトレーニングなんてやりたくない。

そもそも、どうして私はトレーニングなんかをしようと思った?弱いから?みんなの役に立ちたいから?……………違う。私は、レーヴァテインを纏うのに相応しい人間になりたいだけだ。

「レーヴァテイン」

「んー?何、志乃ちゃん」

「レーヴァテインにとつて、私って何?」

「うーん……………お姉ちゃん!」

「お、お姉ちゃん!」

「うん!お姉ちゃん!」

見た目的には確かにそうだけど、精神的にそうなる!?!…うーん……………。

「そっか、レーヴァテインに相応しいお姉ちゃんになるね」

「うん!頑張つて、志乃ちゃん!」

お姉ちゃんだけど、呼び方は「志乃ちゃん」のままなんだね。なんだが安心感。レーヴァテインが妹かあ……………えへへ……………。

おりんの配信が始まるまで、宿題を終わらせる。隣ではレーヴァテインが私のゲーム機を使ってゲームをしている。……………鼻歌が『EXC

ITE』なのは何も突っ込まん。ゲーム繋がりですねこれは。
宿題も終わり、おりんの配信が始まる。

『ドゥードゥウやります』

こっ、声が死んでる！声色から明らかに疲労が溜まってるのが見て取れる！

コメ欄も「おりんの声がし……死んでる……」「萌え声を出せ」「萌え声で殺意をばらまけ」と困惑の声。萌え声で殺意をばらまくってなんだ。二方面から殺されるのか？

ドゥードゥウというのは爽快系FPSゲーム。ストレスが溜まってそうな今のおりんがやりたそうなゲームだ。

『オラツ顔面粉砕させろ！死ね！』

お、おう、楽しんでるねおりん。レーヴァテインはたまに意味不明なプレイヤースキルを見せるのやめい。お姉ちゃん泣いちゃう。

コメ欄は「死ねとかいつちやいけない……」「おりんのリミッターが外れている」「敵の顔面を的確に破壊しながらスライドホップする様はまごうこと無き変態」とダンゴムシ達によるおりんのプレイの感想コメントが流れる。

『なあにが地獄のデーモンですか！こちとら闇そのものだぞ！』

あくくまのちくからく身にくつくけたく正義(笑)のヒーロー(笑)デビルルマ〜ンデビルマーン(笑)この音MADシリーズの中に、おりんのやつあったなあ……。作ったの私なんですけど。

コメ欄は「デーモン相手にイキるな」「やっちまえ！」「闇(ただの陰キヤ)」と罵倒の声。ただの陰キヤは草。

『はあ、ステージクリアまで14分34秒、これならまだまだ進めそうですね』

ステージクリア。片っ端からキルしてたから、キルスコアがとんでも無いことになっている。それを嘲笑うかのようなスコア叩き出すのはやめようかレーヴァテイン。

コメ欄は「キルスコア相変わらず頭おかしくて草」「片っ端から殺してたからな……」「おりんはパリピデーモンを生かしてはおけないからな……」とコメントが流れる。

銃でデーモンを殺す姿は、イカロスの機銃を使ってノイズを蹴散らす加賀美さんみたいですね。

『もし月が落ちて来るとしたらどうしたらいいんだろうねー』

ふと、おりんがそう言う。コメ欄は「地球外脱出」「月を破壊!」「月にブースターをつけて軌道を戻す」「何? 月が綺麗だねって? (難聴)」と半分おふぎけのコメントが流れる。

ルナアタックの時のように、みんなが頑張ってくれるのかな? そのとき、私も頑張るべきなのかな?

『脱出って、やっぱりあれだよねえ、脱出船に乗れるのは選ばれた民だけだとか……』

なんだっけ、ノアの船だったっけか? そんなお話があったよね。もしそうなら、レーヴァテインは絶対にいなくなっただけじゃない。

コメ欄は「おりんも俺達も乗れない奴だな」「俺達はおりんと運命を共にするよ」「世界最後の日を配信しろ」と悲観の声が聞こえる。ダンゴムシ達は選ばれぬ。それが運命。けどレーヴァテインにだけは生き残ってもらうぞ。

『ちなみに話変わるけど、おりんとて永遠の命を持っている訳ではないのだから死ぬ日があるだろうけど、その時皆はどう思う?』

おりんの配信がなくなるのは嫌だなあ……。というか、死ぬとしたらよぼよぼのおばあさんだから、もうきつと配信はしてないよね。萌え声? なにそれ美味しいの? 状態。

コメ欄は「おりんより先に死んでるだろうから関係ない」「先にあの世で待ってる」「あの世でも配信しろ」と流れる。あの世にネット環境あるんですか?! まあ死んだらレーヴァテインが悲しむから嫌なんですけどね。

自分が死んだら、きつとレーヴァテインが悲しむ。そう思うのって、かなり自分勝手だよな。しかも、そう思ってるにも関わらず、レーヴァテインには生き残って欲しいけど、自分は死んでもいい。と思ってるんだから。

自分の優しさがわからない。自分勝手なくらいが、ちょうどいいか。

コメントに「ぶつちやけおりんが死ぬビジョンが見えない」「おりんならゴキブリよりしぶとく生き残るよ……」「死にそうなら助けを求めろよ」と無責任なコメントが流れる。

大事な人を死なせないには、ちからが必要だよね。護れるだけの力が。

力を求めるダンゴムシ

「しーのちゃんっ♪」

おりんの配信が始まるまで時間があり、ボーっとしていた私に、レーヴァテインが飛びついてくる。

「どうしたの？レーヴァテイン」

「こうしただけっただけっ♪」

そう言っつて、レーヴァテインは腰に手を回して私を抱きしめる。私もそれに対してレーヴァテインを抱きしめる。

最近、ようやくレーヴァテインの私服を買った。それでも、まだ家着だけけど。

私はいつもグレーのシャツに黒の半ズボンのラフな格好で過ごしている。それに感化されたのか、私服が欲しいとねだられた。

買わないわけないダルオ!? 上目遣いで頼まれたら買うしかないじゃん！

というわけで、普段あまり使わない二課から貰ったお金を使い、私の服の上赤下グレーバージョンを買いました。可愛い。

「ぎゅーっ♪」

「きゃーっ♪」

少し強めにレーヴァテインを抱きしめると、声を上げて喜ぶ。嗚呼、可愛いよレーヴァテイン、癒される……。

「そういえば志乃ちゃん」

「ん？何？」

「最近、よくトレーニングしてるけど、なんかあった？」

「ん……特にないよ？」

「そう？」

「そうそう」

最近、トレーニングルームによるノイズとの模擬戦を、頻繁に行なっている。

加賀美さんや立花さんとのトレーニング中、痛感した。私は、レーヴァテインの力を扱いきれてないって。だから、その為にもトレーニ

ング、もつと強くなって、レーヴァテインを守る。それが私の目標であり原動力である。

「配信始まるよ〜?」

「あ、もうそんな時間か。ありがとうレーヴァテイン」

「えへへ〜♪」

私はレーヴァテインの頭を撫でてから、椅子に座ってパソコンを起動する。隣では、レーヴァテインがパソコンの画面をジッと凝視する。レーヴァテインもおりんの配信が好きだからね、しようがないね。

配信が始まった。

◆?

「ハアツ……ハアツ……」

地面に剣を突き刺し、荒い呼吸を繰り返す。しかし、その間にもノイズ達は問答無用で迫ってくる。

私は地面から剣を引き抜き、両手でしっかりと構える。体力が落ちてくるのか、剣がやたら重く感じる。

「ハアツ……ハアツ……ッダアアアアア!!」

少ない体力を振り絞り、私は身の丈ほどの剣を大きく振り回す。しかし、それだけで多くのノイズ達が灰になり崩れる。

大きな剣の遠心力に体が引っ張られ、一瞬体勢が崩れる。しかし、それが隙となり、一体のノイズが私に突っ込んでくる。

「ガッ……!?!」

私は思わず手から剣を手放してしまい、大きく仰け反ってしまう。その間に大量のノイズ達が私に向かって突進してくる。

「……カッ……アッ……」

体はボロボロになり、平衡感覚が消え、意識が一瞬ブラックアウトする。

一瞬の気絶の後、体の半分に冷たい感触が伝わってきた。目を開くと、先程まで戦っていた仮想ノイズ達は消え、まるで本物のような市街地は、いつものトレーニングルームに戻っていた。

私が纏っていたシンフォギア「レーヴァテイン」が解除され、隣に心配そうに私を見つめるレーヴァテインが座っていた。

「志乃ちゃん!」

「ついッ…あはは、だ、大丈夫……」

「志乃ちゃん嘘ついてる。私は志乃ちゃん、志乃ちゃんは私だよ?」
レーヴァテインは心苦しそうに私にそう言った。

実践形式でのこのトレーニングを始めて3時間、もう体力はとづくに限界を迎えていて、戦っている最中も視界が朦朧としていた。

「ごめんね、レーヴァテイン。でも、もう大丈夫——!?!」

立ち上がろうと力を込めたが、足に全くと言っていいほど力が入らない。恐らく、限界なのだろう。

「織田くん。今日のトレーニングは終了だ」

トレーニングルームの中に、司令が入ってくる。それと同時に頭の中が軽くパニックを引き起こし、既に息が上がって速くなっていった鼓動が、更に速くなった。こんな状況でもクソザコメンタル……。

「レーヴァテインくんの言う通り、君はもうボロボロだ。そんな状態で続けても意味はない。休養も立派な訓練だ」

「はっはははい……」カタカタ

司令はそう言つてトレーニングルームを出て言つてしまった。今思つたけどそれ言う為だけに来たの？優しい。

「……………ねえ志乃ちゃん」

「……………どうしたの？」

「私……………足手纏いかな？」

「そんなことないよ！」

寧ろ、私がレーヴァテインの足手纏いだ。全然レーヴァテインの性能を引き出せず、弱いままの私。守るべきレーヴァテインに、護られてばかりだ。

「じゃあ……………もつと私を頼つて……………？」

「ツ……………！」

考えてみれば、私はレーヴァテインに頼つたことは無かつた。レーヴァテインを勝手に守ろうとして、逆にレーヴァテインのことを信頼してなかつたのかも。

「……………ごめんね？レーヴァテイン……………」

「うん、志乃ちゃんの気持ち、わかるから。だから泣かないで？」

「え？泣いてなんか……………」

そう思い頬を触れてみると、少し暖かい液体が指についた。それを涙だと理解するのに時間はいらなかつた。

「志乃ちゃんは1人じゃないからね？」

レーヴァテインはそう言つて私の頭を撫でる。レーヴァテインの体温が、とても心地いい。

「……………ねえレーヴァテイン」

「なーに？」

「早速で悪いんだけどちよつと助けてくれない？1人じゃ立ち上がるのも無理っぽいから……………」

「む……………しようがないなあ……………」

レーヴァテインはほつぺを膨らませて私のことをジト目で見た後、私を立ち上がらせて歩きの補助をしてくれた。ジト目のレーヴァテインマジで可愛かつた。えへへ。

私達は船の二課を後にし、家に向かつた。

「レーヴァテイン大丈夫？重くない？」

「全然重くないよー？」

首を傾けてレーヴァテインはそう答えた。どうやら、私が質問した理由がわからないといった様子だ。あれ？私ってそんなに軽かったっけ？

家に到着し、ベッドに横にしてもらおう。私は老人か？

「どーんっ♪」

ベッドで横になっていている私の上に、レーヴァテインが乗りかかってくる。無邪気なところが可愛い。

「えへへ♪志乃ちゃんだーいすきー！」

「ふふ、私もだよ♪」

私はレーヴァテインを抱きしめる。体温を体全体で感じれる。レーヴァテインという炎の剣という神話上の剣がモチーフとなっている聖遺物からか、通常の人間より体温が高い。冬は重宝しそう。まあ夏でも離さないけどね！

配信の時間になる。

『——今日はお歌配信です』

あ、今日はお歌なんだね。おりん歌上手だから期待できる。

レーヴァテインは歌が大好きだ。だから、お歌配信の時は隣で楽しそうに見てる。いつも楽しそうだけだね！

『ポストロックで作曲・演奏は翼さんとこのマネージャーさん経由で紹介してもらった「ナイトクラウド」さんで、ボーカルと作詞は私おりん。「影月』』

ファッ!?夜雲さんの作曲・演奏!?ちよっおまつ……なんて贅沢な!!プロになってからやらんかい!

コメ欄も「夜雲まじか」「おりんガチ曲マジ!」「カラオケじゃない……だと……!?!」と騒然としている。

夜雲さんはプロで有名な方で、私もレーヴァテインも好きな方なので、レーヴァテインも隣で驚いている。

『ハロー ハロー 夜が来た 灰色の月が昇って来た 夜の影月が

太陽(あなた)の居ない夜が来た 薄暗い穏やかな夜 静かな闇に

包まれた部屋で

未完成な夜空に 星を描いていく』

うーん……流石夜雲さん、かなりエモい……。おりんも上手いねほんと、感情の入れ方とかも。

コメ欄も「エモさが尋常でない」「歌詞おりんってマ?」「おりんにそんな才能があったのか」「おりんポエムが曲になった……」「イケボおりん」とざわざわしてる。

おりんポエムが歌詞になるとは……音MADは作らんどお!!あれは深夜テンションでヒヤッハーしてて記憶曖昧なときにしかやりません。というかやらかしません。

『ハロー ハロー 太陽(あなた)が昇る 輝くあなたの側に 影の様に 僕はいる

それでいい あなたが輝いているなら 僕はそれでいい 青空に溶けていく』

いい曲だった。毎日聞きたいんですけど。だからCDは?まだ?

コメ欄も「888888」「いい曲だった」「さすが夜雲さんだ」「CD発売まだ!」と賞賛のコメントが流れる。

『CDは発売予定ないですけど、今後収録したバージョンを私のページで無料でダウンロード可能にする予定はあります』

ファッ!?無料だと!?正直金溶かすつもりで身構えてたんだけど……。

コメ欄も「タダでいいの!」「金を払わせろ」と驚きの声が聞こえる。

『だったら来月の夜雲さんとこのアルバム買ってどうぞ、オフボーカル版のインスタレンジ「影月」が入りますんで』

うーん買うか(確定申告) レーヴァティンも目をキラキラさせてる。……レーヴァティン用になんか買おうかな?

コメ欄も「買うわ」「あの、予約終わってるんですがそれは」と購入の声。

おいちよつと待てなんで予約終わってるんだ、話しが違うぞおりん。

『まあ、これから先またオリジナルのお歌が溜まったらCD出すかも

ね』

買うわ（確定2回目） 並んででも買ってやる。ダンゴムシしか並ばないからな！

コメ欄も「メジャーデビューか!!!」「嗚呼、おりんが行く……」「おりん、舞台に立てるの？」と罵倒混じりの声。私だったら無理、速攻で卒倒します。

配信が終了する。パソコンを閉じる。

「凄かったね!」

レーヴァティンが嬉しそうに私に言う。

「ふふふ、そうだね♪」

私はレーヴァティンの頭を撫でる。レーヴァティンはえへへと嬉しそうな声を出す。

私は、レーヴァティンを信頼しなきや。私は、レーヴァティンと2人で1人なんだ。

G We are the woman.

月が欠けた、「ルナアタック」という事件から100日が経過した。ノイズを自由に操ることができるようらしい害悪完全聖遺物「ソロモンの杖」の輸送が行われたらしい。私？はは、多分結果出せてないから、お留守番ですよお留守番！

ノイズに邪魔されたりしたらしいが、作戦は成功したらしい。

これでこの「ソロモンの杖」の研究が進めば、ノイズ達はいなくなり、平和が訪れるというわけだあー！あーははははは！！

駄目だったよパトラアアアッシュ!!輸送先だった米国の基地が襲撃されたらしく、「ソロモンの杖」も何者かによつて奪取されてしまつたらしい。許さんず！

ということを、司令から聞いた。はは、気絶しそうになったよ。これ本当に現実か？アニメじゃないだろうな。

本日、私とレーヴァティンは翼さんと世界の歌姫、マリア・カデンツァヴァナ・イヴのコラボライブステージ、「QUEENS of MUSIC」に招待された。

招待席があつたらしいけど、そんなところよりも他の人に紛れての方が全然いい。豪華なとこだと変に緊張して楽しめん。ちなみに加賀美さんも一般席らしい。

隣でレーヴァティンはとてもウキウキした表情で待機している。

レーヴァティンは音楽が大好きだ。なので翼さん達の歌も好きなのわけだ。……ちよつと妬いちゃうな。

ライブが、開始した。

◆？

一曲目の「不死鳥のフランメ」が終了する。

会場はファン達の熱気に包まれ、私のボルテージのMAXである。レーヴァテインも目をキラキラさせ次の曲を楽しみにしている。

「歌には力がある」

「それは、世界を変えていける力だ！」

この演出は本当に凄い。キラキラしてて。加賀美さん喜びそうだな。

悲鳴が、響いた。

『うるたえるな!!』

その悲鳴の原因は人類の天敵ノイズ。

そんな中、声が会場に響く。その声は翼さんのコラボ相手であるマリア・カデンツヴァアナ・イヴの声だった。

ノイズ達は、まるで操られているかのような行動を見せる。

『私達はノイズを操る力を以てして、世界に要求する!』

ノイズを操る力：奪われた「ソロモンの杖」……!」

マリア・カデンツヴァアナ・イヴは、シンフォギアを纏っていた。それは、立花さんの纏う「ガングニール」、それであったが、立花さんの纏うものよりも遥かに黒かった。

聞いたことがある。適合係数が低ければ低いほど、シンフォギアを纏ったときのギアの色の黒の面積が広がると。

そんなことはどうでもいい！今の現状は、ノイズが現れっ！観客とレーヴァテインに危害が加えられるということだッ！

『私は、私達はフィーネ。終わりの名を持つ者だ！』

フィーネ!?殺されたはずじゃ……。トラックかな？

待て私、論点はそこじゃない。

「何だ!？」

「あの子飛んでるぞ!？」

「トリックじゃないのか!？」

そんな声が聞こえ、空中を見る。

そこには、シンフォギア「イカロス」を纏い、ノイズ達に向かっていく加賀美さんの姿が。

「志乃ちゃん!」

「レーヴァテインッ!貴女の力を貸して!」

私とレーヴァテインはその場で抱き合う。そして、聖唱を唱える。すると、私にシンフォギア「レーヴァテイン」が纏われる。

イカロスよりも基礎身体スペック向上率が高いその能力を活かし、蒸気を使いつつ私は大きく跳ぶ。

「加賀美さん!手伝います!」

「お願いします」

そう返された私はノイズ達の近くに降り立ち、着地と同時に被害を出さぬよう調整しつつ剣を振るう。

半数のノイズが消え去り、その後から残ったノイズ達にホーミングレーザーが降りかかる。おそらく、加賀美さんのものだろう。

レーヴァテインの力をより感じる。レーヴァテインを信じる。レーヴァテインは、自分の後ろで守る存在ではなく、隣で肩を合わせ戦う存在、そんな感覚がする。

「私は日本政府、特異災害対策機動部所属のシンフォギア装者!加賀美詩織!この事態の収束の為、観客の皆さんは冷静に、迅速に避難してください!」

んん!?名乗った!?ちよつと不味いですよ!!そういえば、救助活動を

行うときは、名乗って救助する人を安心させるんだっけ……。………これもみんなを守るためだよね!! 私もやらねば!!

「同じく日本政府特異災害起動部所属シンフォギア装者の織田 志乃！ 私達がなんとかしますので、冷静に行動してください！」

うう…緊張で死にそう…。こんなに多くの人の前でこんなことやるとは…おりの正気度を疑う……。

『志乃ちゃん大丈夫?』

「う、うん、大丈夫大丈夫」

レーヴァテインが私を心配してくれる。けど、レーヴァテインにかっこ悪い所とかは見せられないよね……!

「マリア・カデンツァヴナ・イヴ! あなたをテロの現行犯で拘束します! 武器を捨て大人しくしてください、さもなくば」

「さもなくば! 何かしら」
「射殺します」

お、おう。言うね加賀美さん。そういえば、あの時櫻井さんにもそういうことやってたね。経験者でしたか。

「あら、随分と自信がお有りのようだけど、私はフィーネよ? 勝てる自信が?」

「貴女がフィーネだろうとフィーネであるまいと、地獄に送ってあげます、あなたの罪は重い」

『志乃ちゃん、避難は順調に進んでるよ』

私にレーヴァテインがそう告げた。レーヴァテインはギアとして体全体に纏っている。それのおかげかよくわからないけど、とりあえずギアから周りの状況を見れるらしい。

「最終通告です、投降してください。さもなくば、排除します」

「随分、冷徹なのね。あなた」

すると、ノイズ達が再び現れる。観客の避難はまだ完了していない。つまり…人質?

「……あなたほど、クズじゃありませんよ」

「……………」

ごめんなさいコミュ力低くて。会話に入れる気がしない。助けて。

「負け惜しみね、地に降りてギアを解除しなさい。そのあなたもよ」
私はやむなくギアを解除する。とりあえずレーヴァテインには私
の中にまだいてもらおう。複数人現れても意味はないし。

次の瞬間、私達の周りをノイズ達が囲んでくる。四面楚歌。逃げ道
はなさそう。

「詩織！織田さん！」

翼さんが叫ぶ。そういえば、翼さんはテレビの前でシンフォギアを
纏うわけにはいかないんだよね。一応国家秘密だし。

……あれ？私達人前でシンフォギアを纏ったのはかなりの大事
じゃない？……はは、気にしな～い気にしな～い。

「そう、それでいい。ギアをこちらに投げ渡しなさい」

……………は？

この女、今なんつった？レーヴァテインを……渡せ？

私の頭の中に今まで見てきたレーヴァテインの表情が思い浮かん
でくる。笑顔だったり、嬉しそうな表情が多いなか、初めてレーヴァ
テインと会ったときに言われた言葉。

『私を手離さないで』

記憶のレーヴァテインの言葉と、今私の中で発したレーヴァテイン
の言葉がぴったり重なる。

次の瞬間、加賀美さんの背中からレーザーが飛んでいき、観客を人
質に取っていたノイズが消し飛ぶ。

「レーヴァティイイイインツ!!——!!」

聖唱を口にし、体が光に包まれる。

次の瞬間、私と、もう一人の私が大きく剣を振るう。既に跳んでい
た加賀美さんには当たらず、ノイズ達は消滅する。

「志乃ちゃん！」

私にはいつも通りのシンフォギア「レーヴァテイン」が纏われてい
た。しかし、いつもと違うのは、隣にいる存在。

私の昔の頃と瓜二つの顔と体型。しかし、その身に纏うは私と同じ
シンフォギア「レーヴァテイン」。

シンフォギアを纏っているとき、いることのできないはずの存在、

妹としてのレーヴァテインが、そこにはいた。

「レーヴァテイン……！」

私が身に纏っているのもレーヴァテイン、隣で頼もしく感じるこの子もレーヴァテイン。

私は隣にいるレーヴァテインの手を握る。レーヴァテインから手を離れたとしても、私の体に纏われているのもレーヴァテインだから、問題はない。

けど、こうしてたい。常人よりも温かい体温が、私のことを安心させる。私にとつての一瞬の精神安定剤みたいになっている。

加賀美さんは跳躍した勢いのまま、フィーネの顔面に1発拳を食らわせていた。

「ようやくそのクソツタレな面に一撃入れられましたね、フィーネ」

加賀美さんは清々しい顔でフィーネにそう言い放った。流石おらん、やる事がえげつない。

すると、手を握っていたレーヴァテインが突然消える。

「えっ……？れ、レーヴァテイン……？」

私はパニックになり周りをキョロキョロ見渡す。レーヴァテインの手を離さないって、約束したのに……。

『志乃ちゃん、私……だよ』

頭の中にレーヴァテインの声が響く。そして、隣に久し振りに見た半透明のレーヴァテイン。

私はレーヴァテインに手を伸ばす。レーヴァテインもそれに合わせるが手を握っている感触はない。

だが温度を感じる。レーヴァテインの温かみが、パニックになった私の心を落ち着かせてくれた。

「バケモノね、あなた達……」

誰がバケモノだ、レーヴァテイン含めてここにいるのは人しかいないぞオラ。

「でもその代償は大きかったみたいよ」

「何の事ですか」

「……………う？」

「あなたは世界を前に自らの姿と名前を晒した、私と同じ様にね……
あなたはもう普通の生活に戻れない」

「で、それが？どうしたのでしょうか？私は闇に生き、闇に還る。それは今までと同じ、私には失うモノなんてない」

「そんなものいらない。レーヴァテインが隣にいれば私は万々歳だよ。闇の住人の居場所は現実にはない」

「……………ツ！随分と寂しい人ね」

「まあそんな事はどうでもいいのですよ、現行犯で拘束……………ツ!!」

「ツ！上ツ!!」

すると、突如上から大量の丸鋸が私達目掛けて飛んでくる。

加賀美さんは機銃でそれを撃ち落とし、私は頑丈な剣を盾にしてそれを防ぐ。

「調！切歌！」

2人かよ！いや、これはある意味テンプレ……………？いや、そんなことは今どうでもいい！わかることは更に状態はめんどくさいことになったってことだ！

「さて、もう警告はいいでしょう。私ももう手加減している余裕はないので、あなた達を殺すつもりで行かせて貰います」

「私事です。大事なものに手を出すのなら、それ相応のリスクも覚悟してますよね？」

「……………偽善者の仮面を取り繕う事もない！」

黒髪の少女が私達の方を睨む。

「知った事ですか、やらない善よりやる偽善、少なくともノイズで観客を人質にするあなた達より覚悟はキマってますけど？」

「ムカつくデス！」

「そつちがムカつくなんて知ったこつちやないよ！」

こちとら今あんた達の行動でフラストレーションが溜まってんだ！ごめんレーヴァテイン、怖かった？

「翼さん！もうカメラはありません！やっちまいましたよ！」

「もうカメラ回ってませんよ！」

「詩織……織田さん……」

いつのまにか放送は中断されていた。緒川さんのお陰かな？ N I N J A？

「いいんですよ、翼さん。私は所詮影に生きる存在です、今までよりより深い影にでも隠れてればいいんです、それよりも今は翼さんのライブを台無ししてくれたこいつらを捕まえる、それが大事でしょう？」

「……そうだな……」

「させるかデス！」

「それはこっちのセリフッ！」

緑色のギアを纏った金髪の子が、鎌をこちら側に振ってきたから、私は剣で思いつきり弾き返した。ゲーム風に言うと、パリイってやつかな？

後ろからレーザーが飛んでくる。多分、加賀美さんが出したやつ。

レーザーは私のことを無視し、さっきの緑色のギアの子の方に地面に水平に放物線を描くように飛んでいく。

「切歌！」

しかし、その間にフィーネが入り込み、自分のマントでそのレーザーをかき消す。

「美しい仲間意識ですね、ならどっちも！」

「させない！」

「邪魔です！」

多分さっきの丸鋸を飛ばしてきたであろうピンク色のギアを纏っている少女が加賀美さんに向かって飛んでいく。それに合わせて、加賀美さんが機銃掃射を浴びせる。

ピンク色のギアの少女は、機銃掃射を浴びて、地面に墜落した。

「詩織、織田さん、仕掛けるぞー！」

「はい、翼さん」

「はいいい！お願いレーヴァティン……もう一度一緒に戦って！——」

『うん！任せて！』

翼さんと私は聖唱を口にすると、翼さんと私は光に包まれる。翼さんはシンフォギア「天羽々斬」を纏い、私の隣にはシンフォギア「レーヴァテイン」を纏った、妹のレーヴァテインが現れる。

これで戦況は4:3で私達の方が有利!……まあ、役立たずである私がいるんですけどね。

「よくもやってくれたわね、覚えていなさい」

「逃げるんですか?いや、逃がすとお思いで……?」

すると、フィーネ達はノイズを呼び出す。ノイズ達ぐらいなら、私達の今の戦力ならあつという間に殲滅できるのに……?

「自分達で呼び出したノイズを攻撃した!」

「ファツ!?なにやってんの?」

ノイズ達が攻撃によつて飛び散る。……ああ、これ、めんどくさいやつか。

「翼さん、ちよつとマズイかもしれませんが、こいつら増えてます。どうしましょう」

「このままだと無限増殖です」

「このままだと手に負えないよ〜!」

「なんだと!」

これ以上増殖されるのは非常にめんどくさい。レーヴァテインの絶唱を使えば多分増えないけど……!

「命拾いしましたね、フィーネ。ですが必ず私達はあなた達を地の果てまで追い詰めて今日の事を後悔させてやりましょう」

「……………」

フィーネ達は逃げた。絶対に許さんからなあいつら。少しでもレーヴァテインに危険な晒すやつは許さん。

その後合流した立花さんとクリスさん、それに翼さんが、絶唱を束ねてノイズ達を殲滅した。

その後帰投した私と加賀美さんは、二課に拘束された。

さよならおりん、おかえりおりん

色々やらかして捕まって、加賀美さんと特別室に放り込まれ一夜を明かした。

そして次の日。私と加賀美さんは拘束具を着せられて、面接室に2人とも並ばせられてる。

目の前にいるのは司令。後ろにいるのは黒服の人2人。

正直言っているのですか？私面接とか受ける前に気絶しますよ？いいの？もうゴールしてもいいよね？ね？

『志乃ちゃん頑張って！』

ペンダントを介してレーヴァテインが私に頑張るよう催促する。よし、なんとか気絶だけはしないように頑張ろう。緊張しないっていうのは無理な話です。

「何故こうして拘束されているかはわかるな」

「……はい」

「はっはっははい」ガタガタ

レーヴァテインに危害を加えられたことで頭がデッドヒートして勝手にシンフォギア纏って飛び出したせいです。

「加賀美くんや織田くんが思っている以上に事態は深刻だ、確かに君達が行った事は「救助活動」であり、最善であったかもしれない。しかし、観客を安心させる為とは言っても名乗ったのは不味かった」

日本政府はシンフォギアについての情報はしたみたいだけど、装者に関しては何だっただけみたい。

「すみません……」

「すすすすみません」ガタガタ

「確かに大勢の人間を救った事は賞賛されるだろう、現に日本政府に感謝や賞賛の言葉が届いている。だが同時に君達にとって本当にマズい事になった」

うえ？マズい事？なんだなんだ？

「加賀美詩織が装者である事と同時に配信者「おりん」である事が世間

に知られてしまった」

「フアツ!?なぜバレた!?!」

「……情報の出所は翼のファンだ、主要メディアは既にこれをニュースとして取り上げてしまった」

ええ……。

「コラボラジオよくやってましたからね……声でバレましたか」

「現在、君のチャンネルの登録者数が凄まじい勢いで増えている」

「いつそ殺せ!?!」

「そう言うと思って、この拘束をさせて貰った」

声でバレるおりんすこ。まあ多分私もわかると思いますけどね。だってダンゴムシだもの。

私が拘束されている理由ですか?ちよつとレーヴァテイン没収されそうになってからの記憶がないのでよくわかりません。

にしてもおりん可哀想。私なら死んじゃう。

「いつそ殺してくださいよお……」

「更に君達にとって悪いニュースがある」

「まだあるんですかあ……?」

「わっわ私にもですか……?」ガタガタ

嫌な予感がするぞ。こんなに嫌な予感がしたのは生まれて初めてレベルなんですけど。

「内閣が君『達』に会見配信を求めている」

「アツ……」

気絶してしまいました。

◆？

「すつすすみません！おおお騒がせしました……」ガタガタ

ほんの少しの間だけだったみたいだから話中断して待っててくれてみたい。ありがたみ。

「問題ない。……賞賛と感謝と同時に君達の安否を問うコメントが世界中から来ている」

「？なんでですか普通に公表すればいいだけじゃないですか？」

「……つい先程、政府は君『達』を「特異災害対策機動部」の公式広報として使う事を決定した」

「え」

「君達は否応が無く、表に立たなければならなくなったという事だ」

神は言っている。私にここで死ねと。そんなことしたら緊張で昏睡しちゃう……。

というかなんで私も!?おりんだけでいいじゃないか!!

「政府の一部では最初から「戦力として使えない」君を「広告」として利用するという声があった、それが今回の件で正体を明かしてしまっただが故にその声が再び上がり、高度な政治的判断でそれが採用されてしまった。

織田くんについても、データ上「戦力として使えない」と判断され、加賀美くんと同じく広報として使われることになった。織田くんは広告の裏方、つまり情報統制などを受け持ってもらうが、少しは人の前に立つことも覚悟してもらおう。織田くんは、そういうのは得意なんだろう？」

この人は知ってる……！私がおりんを素材にして色々やつちやつて
ることを……！そんな弱み掴まれたらやるしかないじゃないか……！死
ぬ……………。

確かに私は加賀美さんより弱い。弱い（大事なことなので2回言い
ました）。あーでもこれで更に役立たずな部分が曝け出されちゃうよ
……………。

「で、何時何処でやるんですか、配信」

おりん、結構平気そうだね。私また気絶しそうなのに。

「今日の正午、政府の公式チャンネルでやる事になった、配信機材は既
に用意されている所だ」

え、ええ……………。ちよつと早すぎませんか？私心の準備ができそうに
ないんだけど。

「で、何を発信すれば？」

「記者会見の様なモノだ、現在まとめている最中ではあるが、寄せられ
ている質問に答えていく形になる。織田くんは最初の自己紹介だけ
してくれたらいい」

「は、はい……………」

「他に質問はあるか？無ければ拘束を解いてすぐさま準備に向かつて
もらう事になるが」

よ、よかつた……………。徐々に慣らさせてくれ徐々に。

は……………。流石に、私がやらかしたことはかなりダメなことだった
ことは嫌でも理解させられましたよ。

「他に私への罰は？」

「安心しろそんなものはない、強いて言うならこれから忙しくなる、そ
れだけだ」

……………ん？私がやらかしたことは、こんな程度……………程度では許さ
れるはずではないのに。十分キツイけど。キツイけど！

「そんなバカなと思っっているだろうが、安心しろ。俺達は何があつて
も君達を守る、だから君達は安心して配信に臨んでくれ」

ん？ん……………んん？

「強いて言うなら「広報」となる事が君達への罰になる、世間からの悪

意、他国の思惑、そんなものには君達を巻き込ませてたまるか」

……やっぱり、OTONAは優しいです。変に配慮がいいことがね、レーヴァテイン。

「手ひどくやらかしたというのに、私は守ってもらえるんですか？」

「到底許されるべきことではないはずなのに……」

「当然だ」

『頑張らなきゃね！志乃ちゃん！』

……はあ。レーヴァテインに応援されちゃ、私もやらないわけにはいかないよね。

「わかりました、では……それと最後に」

どうしたおりん？

「なんだね？」

「給料は出ますか」

「当然」

こんなときでもおりんはおりんなんだね。なんだが安心したよ。

◆？

私はレーヴァテインと一緒ににぎりと緑茶を飲んで加賀美さん

と一緒に車に乗り込んでスタジオに向かう。

めちやくちや緊張する。おりんが翼さんとのコラボを生で見たときより緊張してる。

自己紹介が終わったら座っているだけでいいと言われたけど、それでも正直緊張を隠し通すことができるかわからない。

怖い。みんなに見られるのが。それから逃れるために、私はおりんの闇の世界に入ったはずなのに。

『志乃ちゃん大丈夫？』

ペンダントを通してレーヴァティンが私に心配の声をかけてくれる。

そうだ、私には闇の世界以外にも安心できる場所がある。レーヴァティンが手を握ってくれる。

「大丈夫…大丈夫…！」

私は自分に暗示をかける。

私はレーヴァティンを手離さない。だから、レーヴァティンも私のことを手離さないでくれるはずだ。だから、ずっとレーヴァティンが手を握ってくれる。それなら、なんとか耐えられそう。

スタジオに到着し、私と加賀美さんはマイクと、加賀美さんのみ紙を渡されていた。

「もうすぐ開始ですが、大丈夫ですか？」

「ごめんなさい正直大丈夫じゃないです。」

この人はオペレーターのあおいさん。意外と私とは交流があり、いつもレーヴァティンと楽しそうにしている。まぢジェラシー。

「大丈夫です、配信は慣れているので」

「ただただ大丈夫です！」ガタガタ

緊張でヤバイ。心臓が破裂しそう。もう無理。

すると、人からは見えない半透明のレーヴァティンが、私の手をギュツと握ってくれた。

途端に私の刺々しい緊張が、柔らかくなった。

「開始2分前！」

今なら大丈夫だ。おりんができるんだ、私だってできる…とは思わ

ないけど、最善を尽くそう。

3……………2……………1……………!

『こんにちは、皆さん。私は特異災害対策機動部に所属するシンフォギア「イカロス」の装者、加賀美詩織と申します』

『同じく特異災害対策機動部に所属するシンフォギア「レーヴァテイン」の装者、織田 志乃と申します』

私は無事に名乗りを言い終えたことに安堵を感じる。同時に気が抜けそうになり意識が飛びそうになるが、気を張り詰めらせてそれを防いだ。

すると、コメントが流れる。コメント欄は「やっぱりおりんだ!」「無事でよかった」「助けてくれてありがとう」「こんな若い子が戦ってるのか」「広報担当じゃないの?」「もう1人の子めっちゃ緊張してる」「ほんとだめっちゃ緊張してる」と流れる。

コメント流れるのかびっくりした。というかそんなに緊張してる!?ほんと!?はあくりラックスりラックス……。

というかここにもダンゴムシが湧いてるな。お前らは石の下で大人しくしてんしゃい(ブーメラン)。

『まず昨日のライブでの事件の報告です。「QUEENS of MUSIC」で突如発生したノイズを利用したテロ、主犯と見られる「武装組織ファイネ」およびマリア・カデンツァヴァ・イヴの身柄はまだ確保できていません』

すると、コメ欄に「取り逃がしたのか」「税金泥棒」「でも死人を出さなかったのは凄いや」「人質を助ける事を優先してたから仕方ない」「翼さんも無事でよかった」とコメントが流れる。

取り逃がしたのは本当に悔しい。このせいでまたレーヴァテインに危険が及ぶかもしれないし。

しかし感謝されるのは少し変な気持ちになる。私は私情で突っ込んでいっただけなのに。

『またマリア・カデンツァヴァ・イヴが言った「ノイズを操る力」ですが、実在します。同日、ノイズ研究の為に岩国の米軍基地へ護送された「ノイズを制御する道具」が奪われ、基地もまた壊滅しています。政

府はこれを武装組織フイーネの仕業と見ています。』

コメ欄に「そんなものがあるのか」「マズくないそれ」「とんでもない事になったな」「いい加減リラックスしろ」とコメントが流れる。

緊張のことは言わないでほんと恥ずかしいし私の性なんだから。

というか本当に不味い。ノイズなんて害悪なやつらが好きに発生するのは不都合しかない。シンフォギアを持つ私でさえ怖いのに、対抗手段を持たない一般人の人達から見たら、かなり怖いだろう。

『現在、国連と協力し、この事件に対応していく事が決定した所で、私からの報告は以上となります。ここからは多く寄せられた3つの質問に関して答えていきます』

コメ欄に「ついに明かされるのか」「おりん……」「これマジ?」「声からしてもう……」とざわつきが見られる。

ついに明かされる真実。私は自然とレーヴァテインの手を握る力が強くなるが、レーヴァテインを心配して意図的に緩める。

『私個人の事になるのですが、私は配信者「おりん」としてネット上で活動していました。これは事実です。昨日の事件の現場にも風鳴翼の一人のファンとして居合わせていました』

コメ欄は「うわああああおりんだああ!!」「おりんはかわいいぞ!!」「翼さんのライブを守ろうとしたのなら泣ける」「本当におりんだった」「おりんの仕事ってこれだったのか……」「ありがとうおりん」と感謝の言葉で溢れかえる。

おりんが感謝されるのは当たり前だと思う。おりんは私と違って咄嗟に行動に出ることが出来る。おりんはアンチコメが流れないことに少し不思議に思ってるようだが、それは私は当たり前のことだと思う。

「志乃ちゃんもありがとう!」「ありがとう2人とも」「織田さんもありがとう!!」

………なんで?なんで私に対する感謝もあるの?感謝ならおりんにしてよ。

私はそのコメント達を見て意識がまた飛びそうになるが、必死に堪

える。

違う、私はそんな優しくない。しかしコメント欄はおりに対してだけではなく、私に対しての感謝の言葉も含まれていた。

『次に、装者としての活動ですが。これは今年の4月からです、適性によるスカウトです。本来はデータ取りの為でしたが、緊急時などには対ノイズ戦も経験しています』

コメ欄に「命を大事にして」「あなた達がもっと早く動けば、死なずに済んだ人がいる」「おりに救われた命があるのか」「ありがとう」「2人ともありがとう!」「ノイズを滅ぼせ」とコメントが流れる。

やはりノイズに対する怒りや、憎しみ、その行き場のない感情を私達にぶつけようとする人達は存在するようだ。

その気持ちは私にはわかる。だって、私だって母さんを殺されたから。

嘘です。そんなに感じてません。母さんを殺されたことは、けど、レーヴァテインを襲おうとしたことは絶対に許さない。

『最後に、今後の「おりん」としての活動ですが……』

加賀美さんが「おりん」としての行動を発表しようとする。

コメント欄は「やめないで」「やめるな」「程々にやれ」と流れる。

……やっぱり、ダンゴムシ達は考えることは一緒だね。

コメント欄に次々と「お前の戦場はネットだぞ」「闇の中で待つてる」「おりんのラジオで救われた人間もいる事を忘れるな」といったコメントが流れる。

私のように、救われた人もいるのか。

コメント欄には更に「自分の清楚さは捨てられる癖に命は見捨てられない女」「暗黒の聖女」「陰キヤ救世主伝説」と流れる。

ダンゴムシはダンゴムシだね。やっぱり、おりんなしでは生きていけないんだよ。

ちらりとおりんの持つカンペを見る。

——この回答は本人の意思を尊重する。

そう書かれていた。

隣に座る加賀美さん、もとい「おりん」は言った。

『……私が望むので、まだしばらくは続けたいと思います』
やっぱり、おりの配信は私の居場所だね。

心のオアシス

私はいつものようにレーヴァティンを身に纏い、トレーニングルームに立っている。

トレーニングルームがどんどん変わっていく。あつという間にトレーニングルームは毎回違う見た目になる仮想の街になる。

「ふう〜っ……。行くよ、レーヴァティン」

『うん！』

私の問いかけに私の中でレーヴァティンが答える。すると、目の前に大型のノイズが現れる。

私が剣を握るように手を出すと、手の中にいつもの剣のレーヴァティンが現れる。

「やあああああつ!!」

私は剣を強く握ってノイズに向かって全力で走る。すると、私の走る方向に数え切れないほどの小型ノイズ達が現れる。

「お願い、レーヴァティン！」

「おっけー!!」

私は思いを込めて歌う。すると、前方に炎が現れたかと思うと、それは形を得てレーヴァティンとなる。

現れたレーヴァティンはその手に持った大きな剣に炎が纏われ、その剣を私の幼い体で大きく振るう。それだけで広範囲の小型ノイズ達は灰になり消えてしまう。

「やあああああつ!!」

私とレーヴァティンは左右対象の動きで大型ノイズの攻撃を躲しながら側面に回り込む。そして、私は右に、レーヴァティンは左に回り込んだ。

「はあああああつ!!」

私とレーヴァティンは同時に大型ノイズに思いつきり剣を右から左に薙ぐ。中心部分に回転が生まれ、内側から引き裂かれるようになり、ノイズは灰となって消える。

「志乃ちゃんハイタータッチッ！」

「はいはい」

私の方に駆け寄ってきたレーヴァテインが小さくジャンプしながらハイタッチを求めるので、私も手を出してハイタッチする。

すると、レーヴァテインは私に吸い込まれるように消えてしまう。

「さて……やるか……!」

私は深い深呼吸をする。そして、両手で持つ剣を再びしっかりと握り直す。

次の瞬間、ノイズ達が現れる。現れたのは数え切れないほどの小型ノイズと、2桁に及ぶ大型ノイズの大軍。

「あゝあゝあゝあゝ!!」

私は咆哮しながら全ての噴射口を使って高速移動しながらノイズ達に接近して斬りかかる。

こうなってる理由は、未だ緊張が抜けきってないからです。

◆?

「ハアツ…ハアツ…ハアツ…ハアツ…!!」

「志乃ちゃん大丈夫?」

「だ、だいじよぶ……！」

横で心配そうに私のことを見るリディアンの制服姿のレーヴァテインに向けて、私は親指を立ててグッドサインを送る。

翌日になっても昨日の配信での緊張が抜けないんですけどどうしてくれるんですか。ほんつとに害悪すぎる。お陰で眠れなかったよ……。

私はシンフォギアを解除してからトレーニングルームを出て、汗を拭く。

「志乃ちゃんお昼ご飯食べに行こ〜♪」

「そうだね、行こっか」

正直トレーニングのせいでお疲れなんです。ご飯はしっかり食べないとね！

「あっかつか加賀美さん！こんにちわ！」

「あ、志乃さんにレーヴァテインさん、こんにちわ」

「こんにちわー！」

私はレーヴァテインと手を繋いで食堂まで歩いていると、加賀美さんと会った。ごめんなさいまだおりんと居るのは慣れないんです、どうしたら慣れますか？

「かつ加賀美さんもおお昼ご飯ですか!？」

「ええ、良かったら一緒に行きませんか？」

加賀美さんに誘われた。どうしよう……！こ、これは広報として今後の関係を緩和するためにもなんとかするために――

「いいよー！」

レーヴァテイン!!私まだ考えてる！もうちよつと考える時間ちようだい！

「いいよね？志乃ちゃん」

「ううっ……いいですよー！」

「そうですか、なら一緒に行きましょうか」

上目遣いは可愛すぎる。負けても仕方ないよね？異論は認めなさいさせない。

私は、加賀美さんとレーヴァテインと一緒に食堂に行くことになっ

た。……心臓持つかな……？

◆？

歩くこと数分、食堂に到着した。そこには、立花さんや翼さん、クリスさん達がいました。

「詩織さんッ！織田さんッ！」

「おおわっ!？」

「あっ！躲された！」

「すっ、すみません！」

こつちに飛びついてきた立花さんを、反射的に体を捻って回避しちゃいました。一緒にいるだけでも緊張でやばいのに抱きつかれたらそのまま失神します（確信）

「な……なんですか、立花さん」

「よかった無事だったんですね！ずっと心配してたんですよ！」

あつ、加賀美さん抱きつかれてなんかまんざらでもなさそうな顔してる。いいよ、私家でレーヴァテイン抱っこするから。

『わーい！抱っこ抱っこー！』

レーヴァテインが私の中でそういう。はいはい、家に帰ったらね。

「おっさんにたっぷり叱られたか2人とも？」

「ええ、二日かけて叱られてもうくたくたです」

「こっこ怖かったです……」カタカタ

「ならアタシからは何もいわねえ、ただ……よかった」

司令怖い。超怖い。あんな威圧感すごい人に怒られて平気な人はいないと思います（小並感）。

というか私は怒られてのもあるけどまずトレーニングで疲れました。司令のトレーニングルームの仮想設定がトチ狂ってるんだ。許しておくれ。

翼さんの顔をチラツと見ると、その顔はなんだか浮かぬ顔をしていた。あんまりみない翼さんの落ち込んだ顔！更に場が緊迫して私緊張しちゃう。

「はあ、翼さん……そう落ち込まないでくださいよ。悪いのはフィーネ、そうでしょ？」

ナイスフォローおりん！よくそんなに気軽に話しかけられるね。私無理だ。多分一生。

「落ち込んでなんか……それよりも詩織と織田さんは、広報の仕事など本当に大丈夫なの？特に織田さん」

「えっあつだつだ大丈夫じゃないかもです……」

全然大丈夫じゃないよ。もう配信は勘弁。本当に。私緊張で本番中に倒れたら私恥ずか死する。

「……大丈夫、とは言い切れないけど、やりますよ私は。それに」「それに？」

「なんだかやつと私らしい戦い方を見つけた、様な気がしないでもありませんから」

なんだその発言はカッコいいな。いいもん、私レーヴァティンいるから。

私だってレーヴァティンを守るために強くなる。人には人の戦い方があるんだよ。

「そうです、翼さん達を世間の心無い言葉や中傷から守る避雷針とし

て、私は皆の日陰を守る存在になれるチャンスかもしれないから」
「そつ、そうです！」

「……っ！」

すると、立花さんが少しばかり体を震わせる。

そういえば、立花さんってあのライブの生き残りなんだっけ。一期生き残りの人達を迫害する風潮が広がってたなあ……。正直、ああいうのは苦手だから、私は関わってないんだけどね。

「当然立花さんも、守りますよ。あのライブの惨劇の様なあんなクソみたいな事は二度と起こさせません」

「えっ」

「わっわわ私もできるだけ頑張ってみます！」

一応広報の情報の方を担当するから、そういうのもできるかも。

考えてみれば、私がシンフォギアの装者になってからの初めてのまともな役割かも。おりん音MAD製作者というクソみたいな誇りにかけてやってやろうじゃないか。

「皆さんはノイズと戦ったり人を守ったりする。私はそんな皆さんを守る、それでいいじゃないですか」

「そ、そうです！（便乗）」

「それじゃ2人が守られてねえじゃねえか」

クリスさんがそう言うと、加賀美さんが指を振ってチツチツと
言って笑う。う、うぜえ……！

「守られていますよ、司令や二課の人達、それに皆さんにも」

「わ、私もレーヴァティンに守られていますよ……守られてはつかですか……」

レーヴァティンを守るために頑張ってるのに、守られてはつかだね。どうやったらレーヴァティンを守れるようになるんだろ？

「だから、任せてください。前みたいにただただ風に流されるだけの私じゃありませんから」

加賀美さんは私達の前でそう言った。私も闇の住人、ダンゴムシとして頑張らなきゃかな！

「わ、わっわわ私も、なるべくきき緊張ししないよう頑張りますす

！」

「早速できてないぞ」

全員が笑う。ちくしょうクリスマスさんめ、覚えていろよ！

◆？

家で私服に着替えたレーヴアティンと一緒に、パソコンの前に待機する。

それは、「おりん」の配信：ではなく、「特異災害対策機動部所属装者 加賀美詩織」の配信。

けど、私とレーヴアティンにとって名前の差は殆ど関係ない。おりんはおりん、その解釈でいいんだよ。

ネットニュースで見たところ、フィーネは犯行声明をネットに上げたようだ。予想外の出来事に焦ったな見た目ときつと腹の中も黒い女。

配信が開始する。開始人数は……に、20万!? トップアーティストなのか!? そうなのかー!?

『こんばんは、配信者「おりん」改め、シンフォギア装者「加賀美詩織」です。皆さんお待たせいたしました!』

手始めに加賀美さん……もうおりんでいいや！おりんだし。おりんは挨拶から入る。堅苦しいぞ、頼むからもつと柔らかくしてくれ。

コメ欄は「配信者おりんは死んだのか……」「萌え声なのに見た目かわいいいー114514点」「詩織……死おりん、しおりん！」「なんだ結局おりんじゃん！」「ゲロを吐いた口で歌って人を救う女」「マジかあ。昨日の会見マジかあ……」「もうBL配信できないねえ」「BL配信しろ」「配信してないでノイズと戦え」と早速軽くカオスである。やっぱりダンゴムシ達からしたら名前が変わってもおりんはおりんだよね。なんか安心した。

『今日はですね、私の立ち位置やこれまでの活動について報告しようと思います、許可が下りた分だけですけど』

私は知ってる。まあおりんとしての配信の部分は知らないけど、こういうことはおりん本人から聞かされる。

コメ欄は「マジか！」「国家機密じゃないの!?!」「おりんの歴史がまた一ページ」「シンフォギアってなんだ」「櫻井理論概要とシンフォギア概要は特異災害対策本部のページで公開されてるのでそこを見る」と困惑の声が上がっている。

まあ、最初からぶっ放してくるとは思わないよね。そこはおりんクオリティ。

『私がかつて適性があつたのでスカウトを受けて、あくまでデータ取りの為に装者になりました。基本的な仕事は歌って、武装を展開して、細かい数字を出すそんなものでした、毎日2時間だけの仕事でした。しかしある時からノイズが異常に出現する様になり、「実動班」と呼ばれる方々だけでは対処できず、私も戦線に参加する様になった次第です。そして先日のライブでその姿を公開してしまったが故に広報に正式に異動となった訳です。ちなみに織田さんも同じような感じですよ』

フツ……ンツ……!!あつ危ない……本当にいきなりすぎて気絶するところだった……。おのれおりん、ゆるさん！

コメ欄は「実動班がいるのか」「そらそうよ、自衛隊でも事務とかもあるんだらうから」「おりんの仕事は戦う事じゃなかったのか」「でも

ライブの時の動き凄かったよね」「志乃ちゃんの方も動きやばかったな」「どっちも凄かった」とコメントが流れる。

いやいや、私なんか全然だしただトレーニングルームで蒸気吹き出しながら剣振ってるだけだよ？おりんに比べたら多分全然だよ。……全然模擬戦とか、してないけど。

『こうしてノイズと戦うとやはり目の前で救えなかった命なんてももあります、私が最初に救えなかったのは同じ機動部の1課の隊員さん達でした。避難通路の確保の為に命を張っていた方々でした。いくらノイズと戦えるとはいえシンフォギアは現状、ごく限られた数しか存在しません。やはり間に合わない時もあります、救えない人も居ます。ですけど、装者の方々を責めるのはやめてください、皆、等しく命を張って戦ってます。不満ややり場の無い怒りは私が受け止めます、それが私の、広報としての、「日陰を作る者」の務めです』

なんでだろ、目から汗が……。これが……。涙……。？とかいうのは置いていてなんで泣いてんだろ私。なんかおりんが偉大で嬉しいです。ダンゴムシ冥利に尽きる。

コメ欄は「おりんが、ここまで大きな存在になるとは思ってたなかった」「すごい覚悟だ」「日陰はもう俺達だけじゃなく、皆のものでもあるんだな……。」としんみりした雰囲気になる。

そっか、ダンゴムシだけじゃなくて、色々な人もこの日陰に来るんだ、改めて考えたらそうだった。

『同時に装者の方々だけではなく、皆さんの命を守り、安心させる事も私の役目です。いかにして特異災害対策機動部は皆さんの安全を守るかも、いずれは紹介していく次第です』

はあく……。荷が重い……。レーヴァティンを守ることをできることすら出来ない私が、みんなを守るなんてことができるかな？

コメ欄は「対策マニュアル皆も読もうな」「近場のシエルターや避難方法も確認していけ」「子供にばかり頼るんじゃねえぞ」と対抗心を少しばかり燃やすようなコメントが見られる。

どうすればいいんだろ、私。みんなの期待に応えられるのかな？

怖い、期待を裏切るのが、裏切って非難を浴びるのが。
すると、右手が温かい感触に包まれる。

「志乃ちゃんなら大丈夫♪」

「……………ふふ、ありがとう」

手を握ってくれたレーヴァテインの頭を左手で撫でる。すると、
レーヴァテインは嬉しそうな顔で私のことを見つめる。

こんな時にまで、レーヴァテインに助けられてばっかだなあ、私。
けど、そうしないと何もできないかも。

…やっぱり、レーヴァテインと出会ってよかった。

『ありがとうございます、今日の配信は一曲歌って終わりにしたいと
思います、これは特異災害による犠牲者の皆様への鎮魂歌として「や
すらぎ」を』

おりんは歌う。安らぎを与えるために、戦うために、守るために。

コメ欄は「ありがとう」「これからも続けて欲しい」「たまには息抜
きな配信もして」「平和になったらBL配信を復活させろ」「もうゲロ
は吐くなよ!」「これからも応援していく」「更に応援していく方向
に)切り替えていく」「最後までイキリ生き続けろ」「再びおりんとし
てイキれる日を待ってる」と感謝のコメントが流れる。頼むからゲロ
は吐かないでくれ。

やっぱり、ダンゴムシはダンゴムシ、おりんはおりんか。

並び立つ正体

フィーネの宣戦布告から一週間が経ちました。

あれからの動きはなし。不気味な程静かものです。

いや、いいんだよ？何も起きないなら。でもほら宣戦布告までしたんだから何か起きるのは必然な訳だし、いつ来るかわかんない恐怖に緊張でちよつとまた倒れそうで怖い。気絶してる間になんかあったら洒落にならないぞ私い！

チラリとパソコンのメール表示を見る。

『今日も動きは無し、明日はメデイカルチェックの為、8時には出られる様に』

二課からのメールには、そう書かれていた。

学校に行かなくてもいい、というのは、確かに他の人からすれば嬉しいかもしれないけどさ。正直この情報を受け取ったとしても歌の上達の為に「お母さん」に頼んでこの学校に入学したわけだ。行かなければならないのだ。

だとしても……やっぱり不安なところはある。

「志乃ちゃん」

レーヴァテインが、ベッドで横になっている私の上に馬乗りの形で現れる。

私は首にかけているレーヴァテインをギュツと軽く握りレーヴァテインを見る。

顔を合わせてえへへ、と笑うレーヴァテインを見て、私の心は癒される。

はあ：色々ありすぎて、私疲れたよ。

おりんつていう広告塔のバックアップをするという仕事を与えられた中、私のやる仕事なんだと思う？

おりんの配信見ることだよ？いつもと変わんねー。

ぶつちやけ何かやらかさなきやいいんだよ何かを。：やめてくれよ？

……………よし、もう大丈夫だ。なんか疲れてるけど私は元気で
す。

「レーヴァテイン」

「ん？志乃ちゃんどうしたのー？わっ」

馬乗りになっている志乃ちゃんレーヴァテインを、私はぎゅーつと
抱きしめる。

ああ…あつたかいなあ…。そういえば、小さい頃、私もお母さんに
急に抱きつかれてたっけ。

お母さんはもういない。心の支えはおりとレーヴァテイン。

これでいい。むしろ、この状況は私には恵まれすぎるのかもしれない
いなあ…。

「あつたかい…」

「えー？志乃ちゃんもあつたかいよー！」

「…ありがとう、もう遅いし、寝よっか」

「うん！」

私はレーヴァテインを横に移動させて、再び横になる。

「おやすみ、志乃ちゃん」

「おやすみ、レーヴァテイン」

私は電気を消し、眠りについた。

ところで、

学校で私に質問責めやめてくれない!?何回気絶してるかわからな
いわ！

いやー無理だわ、大量の人(十数人)に囲まれるの無理だわー。あ
んな状況下で無事でいられるわけないわ。やっぱ翼さんとか芸能人
みたいに、大勢の前に立って何かをする、っていうのは凄く大変だね。

あと質問責めにこないのはいいいけど休み時間に教室を静かな雰
気にして私を見ないで！

◆？

「おはようございます、司令」

「おおおはようございます！」カタカタ

「おはよう、加賀美くん、織田くん」

慣れない。

わかって。隣には今まで心の支えにしてきた人が隣にいて、目の前には筋骨隆々の上司。

緊張しない人いるの？これ。私震えが止まるようになるのは年単位になりそうなんだけど。

「状況は動きましたか？」

「ああ、昨晚。武装組織フィーネ、いやF・I・S.のアジトを特定して装者三人による突入を試みた」

「終わったと言わないという事は逃げられたんですね。それで、F・I・S.とは何ですか？」

「彼女等は米国の聖遺物研究機関に所属していた、日本の情報開示以前から存在し、おそらく……フィーネが米国と繋がっていた際に出来た研究機関だったそうだ」

「なるほど、ちなみにこの辺りの情報はまた発表とかやるんですか？」
公式での発表は私は出さなくてください。裏方の仕事をさせてください。

「いや、その必要はまだない……それよりも、体調は大丈夫か？」

「はあ……そこそこ悪いです、なんていうか体が重いですね」

「えっ……だっ、大丈夫ですか？」

「とりあえずは大丈夫です」

加賀美さんまだ悪かったのか。最近ちよつと体調崩すこと多い？

……まあ、私が余計に参拝することはないか。加賀美さん私よりも丈夫そうだし（偏見）。

「……今日はギアを展開した場合のデータも取る、君の場合はそこが関係するかもしれないからな」

え？ギアって体調に関わったりするの？初耳なんだけど。

まあいいや、本人が大丈夫っていうなら大丈夫でしょ。

「セリヤアツツ！」

ドゴンツツ！という轟音と空気の重い振動と共に、仮想ノイズを大剣で叩き潰す。

私は現在トレーニングルームでいつものトレーニング：というわけではなく、メデイカルルームで全身をチェックの一端です。

メデイカルルームで全身をチェックされましたが、私は特に異常はなかったようだけど、加賀美さんは適合率が低下してるらしい。

私の場合、また上がった。日々上がり続けている。

この差はなんだろう？何かあるんだろうけど、私自身ギアについて詳しいわけじゃないしそこは専門の人に任せる。

現在やってるのはギアの動作確認。というわけらしいので、仮想ノイズと戦ってる。

「ダリヤアツツ!!」

「やっー！」

私が大剣で前にいる仮想ノイズを薙ぎ倒すと、後ろで構えていたレーヴァテインが後ろから跳び、多くの仮想ノイズを吹き飛ばす。

「志乃ちゃん、大丈夫？」

「…大丈夫、無理はしてないよ」

あれから過度のトレーニングはしないようになった。

前までは一人でトレーニングしてたが、今はレーヴァテインと2人で、トレーニングに取り組んでいた。お陰でコンビネーションはバツチリだ。

「ゼアッ！」

「おりやあー！」

そういえば、フィーネ側にも息ぴったりな2人組がいたな、と思いつ出す。緑色の鎌持った子と、ピンクの鋸?の子。息ピッタリだったなあ。

「最後の一撃ッ！行くよ、レーヴァテイン！」

「うん！」

レーヴァテインが私の隣に立つ。あと残りの仮想ノイズは目の前の集団のみ。

私とレーヴァテインの方が、ずっと息ピッタリ。そうに違いない。だって私はレーヴァテイン、レーヴァテインは私、正に一心同体なんだから。

私とレーヴァテインは同時に蒸気を吹き出して加速しながら駆け出し、更に大剣に炎を纏わせて、お互い反対方向に大剣を振る。

大剣から生み出された剣圧と風圧に炎が乗り、ノイズ達を一掃する。

仮想ノイズは全て崩れ去り、プログラム終了。仮想空間が歪み始め、それが収まった時には、トレーニングルームにいた。

「ふう〜…」

「織田 志乃さん、お疲れ様でした」

私とレーヴァテインはギアを解除し、休んでいると、トレーニングルームに医師が入ってきた。

「ギアにも異常なしです。レーヴァテインちゃんもお疲れ様」

「おおお疲れ様です」カタカタ

緊張して震えるが、すると隣にいたレーヴァテインが手を握ってくれた。

すると、何故か幾許か緊張が和らいだ……気がする。

「♪」

レーヴァティンはニコニコと上機嫌な顔で私の手をぎゅつと握る。
可愛い。いやー、こういうとき語彙力が欲しいけど、この感想のみで全然よろし。ただひたすらに可愛い。

「しかしこうなってくると不思議なのは…レーヴァティンちゃんですね…」

医師の人は先程取ったであろうデータを見つめつつ、口からそう零す。

レーヴァティンはキョトンとしているが、確かに気になるところがある。

レーヴァティンは私に「仮面ラ○ダーエグ○イドのパ○ドみたいなものだよ」と言っただけど、改めて考えてみるとん？となるころはある。

だって、そうなる私の中にとつとレーヴァティンが居たことになるし。けど私がレーヴァティンに出会ったのはこの間だし。

私は頭を抱え、レーヴァティンに聞いてみたらいいんじゃない？というトチ狂った発想に至る。

そうはならんやろ。

「レーヴァティン、何か知ってる？」

完全にダメ元というか、知ってるはずない質問。

「うん」

「あっそっかあ…（啞然）」

「え!?わかってるのか!?自分のことを!？」

…。
そういうえば例出せてる時点で知ってるって考えればよかつたなあ…。

「えっとね、私は志乃ちゃんなの。」

私は元々レーヴァティンっていう聖遺物の意思の一片で、ずーっと眠ってたけど、志乃ちゃんが起こしてくれた。

それで、一緒に過ごしているうちに、志乃ちゃんを好きになったの「やばい、このレーヴァティン可愛い…可愛いけど…一瞬なんでハイライト消えたのか教えて。」

「志乃ちゃんがギアを纏えば纏うほど、私の意思は大きくなって、志乃

ちやんの歌によって出たフォニックゲインを貯めてたの」

「え……貯めるとか出来るんですか……？」

「いや……普通なら出来ないはずだ。」

フォニックゲインは歌を歌ってる間にしか発生できない。それ故に、歌を歌えなくなればギアの出力が低下するし、その逆もまた然りだ」

「そうやって、段々志乃ちゃんに干渉できるようになっていったの。最初は夢の中。そして視覚、触覚……」

そして、ようやく『志乃ちゃんという人物のデータ』を『フォニックゲインによるアームドギアの変形』を応用したものに掛け合わせ、私がいるの」

「……………」

なるほど。歌か。

「レーヴァテイン、じゃあ私に歌をせがんでたのって……」

「うん、フォニックゲインの供給」

そうだったのか……。だから、私の見た目をしてるのも納得するし、そうであっても性格が明らかに違うのも合点がいく。

「じゃあ、なんでギアを纏ってる最中も出れるようになったの？」

これが分からない。レーヴァテインがレーヴァテインなら、私がギアを纏ってる最中は出れないはずじゃ……ましてやギアを纏って。

「私と志乃ちゃんの相性は、とつてもいいんだ。私を肌身離さず持っている間、それだけで適合係数が常に上がってる。」

それに、志乃ちゃんの強い思いが、私をこうやって出れるようにしてくれたんだ」

強い思い……。そっか、あの時か……。

『レーヴァテiiiiiiiiインツ!!—————!!』

頭の中に、あの時のことを思い出す。

「…というわけだよつ。…志乃ちゃん、顔が暗いよ？大丈夫——」
私はレーヴァテインを抱きしめる。

そっか、レーヴァテインは可もなく不可もなく、私の気持ちに応えていてくれたんだ。

「ありがとうね、レーヴァテイン」

「……………えへへ♪」

「……………ゴホン」

「はっ！」

！
ごめんなさい。完全に我らの世界におりました。許してください

「では、このことは司令にお伝えしておきますね。一応記録も残します。いいですね？」

「はいっ」

私はレーヴァテインの手を握りながらそう答えた。

あたたかさ

『ギャルゲやります』

は？ (困惑)

「は？」「ええ… (困惑)」「なんで？」「一週間持たなかったのか… (困惑)」「今日もおりんはかわいいなあ (白目)」「ギャルゲ配信をしよう… (嘲笑)」「ギャルゲ配信する国防」「クソザコ生主」「元は税金」

コメント欄のダンゴムシは元気だなあ (白目)。あ、人数が減った。おりんは配信自体はしてたんだよ？してただけどき、雑談配信だけだったの。で、今日はゲーム配信がようやくできるって聞いたから待ってたら…ギャルゲとはこれいかに…。

「志乃ちゃんギャルゲってなにー？」

「ぐっ…」

これは…セーフか？セーフなのか？教えてえらいひと！

…R-18じゃないからセーフだよな？うん、セーフ。

「か、可愛い子と親密な関係になっていくようにするゲームだよ…」カタカタ

「そうなんだー。あれ？志乃ちゃん震えてるよ？大丈夫？」

「う、うん、大丈夫」

やばい…気絶しそう。ここのとこ二課の関係者と関わる日は確実に気絶してる…おりんの放送は除くよ！今日以外！

『あのですね、最近「適合率」っていうんですけど、シンフォギアとの相性が急激に上がったり下がったりで体調が崩れたりするんで、研究者一同に「精神を安定させて」適性値を維持しろって言われました。私の精神安定剤代わりの配信なんで今日はぶっちゃけ、まともな話も何も出てきません、それでもよければどうぞ』

「ええ… (困惑)」「上げたり下げたりして適性値を維持しろ」「クソザコメンタル」「所詮はおりん」「帰ってきたおりん」「世界を救うギャルゲがある」

おりんのメンタルの弱さをみんなが次々に罵倒していく。

「こ、これはひどい……!」(コメントを書き込みつつ) 気絶してないからメンタル強いよ…。

「おっ待てい (江戸っ子) 志乃ちゃんの方が多分メンタル弱いゾ」

マ。アアアアアアアアア!!? 私のこと話題に出し始めたやつ誰だあああああ!!!

「ええ〜ほんとでござるかあ〜?」「絶対おりんの方がメンタル弱いゾ」「いやでもあの公式の配信のときめちやくちや震えてたぞ」「おりんが場慣れしてるだけ説」

あーあー広がる広がる広がるプラズマ (白目)。もう私のことに触れないで!

「織田さんですか?…ぶっちゃけた話しますけど、正直メンタル弱いです」

「おりんに公言されて草」「本人が見ている可能性を」

グワーツ!!おりんに公言されたーツ!

やばい、視界がぐらついてきた…。私のメンタルはポドポドだ!

「織田さん見る日は必ずメンタルがオーバーヒートして気絶してますからね:例えば私がおりんって二課にバレてるの知ったとき気絶してましたね」

「草」「草」「草」「ファツ!?!」「気絶するのか…(困惑)」「想像以上にメンタル弱くて大草原」「いやなんでそのタイミングで…まさか!?!」「志乃ちゃんまさかのダンゴムシ」「闇 の 住 民」

アッアッアッアッアッアッ!!なんてこと口走ってくれてるんですかアーツ!?

しかしああああ慌てるな(カタカタ) このアカウントしかない上にこのアカウントはおりんのMADも作ってるんだ…下手に発言するとおりんに私がMAD作者だとバレる…!

「志乃ちゃん顔色悪いよ?」

バツ!と声の方向に顔を向ける。そこには、私のことをとても心配そうに見るレーヴアテインが。

ぐっ…非常に心苦しい…!ぶっちゃけ今でも気絶しそうで大丈夫

じゃない……でもこんな苦悩知られたくない……!

「だ、大丈夫大丈夫、平気、へっちゃら」

とりあえず笑顔を作って安心させよう。……よし、この放送終わったら寝よう。

『で、今日やるギャルゲは「2枚目のジョーカー」所謂泣きゲーらしいです』

あ……やった話ズレた……というか戻った……。やばい……目が霞む……!

「メンタル維持するのに泣きにいくのか(困惑)」「おい適合率の話嘘だろ!」「嘘だゾ絶対ただの趣味だぞ」「これだからおりんは」「名作じゃねえか!!」「今、関連商品欄から買った」「滅茶苦茶売れてるじゃねえか!」「これR-15だぞ」「エロゲじゃないので問題ない」

コメントが瞬く間に流れていく。

ちなみに視聴人数がどんどん減って、最初は13万人も人数がいたのに今じゃ5万人にまで減ってる。

……ごめんね!なんかね!こんな狂った公式で!

『適合率の話は一応公開されてる櫻井理論にも書いていますけどシンフォギアが武装機能つかったりする時にどうしても「反動」がくるんですよ、適合率が高ければ高いほどこの反動は小さくなり、低いほど反動は大きくなる、あまりに低いと体動かすだけで全身に負荷がかかるんです。実動班の方々がつい先日その適合率の問題で少しダメージを負ったので、そのデータ取りのもあるんですよ』

「ちゃんと仕事だったのか……」「戦ったり戦わなかったりしろ」「シンフォギア装者って大変そう……」

そういえば、適合率を引き上げる薬があるんだよね。確か……LINKERだったっけ。なんかのときにそんな話を聞いた気が……。

そんなこんなで、おりんの姿が映っている画面が縮小され、端に移されてゲーム画面が映される。

OPが終わり、セーブデータが作成される。

ゲームスタート。ゲーム名は「2枚目のジョーカー」。過去に何周かしたなーって……。ルート分岐によって死ぬことがある。

そういえば偶々手に入れた「カオスヘ○ド」っていうゲームである

ところで死にまくった記憶が…うっ！

『これがヒロインのはじめちゃんですか、ハートモチーフの服がかわいいですね』

「おまかわ」「せっかくだからシンフォギア着て配信して」「しおりんも変身して」「今日こそシンフォギア見せて」

最近ダンゴムシ達が自己主張を始めた。

具体的に言くと、おりんにシンフォギアを着ての配信をやたらとせがむ。

あれね、ほんと一瞬だけど服の分解↓シンフォギアを纏うから裸になるの。

…そりゃ配信じゃ無理だよ。おりん基本アーカイブ残すのにそんなの残したら…ねえ？多分残さないとと思うけど。

『ははは、こやつらめ。シンフォギアは展開したら独特の信号が出て本部に連絡が行くんですよ、こんな事で展開したと言える訳無いでしょうが、ライブの時の動画と公式ページの私の動画で見なされ』

「残念だ」「失望しました、おりんのファンやめます」「あの鉄壁スクートはすごい」「STG自機みたいな姿になるよね」「ホーミングレーザーは卑怯だと思う」「ノイズだけ狙い撃ちしたのはすごかった」「志乃ちゃんも忘れるなよ！」「掛け声が強すぎる」「技のおりん 力の志乃ちゃん」「戦い方がロマンに溢れすぎてる」

公式でね、私とおりんをね、ゲームとかのモーション映像みたいな感じでシンフォギアの動画が作られてるの。大体20分ぐらい。

で、その編集全部じゃないですけど殆ど私がやったんですよ。

いやー、あの時はビビった、ビビりすぎて気絶しましたよ。うん、いつものことだネ！

ちなみに私の映像隠し撮りだからな!?ありがとう!多分意識してたら緊張で体動かない!でも次やったら盗撮でなんかもう色々対処してもらおう。

あと誰が「力の志乃ちゃん」だ!確かにパワーでゴリ押ししてる感あるけどこれしか戦い方わからないの!

ちなみにレーヴァテインと2人でのやつはやってない。

あれ、ちょっとした機密事項になって公表されないらしい。まあ、あんまり関係ないけど。

おりんはゲームを進める、主人公の「かずま」とヒロインである「はじめ」先輩である「さくや」後輩である「むつき」の4人がストーリーの主役、メインとなるキャラが章毎に変わり、そこでの行動の結果でエンディングが変わる。

『なんでカードが一枚も無いのにこんな強敵に立ち向かうんですかホント命知らずですよねこの主人公』

「ライブの会場で人質取られてノイズに突っ込んでいったお前が言うな」「ノイズを踏み台にした女」「ノイズにマウントを取る女」

凄いよねおりん。いつの間にかノイズの方行ってるんだから。尊敬しちゃうね（大嘘）。私の中の正義はレーヴァテインです。だれがなんと言おうと変わることはない。ちなみに居場所はダーク・おりんワールドだ。みんなもおいでよ（暗黒微笑）。

『気合で勝ちましたね……というかトランスデバイスシステムってシンフォギアと似てますよね、適合率で能力変わるとか……』

「そうなのか」「気合のなさそうなおりんは弱そう」「おりんは覚悟を決めると強いから……」

え…適合率で能力変わったりするっけ…。あ、でも立花さん腕のやつ変形するよね、よく。強そう（コナミ）。

覚悟…ねえ…。

「?どうしたの志乃ちゃん?」

「なんでもないない」

お母さんが死んだって聞いたとき、「覚悟」はした。けど、その覚悟は、何に対する覚悟だったっけ。

『だからなんで「さくや」も初期状態でラスボスに挑むんですか、むしろ飛ばない方が強いまでありますよ』

「弱フォーム」「おりんも飛ばずに敵を倒せ」「格闘縛りをしろ」「ああ、ルート決まったぞこれ」

強キャラ特攻+飛ぶと弱い+基本フォームが最強。これは……!

これなんのルートになるんだっけか。トゥルー?バッド?

『えっ!? さくや!?!』

「落ちたな…」「おめでとうトゥルルート入った」「初見でトゥルーに行くのか…」（困惑）」

あ、トゥルーだったわ。だいぶ前にやったから忘れちゃったわ。

さて、おりんは一旦休憩らしい。あー、この配信見てたらこのゲーム久しぶりにやってみたくなってきた。

「志乃ちゃん私これやってみたい!」

「んー…」

いいのか…? これは教育上よくないのでは…!?

「…ダメ?」

「いいよ」

勝てなかった…レーヴァテインの上目遣いにはね…。

レーヴァテインの頭を撫でる。レーヴァテインは嬉しそうな顔をしながら私の顔を見る。

そういえば、最近体温上がってるんだよね。平熱が38度ぐらいになってる。…病気かよ。

いや、体調面には何も問題ない。単純に体温が高いだけだ。

でも、他の人に触れると少しひんやりするけど、レーヴァテインは「人肌に触れている」と感じれる温かさを感じる。

撫でられるのも嬉しいんだけど、撫でるのも楽しい。

…:…:こういう顔を見ると、親は嬉しいんだろうね、お母さん。

『ただいまー』

お。おりんが戻ってきた。

「さて、その手に持っているものはなんだ」「ほう、冷凍焼きおにぎりですか。夜食にバランスもいい」

私はあるまり冷凍焼きおにぎり食べないな…:。カップ麺ばかり食べてる…:。ふっ:健康的な食事なんて味気ないんですよ! (暴論)

『まあですね、おにぎりでも食べながらラストスパート行こうと思えますよ』

「夜食配信だあああ!」「帰った奴らー! 帰った奴らみてるかー!」「女の子の食事を見れるとは夜更かしした甲斐があった」

変態が湧いてますねクオレハ…。くっ…手に持つ焼きおにぎりを見るとお腹減ってきた…。後でなんか食べよ…。

『はむっ…くっ』

ん？

「は？」「えっ」「なんで…？」

なんか今ボリツという焼きおにぎりという比較的柔らかいものから発されてはいけない音が…。

『どうしました？』

「おりん…おまえ…」「そんなに思いつめてたのか…」「冷凍焼きおにぎりを温めない女」「冷凍焼きおにぎりを凍ったまま食う女」「冷徹女」

ええ…(困惑)。焼きおにぎりは「焼き」が付いてるんだから温めるでしょ…。あつたかくなったら大体の食べ物美味しいぞ?!いや冷たい方がいい場合もあるけど…。

『やりませんか？冷凍食品そのまま食べるのって』

「ええ…(困惑)」「ええ…(ドン引き)」「おりんお前…本当にお前…」「心配して損した」「冷凍食品を温めずに食べる国防女」「装者のエネルギー源」「じゃあ志乃ちゃんも…?」「草」「草」

オイイ！私に飛び火するのヤメロオ！私はあつたためて食べるぞ！
唐突な風評被害をヤメルオ！

『いつも配信の時の間食こんな感じですよ』

「今までもやってたのか!」「まってスナック菓子かと思ってたんだが!?!」「アイス食べてるのかと…」

えっ!?!いつも煎餅かと思ってたあれ!?!あれ冷凍焼きおにぎり(Ver. 冷たい)だったのか!?!ウソオ!?!

『と、とにかくですね。続きやってきます』

「草」「草」「おりんの変なトコみちやった…」「この国の行き先を憂う」「こんなのに守られてたのか」

こ　　　　　の。流石に草生い茂るわ。

最後の敵を倒してエピローグかと思いきや、始まる最終章、怒涛の展開、ヒロインとの敵対、世界の破滅、そして明かされる主人公こそ

が「2枚目のジョーカー」である事、ちゃっかり生きてた先輩。そうだよ！この怒涛の展開だよおりん！

『ああ、タイトル……ここで回収するんですか』

「タイトル回収」「おつかれ」「感動のエンディングだぞ、泣け」「おりんの冷凍おにぎりのせいで台無しだよ！」「感動を冷ます女」

そして全ての話題をかつさらっていった冷凍焼きおにぎり……。うん、まあ……うん！（適当）

『これでトゥルルルートはクリア、今日の配信はここまでにしたいと思います』

「おつおりん」「毎日冷凍食品を温めて食べ」「明日も配信しろ」「冷凍食品を温めろ」

最後までダンゴムシ達は冷凍焼きおにぎりの話題で持ちきりである。気持ちはわかる。

さて、配信が終わった。寝ようかな……

パソコンをシャットダウンして閉じ、ベッドで横になる。そして私の動きに合わせて、レーヴァテインもベッドで横になる。

そういえば、小さい頃お母さんにべったりだったな私……。そんなことを思い出す。

「レーヴァテインおやすみ」

「うん、志乃ちゃんおやすみ」

私はレーヴァテインを抱いて、布団をかける。布団はクーラーが効いていてひんやりしているが、抱いているレーヴァテインはあったかい。

私はレーヴァテインのあったかさに眠気をそそられ、眠りに落ちた……。

私は私じゃなくても私は

メデイカルルーム立花さんに占領されとるやんけ…（心配）
立花さんが現在絶賛非常にやばい状態になっているらしい。

どうやら、融合症例？がかなり進行しているらしい。
最悪の場合、というかこのまま放置して、進行が続くと死んでしま
うらしい。

これって、シンフォギアの影響…なんだよね。相変わらず聖遺物つ
ていうのはよくわかんない。

それはそうとして…人が…しかも、一応関わりがある人が死ぬかも
しれない、と聞くと、やっぱり怖いし、不安になる。

お母さんは突然死んだ。それは病気で死んだわけじゃない。突然、
私の側からいなくなってしまった。

けど、立花さんは違う。前もって、死ぬと言われれば、それはそれ
で嫌だ。

だって考えてよ。突然死んじやって一気に叩き落されるのと、死ぬ
とわかって死ぬ方向に進んでいくのじゃ、恐怖の感じ方も違うし、絶
望感も違う。

…やっぱり、人が死ぬっていうのは良いことない。ハイパー陽キャ
で少し苦手だけど。

そういえば、最近加賀美さんもよくメデイカルルームに来てる。そ
れについてはよく知らない。他の装者の人にも伝えてないみたいだ
し、まあ大丈夫でしょ。

それと私。熱があること言ったら検査されたよ！やったね！
ちよつと怖くて緊張で泣きそうになったけど大丈夫！レーヴァティ
ンいたし！

結果は適合係数？が上がってくるとのこと。

簡単に言えばレーヴァティンとの相性が更に良くなってるってこ
とだよ。デメリットも熱が上がるぐらいだし、ギアの出力が上がる
し、いいことづくめだね！

…まあ、嫌な予感がするのはほつとく。

自室のベッドに寝っ転がる。前に比べて、ベッドがよりひんやり感じられる。

「しーのちゃん！」

「あいたあ！」

レーヴァテインがベッドで寝転がってブーツとしている私に向かってダイブ。お腹の真ん中にクリティカル！流石に痛い（痛い）

「志乃ちゃん大丈夫？」

「あたたあ…。うん、大丈夫大丈夫。レーヴァテインは？」

「平気！へっちやら！」

……………。

あることを、思いついた。

「ねえ、レーヴァテイン」

「んー？……どうしたの？」

さっきまで明るかったレーヴァテインの顔が、私の顔を見ると、少し固くなった。悲しい。

レーヴァテインに、聞きたいことがあった。

それを聞いたなら、レーヴァテインの顔が、更に固くなって、悲しい気持ちになるのは、正直嫌だ。けど、今ここで聞いておきたい。

「もしもね？」

「うん」

「仮の話ね？」

「うん」

「もしものことだよ？」

「…うん」

怖くて本題の質問に中々踏み入れない。

けど、ここまでは散々気絶してきたし、勇気を出す場面も断然増えた。ここで聞かなきゃ、女が廃る！

「……もし、私がこのまま死ぬって言われたら、どう思う？」

「……………」

立花さんが、このままだと死ぬということを知っていて、どうしても聞きたくなくなってしまった。

レーヴァテインの顔から、まだ小さく残っていた笑顔が消え、私の目をジッと見る。

その顔は、ホワホワとした幸せになれるような雰囲気ではなく、真剣で、私のことを見透かすような雰囲気だった。

いつも可愛い可愛いって思ってたけど、こんな顔もかっこかわいい。

「……それは」

「……それは？」

レーヴァテインが口を開く。

正直、答えを聞くのが怖い。

どんな答えなんだろう？甘く優しい？それとも……とても、キツイ、辛辣な答え？

……やめだやめ、考えるだけネガティブな発想が出てくるだけだ。

「きつと、志乃ちゃんと一緒だよ」

「……」

答えた瞬間、レーヴァテインの顔は、ほんわかした笑顔だった。

そうだよ。そうだよ。よかった。

「シーのちゃん！」

「レーヴァテイン！」

お互いにギュッと抱きしめる。気持ちいい。あつたかい。やっぱりこれだね。

レーヴァテインの答えに、私は心底落ち着いた。考えることが一緒なのは、嬉しい。だって、

（私はレーヴァテイン（志乃ちゃん）、レーヴァテイン（志乃ちゃん）は私）

（私が死んでも、レーヴァテイン（志乃ちゃん）がいる）

私はレーヴァテインの温かさを堪能した。

それからぽいぽい（意味不明）。おりんの配信。

『明日から学校に復帰するので、ちよおーっと今日の配信で気合入れようと思います』

「おりん復学マジ!?」「おりんと生で会える子がうらやましい」「気をつけて行ってね、おりんを狙う奴がいるかもしれない」「いやおりんに返り討ちにされるだろ」「国防少女やぞ」「そういえば志乃ちゃんは?」「既に復帰してるらしいゾ」「学校から配信しろ」「がんばって頭おりんから卒業しろ」

ファッ!?マジで!?ナイスウ!!

コメントがうるさい。まあ、気持ちはわかる。私もめっちゃ興奮してる。

これでようやく質問攻め↓クツソ気まずい雰囲気から卒業だぜええええ!!

あれ?そういえばおりんと同じクラスだから私も巻き込まれるのでは?!

……い、いや!気にするな!気にしたら明日学校行けなくなるぞ!

『じゃあ今日は「さやかの唄」をやります』

「あっ（察し）」「純愛ゲーやー!」「開幕グロ肉やめろ」「おまえーっ!」

「グロ注意やぞ」「リンク貼ってるから概要欄見て、察して」

許して（懇願）レーヴァテインいるからああ!教育によろしくないのおお!

ん?でももう既にBLとかやってるからそこまで影響はない…:わけないわ。うん。ダメです!

コメ欄のダンゴムシ達も唐突な展開に阿鼻叫喚の図となっている。逃げ惑え…:私とレーヴァテインを隠すんだYO!木を隠すなら森の中ってね。

ええまあ、コメントにある通り、グロ注意なんですよ、ええ。

「レーヴァテイン大丈夫？」

「?なにがー?」

やだ…純粹!可愛い!けどここでこの純真無垢は危険!

「えっと…少々バイオレンスな表現が含まれていてね…?」

「?ばいおれんす?アマ○ンズ?」

「大丈夫なことはわかった」

アマ○ンズ知ってるならいいわ。もう何も怖くない(気絶しかけ)
ストーリーは事故に遭って後遺症で感覚がおかしくなってしまう
たバイオリン演奏者の少年が「人魚姫」と出会う…という話。

わかる?初見でこのあらすじを見たのときの感覚。やらなきやよ
かった…(事後)

というか視聴者がドンドン減っていく。いいぞもつとやれ。この
先の世界は君達には辛かろう。

うお…これで4万人も減って5万人に…。今タイトル立ち上げた
ところだからまだ減りそう。良くて3万人。

そういえば、このゲームR-15だよ。グロいよ。アマ○ンズ大丈
夫人人ならだいじょーぶ! (意識朦朧)

『うわあ…景色がグロ肉に見えるってキツイですね』

ん?わたしにはきれいなけしきにみえるな!みえるな!な—
!(逃避)

「俺には普通にしか見えない…」「早速おりんが狂気に入り込んでい
る」「はて病室にしか見えませんが(白目)」

コメントも阿鼻叫喚。阿鼻叫喚って言葉よく使ってんなこいつ。
正しい世界が狂って見え、おぞましい怪物が美しく見える。

『これがさやかちゃんですか、デザインが秀逸ですねえ』

このゲームのメインヒロインであるさやかちゃんが登場した。

「ラスボスきたな…」「メインヒロインや!」「これが美少女に見える
なんて精神状態おかしいよ…」「おっそうだな(撲殺)」「冷凍弾を出せ
……」

コメ欄がカオスに。ちなみに冷凍弾云々はEDの1つなんDA☆
『……私も孤独な世界でただ一つ美しいものを見つけたなら、惚れま

すね』

「翼さんのことかな?」「翼さんに惚れてるのか」「翼さんに告白しろ」「翼さんとコラボ再開しろ」「翼さん最近忙しいらしいからな…」

コメ欄に翼さんが大量発生。ゲシュタルト崩壊しそう(小並感)

でも、実際こんなこと言ったら翼さんのことにしか思えないよね。散々今まで翼さん翼さん言ってたからね。しょうがないね。

『いやいやいや、私は確かに翼さんの事は好きですけどそういう感情ではありませんって!』

「嘘つけ、コラボの時ウキウキだったゾ」「のろけ配信のログもある」「翼さんのただのファン」「いいや!よく訓練されたファンだね!」

コメ欄がおりんを追い詰めていく。いいぞもつとやれ。そのままフィニッシュだ!

『それにこのゲームの時に話す話題じゃありませんよ!知ってるんですよ!ヒロイン死別か離別か心中しかルート無いって!』

「あつ(察し)」「おりん…お前消えるのか?」「おりんは翼さん置いて死にそう」「不穏な事いうのやめろや!おりんはマジで命張ってるんだから!」「正直すまんかった」

うつ…忘れてた…。このゲームやったの結構前だわ…。

それにしてもヒロイン死別、離別、心中かあ…。レーヴァテインがヒロインだったら…

…いや、考えない方がいっか。不穏不穏。よくないなあ…こういうのは…。

∠@風鳴翼【公式チャンネル】:おりんにとって私は遊びだったの!?!翼さん…それ公式アカウントですよ…(時すでに遅し)

というかなんでこのダンゴムシがワラワラいる石の下に来てるんですか…。

『いや、翼さんねえ…遊びじゃありませんけど。誤解を招く事はですな』

「ここに塔を建てよう」「やば…」「翼さーん!翼さーん!見えますかー!フラーツシュー!」「キテル…」

おまいら荒らすなあ！あーもうめちやくちやだよ…。

コメ欄は翼さんの登場により翼さん色に染められていく。でもこのゲームのコメとうまあいこと混ざり合ってよりカオスになってる。なんだこれ。

辿り着いたエンディングは共に雪の中で手を伸ばし事切れる「ガラスの幸福」エンド。

『めっちゃ美しい、しんどい……』

私もこのルートのエンディングは大好きだ。最後に見える愛が、とつても美しい。

「俺達もつばおりで妄想したらしんどくなった」「翼さんは意地でも守れ」「ライブの時に翼さんを守る為に飛び出したおりんの映像で100回泣いた」「親友の為に世界にその身を晒した女」「一生世界の宝物」「一生翼さんの友達でいろ」

コメ欄はあいかわらずつばおりに染まっている。いいぞもつとやれ（適当）

配信が終わり、私はPCの電源を落とす。

「大丈夫だった？レーヴァテイン」

私はレーヴァテインに聞いた。

「うん！大丈夫だよー」

「よかった」

そりやアマ○ンズ大丈夫なら大丈夫だろうけど。でもほら、心配になるじゃん？

それにしても…あのエンドは良かったなあ…。

もし私が死ぬなら、ああやって死ねるかな？

日焼け

うっ…既に意識が…！

「いやあー面目ありませんねー！詩織さん！織田さん！」

「いいって事です、これも仕事ですからね」

「……………」カタカタ

「詩織さん、変わりましたね。織田さんは…頑張ってください！」

「まあ、変わらざるをえませんでしたから。織田さんは…無理しないで大丈夫ですよ」

「あっありがとうございます…！」カタカタ

現在二課から立花さんに私と加賀美さんが同伴して学校に向かっている。

うん、慣れてないね、この組み合わせ。そんなわけで緊張フルスロットル！マツハア！な状態です。気絶しないだけマシ。

この行為の目的は立花さんの護衛である。

「とりあえず今朝説明された通り、今立花さんの中の GANG ニールは不安定です。ですから安定させる方法を確立するまでは戦闘は禁物、もし戦いに巻き込まれそうなら私と織田さんが、翼さん達の到着まで時間を稼ぎます」

「……………」

「いつも立花さんは頑張っています、だから時には休んでいいのです。私が立花さんを信じる様に、立花さんも私を信じてください」

「……………」

「わっ、私も出来るだけ頑張ります！で、出来るだけ…」カタカタ

「うん！織田さんもよろしくお願いします！」

ポジティブシンキングって大事だよ。立花さん見てるとそんなことを思う。

うんいやポジティブシンキング自体はできるんだよ？でも反射的に緊張はするし気絶はする。最近落ちやすくなった気がするな…うん、気のせいだよ。ポジティブシンキング。

「よう、案外元気そうじゃねえか」

「いやあくご心配おかけしまして」

「ああ、安心したぞ立花。だが油断は禁物だ、しばらくは様子見、戦うのは私達に任せろ」

「……わかりました！」

クリスさんと翼さんも立花さんに言い聞かせるように接している。やっぱりああいう性格だと好かれる？というか他人の自分に対する評価が分からんから解らん（わからん）

さて、ここからなんだよ私がキツイのは。こつからなんだよ！

『大丈夫だよ志乃ちゃん！』

なんか行けそうな気がする（一転攻勢）

「…あれ、もしかして…」

「加賀美詩織さんだ……あと織田さん」

「復学したんだ……あと織田さん」

教室に入ると加賀美さん共々私も注目される。やっぱり無理（掌神砂嵐）。

百歩譲って付随品扱いはええわ。むしろ見ないでください、お願いします（切実）

「…話しかけても大丈夫なのかな？」

「ちよつと怖いよねえ」

「そんな事言っちゃダメだよ、私達の為に戦ってくれてるんだから」

「いやいや加賀美さん自体じゃなくて後ろの政府とか……」

「その前に加賀美さんめっちゃ勉強してるんですけど……話しかけたら迷惑じゃない？」

「織田さんは？いつも通り震えてるけど」

「あの子は接すると気絶するからダメでしょ」

「そっか」

そっかじゃないよ。そうだけどさあ。

なんで加賀美さんそんな落ち着いて勉強できんの？おりんがクソザコメンタルって言ってたやつは私の目の前で切腹してください。生まれたての小鹿みたいになってる私の前で。

頼むから早く授業始まってください…。この緊張感は宿題忘れて

授業迎えるよりもキツイ。

「あのっ！加賀美さん！」

と思つてたら加賀美さんに話しかける人が。

ちよつと待つてそれは強すぎる。決意キメすぎて勇氣100倍ア
○パ○マ○になつてない？

「なんでしよう？」

加賀美さんは優しく返す。見てないけど多分笑顔だと思ふ。

私は今微動だにしてないです。いや震えてるからしてます。今加賀美さんの方向いたら恥ずかしくて倒れそう（比喩なし）

「この間のライブの時は助けてくださつてありがとうございます！ノイズが現れた時はもうダメだつて……」

「私は私に出来る事を、すべき事を、やりたい事をやっただけです。お気になさらず」

「それでも、ありがとうございます！」

「……感謝は受け取つておきますよう」

自分に向けられてる訳じゃないけど、当事者としてこういう感謝をわざわざ伝えてくれるのは、嬉しいよね。私に向けられたら沸騰します。

と思つてたら足音が近づいてくる。なんで？

「織田さん！」

「ひ。や。」

え。っ。こんな展開私が復帰したときなかった。なんで？まさか決意キメちゃつた？

「言うの遅れちゃつたんですけど、織田さんもありがとうございます！」

「マ。っ、あ。っ、え、えっ、いっいえ」

「あ。だ、大丈夫ですか？か、顔もめっちゃ赤いですけど」

「ハッ、ハッ、ハッ、あつああ、だ、大丈夫です！ごめんなさい！」

2. 3. 5. 7. 11. 13. 17. 19. 23. 29. 31.

37:ダメだ落ち着かない無理無理ダメだつて無理無理無理無理無理無理!!私そんなの慣れてない!!こんなあれだよ聞いてないよ!!

かっかか顔が赤いつてあゝっつゝ!?!耳発火してない!?!大丈夫コレ!?

あーもうキツイ。意識がキツイ。落ちそう落ちそう。視界ボヤけてきた。

『志乃ちゃん落ち着いて!深呼吸深呼吸!』

そっそそそうだ。ハー…ハー…

よし、落ち着いた。体の震えが尋常じゃないし体めっちゃ火照って暑いけど落ち着いたもんは落ち着いた。

「あのー!」

私の個人的な騒動が落ち着いてきたと思つてたら2人目が加賀美さんに話しかけていた。もう私には来ないでね。

「なんでしよう」

「おりんさんのファンです!サインください!」

クラスメイトの1人が加賀美さんにサインペンも色紙を差し出した。

よし!いいぞお!頼んだぞおりん!私主観客観どちらをとつてもヤバイ状態だからお願いし——ん?

「ええと、なんて書けばいいんでしょう。サインなんて初めて書きますよ」

「ホントですか!?!じゃあ私が世界で初めておりんさんのサインを得たファンになるんですか!」

んゝんゝ!?!あゝあゝあゝあゝあゝ!!!羨ましい羨ましい羨ましい!!!私だつてサイン欲しい!欲しい!なんやかんやで関わりは多いけどクソザコ陰キヤのアガリ症が「サイン欲しいってねだれる訳ないダルオ!?!(キレ気味)」

「じゃあ『ファーストダンゴムシさんへ、おりんより』をお願いします!」

「ええ……」

あ、リスナーの呼び名やっぱりダンゴムシなんだね。何気に確認したことなかったからなんか安心した……。

…DA違う!何気にそれも重要だけどそうじゃない!

いいなあ、いいなあ！私もサイン欲しい！欲しい欲しい欲しい！！

『志乃ちゃん落ち着いて！ステイステイ！』

はあああああつ…はあああああつ…。ううううん落ち着くよお…？落ち着きますう…。

「ありがとうございます！一生宝物にします！お歌も！お仕事も！配信も頑張ってください！応援してます！」

「え…ああ、ありがとうございます」

困惑してるのすこ。やっぱりおりんはクソザコじゃないと！…これはクソザコなのか？

こちらそこ、私とおりんどっちがクソザコなのかとかそういう判断いらないのです。ベクトルが違うんだよベクトルが！

「すみませーん！この教室に加賀美さんが居ると聞きました！」

「おりんさん！サインください！」

「あー本当におりんさんだ！」

上級生まで来たんだが！あーもう滅茶苦茶だよ。

泣いた。これは泣いた。というか泣いてる。今うつ伏せてるけど音なく静かに泣いてます。情けない…！己のあがり症をここまで呪ったことは……あつた。気絶したときとか気絶したときとか。

まあ、おりんのリスナーがいつぱいいるということは、ちよつと嬉しい。

「あ、あのですね！もうすぐ授業なので続きは昼休みに来てください、ここで待ってますので…。」

あ逃げた。

「あ〜！生よわよわおりんです！」

「生よわよわって何ですか！私はずよつよですよ！」

「本当におりんだあー！！」

わかりみが深い。私もおりんのよわよわを生で見るときは感動したなあ（しみじみ）。…こいつは一体なんなんだ。現在進行形でうつ伏せて静かに涙を流してるこいつは。

「あくダメですよ！おりんさんは日陰の住人ですから囲っちゃダメで

すってー!」「いやいやおりんさんは私達の日陰、こうしておりんさんの側で安らぐのはオツケーだつて言つてましたでしょう!」「おりんさんの生歌ききたーい!」「わかるー!」

おつ待てい。流石にこれはリスナーが多過ぎるんとちゃう?

…萌え声生主だよな? 基本的に考えたら男受け中心な筈なんだけどなあ…。なんで高校生、女子という狭き門の中これだけの人数がいるのか…不思議ですなあ。

『…冷静だけど涙は止まらないね…』

ウンソウダネ。…レーヴアティンは痛いところを突くなあ! 可愛い。

「いやーおりんさんって凄いですよね、私達とそんなに変わらないのに!」「あのトークスキル! 歌うま! しかも戦える!」

机にうつ伏せたままチラツと様子を伺う。

…凄く人が集まつてる。あの中心にいたら気絶すると思う。…うっ、想像しただけで目がぼやけてきた…視力には自信あるんだけどな…。

トークスキルと歌うまは羨ましい。…歌羨ましかったからここに入ったんだけどね。何よりあんな大勢の前でキョドらずに喋れるのが羨ましい。楽しそう。…なんで緊張すると気絶するんだろう?

(涙)

「あのですねえ! 私を褒めても萌え声しかでませんよホラ!」

「かわいい!」「アニメ声やってみて〜」

陽キャ強し。おりんが全く抗えない! おりんが大勢に勝てるわけないだろ!

「ていうか、加賀美さん肌つやすご!!」「マジで!? ていうか触っていいですか!?!」「ホントだ! 何つかつたらこんなにつやつやになるの!?!」

加賀美さん、こつちを見ないで下さい。確かに私は唯一の理解者(?) であるのでしょう。しかし賢明な者ならわかるだろう。その行為は共倒れの前兆であると。

「織田さん!」

「ふ、ふえひいつ!?!」

やった…やってしまった…人に囲まれる中気絶してしまった…。
その光景は側から見たらクトウルフ的儀式。よくないなあ…こうい
うのは…。

そんなこんなで目を覚ましたら保健室。教室に戻ったらクラスメ
イトに心配されるものあまり追い詰めないように変に気を使われ
て傷ついた後の放課後。

「はあ、お好み焼きですか？」

「そうなんだ、皆で食べに行く事になって。詩織さんと織田さんもど
うです？」

「私、死ぬほど猫舌なんですよね…。」

「わっ私ははあっはあ…。」

「ふらわーのお好み焼きは少しぐらい冷めてもおいしいよ！」

「そうですね、たまには付き合って行くのもいいでしょう…。」

「じゃあ私も頑張りまう…。」

「織田さん、無理しないで下さいね」

「はひっ」

立花さんが友達にお好み焼きを食べに誘われたらしいので私と加
賀美さんも護衛の為にいくことになりました。

正直辛い。人見知りだよ？どうしてこうなるかなあ？…う、うん、
頑張るしかないね。

…お好み焼きかあ…。お母さん、ちよくちよく作ってくれたけど美
味しかったなあ。

◆？

はあ：結構食べた…。というよりなんか熱かったんだけどいつもより熱く感じなかった…。

食べ物基本的にあつたかいものもいいよね。そうめんとか冷やし中華とか、そういうのは嫌いじゃないんだけど暑くてもあつたかい食べ物食べたい。飲み物は別。

というか滅茶苦茶絡まれた。出先で気絶するかと思った…。：二課と学校も出先だけどそうじゃない。完全に未知のエリアではないかん。引かれる。

加賀美さんが結構熱そうなお好み焼き食べた瞬間口からなんかだばあつてしたのはびっくりした。びっくりしすぎて私も口からお茶だばあつてするかと思いました。

「私、お好み焼きが大好きなんですよ」

ああ：そうか…。そうなのか？なんか涎つぽくなかったような？

いや、涎か…？

とりあえずかなり疲れた。お家帰りしたい：今日配信あるかなあ？あつたら嬉しい。

「加賀美さんの隠された一面が沢山みれて良かったです」

「そうだね、それにビツキーも元気でしたし」

「誰かさんが滅茶苦茶心配してたもんね」

「えっ……」

「鈍感だなくビツキーは」

「もちろんヒナだよ」

「未来が？」

いいなあ、この会話。花の女子高生って感じがする。

『志乃ちゃんも女子高生だよ？』

違う違う、そうじゃ、そうじゃない。私は普通の高校生生活よりもかけ離れてるんだよお…。普通の高校生は緊張で気絶とかしない（確

信)

：はあ、こんな光景も、私が、私達が守っていくとなると、荷が重くて目が霞みそう。

すると、三台の車が凄い勢いで走り去っていき、その先で爆発音が鳴り、私達のところまで響渡る。

「ッー」

「あつまっ…ああっ!!」

立花さんが走り始め、それを追いかけるように加賀美さんが動き出し、それに感化されて私もヤケクソ気味に走り始める。

辺りに散る炎、炭が山を為し、風に乗って散る。そしてそこには、ノイズを呼び出すソロモンの杖を持った、白衣の男が立っていた。

「ドクター…：ウエル…：!!」

「ああ、あの裏切り者ですか…：!」

立花さんと加賀美さんが、白衣の男に対して敵意を向ける。

その男はお世辞にも体を動かすことが得意、とは言えぬ出で立ち。白い髪と怪しくレンズが光る眼鏡が、妙な嫌悪感を抱かせる。

そっか…：あの人がドクターウエル。ソロモンの杖を持ち出した裏切り者…。

「私に任せ」

「ひい！なんでお前がここに居るウ!?ウ…：ウワーツ!!」

加賀見さんが何かを言おうとしたが、加賀美さんを見たドクターウエルは、明らかに狼狽出した。

ソロモンの杖を振る。光と共にノイズが多数出現し、こちらに感情のわからぬ目線を向けてくる。

非戦闘員が数名。その中に立花さんも含んでいる。故に守らなきやいけない。

ノイズは動き出す。守る為には、聖詠を詠う時間は足りない。ならば、今まで詠ってきた分でギアを纏えばいい。

「レーヴァテインッ!!」

一言。その中に想いを込める。

私はレーヴァテイン。レーヴァテインは私。

胸に揺れるペンダントが煌めき、私の体を包み込む。

レーヴァテインとの一体感を感じ、その体の動きは跳く動く。

「え、あつ!!」

いつの間にか在る右腕の噴射口から出る蒸気が動きを加速させ、目の前のノイズを屠る。

右腕を中心に、ギアが纏われていく。チラと周りを見る。するとどうやら、加賀美さんも原理はわからないが、同じように早くギアを纏ったようだった。

「人の身でえ……ノイズに触れたアツ!?!」

目の前のドクターウエルが驚く。そりやそうだ、私だってビビってる。

「どうやった?そんなこと考えてなかった。出来る。そう思ったからやった。私はレーヴァテインだ。ならばノイズを屠ることは容易なんだ。」

「私の身も、私の心もシンフォギアです(レーヴァテインだ)!!」

脊髄反射は過去の反芻

「——っしやあッ!!」

声を出す。そうして覚悟を心の奥底から捻り出す。こうでもしないと、私はこの炭の粉が舞う戦場で、まともにはいられないから。

「ドクターウエル、ソロモンの杖を捨てて投降してください。さもなくば命の保証はしません」

加賀美さんがドクターウエルに降伏を勧める。従わないなら殺す、そんな脅しを付録にして。

「だあれが！するものか！僕はこの力で英雄になる！」

「英雄になる？バカですね。英雄は結果です、目的としてる様な奴にはなれません」

「こ、こんな言葉を聞いたことはありませんか？『英雄ってのはさ、英雄になろうとした瞬間なのよ』…って」

「ッ…うるさああい!!」

ソロモンの杖をドクターウエルが振ると、大量のノイズがまるでなぐ壁のようにドクターウエルの前に現れる。

交渉はほぼ必然的な失敗。だから…

「死んでも、知りませんから」

加賀美さんの言葉と放たれたホーミングミサイルは、ありふれた街で起こる戦いの火種となった。

「道イ…開けるオオオオオオオオオオ!!」

咆哮。私は自分を鼓舞しながら突撃する。ドクターウエルへの道をノイズ達が塞ぐ。

(いくよレーヴァテインッ!!)

『いいよッ！志乃ちゃん！』

「らッアッ!!」

ドゴオンッ！という音に大剣が振り下ろされる。

斬るということを諦めたかのような大質量の攻撃で、ノイズ達は吹っ飛んでいく。

次々とノイズが出てくる。これじゃ、届かない。

(フルで回すよ！)

『うん！』

レーヴァテインと息を合わせる。腕と足のギアが変形し、蒸気を吹き出し始める。

「あゝッアアアアッ!!」

突撃すると同時に、動きを加速させるように蒸気が勢いよく吹き出す。蒸気によって数体のノイズが吹き飛ぶ。

「しゝやあゝッッ!!」

勢いと共に大剣をなぎ払う。多くのノイズが吹き飛ぶが、目的であるドクターウエルまでは届かなかった。

加賀美さんも機関銃直接狙いますが、ノイズが壁となった。

「お前達も僕の邪魔をするのかあ！加賀美詩織イ！織田志乃オ！

「ええ、しますね。あなたは人を殺した、その罪は償わせます」

「人の命に、しもHもないんです」

そう、お母さんの命だつて、軽いもんじゃなかった。

「僕を殺せば人殺しになるぞお！」

「咎は受けますよ、あなたを始末した後ですがね！」

え？殺すの？極限まで力振り絞つて大剣の腹で殴るつもりだったんだけど。

(それって同じじゃない?)

本当に死ぬのは苦しくないでNG。

「月の落下を！防げるのは僕達だけだぞオ!!世界を滅ぼすつもりかあ!!」

「じゃああなたを始末した後 ゆっくり考えますよ！」

なんかチャージしてロックオンをドクターウエルにキメてるんだが？

ちよつちよちよちよちよちよ!!おりん何をしている!!いやその人から聞くこととかあるんじゃないの!?

「殺しちゃダメです！詩織さん！」

そうだよ！（便乗）おりんといえど覚悟のキメすぎは困りますおり

んアーツ!!

「うわ……ウワアアア!!」

……ぐっ、こうなったらギリ私が防――

「間一髪……デース！」

「た盾え!？」

「なんと、丸鋸……」

加賀美さんの攻撃は、盾……ではなく丸鋸で塞がれたしまった。多分鋸を最初に作り出した人は泣いていい。

といつてもここで2人もの装者が途中で参戦……数的には不利……か？

『どうする? 私も出る?』

(ううん、今はこれがいい)

今下手に数を増やしてもダメだ。そもそも相手は自由にノイズという味方を増やせる。ここで戦力を複数に分断するのは悪手、各個撃破されるだ。

「待ってください! 詩織さん! ダメです!」

へ?

ってうおいつ! その覚悟のキメ方は確かに戦場において大事かもしれないけどリスナー的にはアウトですツ!

……チツ、嬉しいのか悲しいのか。人を殺すのはダメだがせめて少しぐらい手負いにはなつて欲しかった。

「容赦ない……ツ!」

「血も涙もない冷血女デース! 世間様にあれだけアピールしても! 所詮は偽善者だったんデスね!」

あ? おりんの何を知ってるんだ君達が?

(志乃ちゃん?)

「しゃゝ おらいゝ ツ!!!」

「うわあ!?! 危ないデス!」

「危機一髪……！」

全力で蒸気を吹かせて接近し、大剣を叩きつける。が、避けられなかった。

だから……

「んゝんツ!!」

「ツ!!」

ギアに繋がれているコードを一本、大剣に繋いで思いっきり振り回した。

甲高い金属音と共に防がれたけど、ノックバックである程度の距離を取ることに成功した。

「ヒイイッー！」

ドクターウエルが怯えている。それはどうでもいい。中途半端な知識でおりんを語っていた奴らに痛い目見せられただけで満足。

「ま、まるでバーサーカーデス……」

「脳筋……」

脳筋万歳。バカつていつてもいいけど、筋肉をつけてね。

嗚呼、スツキリした。……ああ、ダメだダメダメ。テンションがおかしい。これじゃあ私じゃない。正気を保つんだ。

『……大丈夫？志乃ちゃん』

(……大丈夫)

I a m L E A V A T E I N, L E A V A T E I N i s m e .

ふう〜……リラックス、リラックス。……おえ、よくわからん緊張でクラクラしてきた。

「……私は善人でもなんでもありませんよ、ただ平和が欲しいだけ、それだけ」

そうやって加賀美さんは3人をロックオンし――

「立花さん、邪魔です」

立ちほだかったのは、敵ではなく護衛対象の、立花さんだった。

「ダメです……ダメですよ！詩織さん！それに志乃さんも！どうしてしまったんですか!!」

「別に、私は、き、気に食わなかっただけです…」

「それ以外は平和の敵です、さつきと始末してしまえば、立花さん達が戦わなくて済みます」

「それでも！」

…ツスー…ツフー…

『……志乃ちゃん?』

(ああいや、大丈夫。ちょっと頭が熱にやられてただけだよ)

体はあつたかいけど、心は冷静なんだよ。アガリ症だけど。

そうだよ、何も殺すことはない。同じ立場にある人間として、そしておりんのリスナーとして、おりんには人殺しにはなって欲しくはない。ある意味それを防ぐ為に、私はいるのかもしれないから。

「わかりました、殺しはしません…でもですね捕まえる必要は…」

加賀美さんは立花さんを説得する。

……ん?あの装者の2人、何をして…?

「もう一度警告します、武器を捨て投降してください——」

穏便に済ませようと、加賀美さんが交渉を持ちかける。が——

「G a t r a n d i s b a b e l——」

(志野ちゃん!!)

「あゝあゝッ!?!」

この2人の装者が口にする歌は、間違いなく絶唱のそれ。己の身を滅ぼす程の高出力を叩き出す諸刃の切り札。

「調ちゃん!?切歌ちゃん!?どうして!!」

「立花さん、どいてください」

加賀美さんはそう言うと、立花さんを後ろに大きく投げ飛ばした。少々雑なやり方だけどうしようがない!

「G a t r a n d i s b a b e l——」

絶唱といつても、単純な高火力ではない。聖遺物毎にも元の神話に基づいた固有の特性がある。

レーヴァテイン。かつて巨人スルトが振るった世界を焼きつくす炎の剣。それに基づく属性は一切合切を焼き尽くす「炎」。

脂汗が滲み出る。「歌」を火種とし、フォニックゲインを薪としてく

べる。そして燃えるのに酸素が必要なように、私の体力が奪い取られていく。

『(……………あれ?)』

フオニックゲインの高まりをあまり感じられない。体力の消耗が
少ない。

「出力が上がらない!？」

「減圧!？」

「立花さん、何をしているんですか」

私は咄嗟に立花さんの方を向く。それは、歌。歌によって、絶唱が束ねられ、小さくなっていく。

「立花さん、そんな事をしなくても二人始末するぐらい……………」

「これぐらい、大丈夫、ですッ」

「ダメ……………ですよ!詩織さん!……………いつもの優しい2人に戻ってくださいッ!」

…あつ。忘れてた。マズい、本来の目的は立花さんがギアを使わな
いようにする為の護衛なのに、私達のせいで意味がなくなってる。こ
れじゃ本末転倒だよ!!

「私は……………違う!ダメです!立花さん!!」

「止まってください!!」

「セツト!ハーモニクス!!!」

おわっ!?!物凄いあつたかい!?

あ、あ、ッ!?!加賀美さんが溶けてるうーッ!?

「二人にも……………詩織さんと織田さんにも絶唱は使わせないッ!!」
「ッ!!」

大剣を咄嗟に深く刺し、柄を力一杯握りしめる。一瞬遅れて、とて
つもない衝撃が、大剣越しに伝わって、吹き飛ばされそうになる。

「……………ッ!!」

なん、とか、踏ん張った!!ってアーツ加賀美さん吹き飛ばされてる
!?

…あ、大丈夫らしい。安心。

DA違う!!立花さんが間違はなく大丈夫じゃない!!オオーツ!?!倒

れるウーッ!?

「おおウッ!!あつゝっ!?!」

「立花さん!立花さーッ!!」

加賀美さんも駆けつけたけど、熱すぎて手を出せない。

ある程度熱に耐性あるのに火傷しそうなぐらい熱いッ!!水道の温度を最大まで捻った熱湯ぐらい熱い!!

蒸気!!蒸気である程度緩和!!けどこれじゃ解決にはなんない!!

「今なら……やれるデスよ……!」

「なのに戻らなきゃいけないの?」

ああクソッ!!逃げられる!!でも立花さんをなんともしないわけには……

『志乃ちゃん、私行こうか!?!』

!!そうだ、レーヴァテインに向こうはなんとか……

(…ダメだ!)

加賀美さんの一緒に戦って引き分けの状態だったのに、レーヴァテイン単騎で、無事なわけがない!!

それはダメだ!!何よりダメだ!!でも……!!

「加賀見さん!立花さんお願いします!」

「…はい、わかりました」

私は立花さんを加賀美さんに任せ、追いかけていく。

「クソッ!!こういうときに悪知恵働かせてッ!!」

道を阻むようにいる大量のノイズ。その全部が、私の方を向いている。

「…レーヴァテイン…」

『…うん』

私から生まれた陽炎が形を取り、私と同じギアを纏い、似た姿をした少女、レーヴァテインが現れる。

「行くよッレーヴァテイイイイイイインッ!!」

「ツ!!…ああ」

意識が戻ると、そこはメデイカルルーム。ここに運ばれたのは数える程だが、よくわからない安心感がある。

「志乃ちゃん」

「…レーヴァテイン」

何故なら、毎回こうやってレーヴァテインが、ちゃんというから。

「ねえ、志乃ちゃん」

「なあに?レーヴァテii」

「レーヴァテインって呼び辛い?」

「……………」

……………確かに。人の名前、というよりは物の名前、という感じがする。愛称ぐらいあってもいいよね?

「ん〜…といつてもなあ〜…」

「あ!じゃあレーちゃんがいい!レーちゃん!」

「ええ…? (困惑) 安直すぎない?」

「これでいいんだよこれで!」

大分染まってる気がする。私に。姿が写身なせいでほぼ私では?

「じゃあ、レー…ちゃん?」

「うん!志乃ちゃん!」

私とレーヴァテii:レーちゃんは、顔を見合わせて笑い合う。お母さんが亡くなつて、こんな他愛のないことで笑うというのは、久しぶりかもしれない。

「…………加賀美さん、大丈夫かな?」

「うん、大丈夫だったよ」

「よかった。日課の配信がないと心折れる」

「いつ配信に駆り出されるかビクビクしてるけどね」

「まあね」

多分呼び出されたら待機中に気絶する自信がある。というかする。あのときは私も覚悟をガンギマリさせてたけど今は無理です。

「…志乃ちゃんも、無理をしないでね」

レーちゃんが私の頭を撫でる。それは、私がお母さんを撫でるとき
の撫で方だった。

「うん」

(頑張るよ、お母さん)

チカラと器

私は自分勝手だ。そう痛烈に感じた。

立花さんを戦わせてはいけない。その思考は確かに私のものだ。けど、その為にレーちゃんにリスクを負わせることに、酷く恐怖した。だから、加賀美さんに任せた。

けど、そのせいで立花さんだけでなく、加賀美さんまでメデイカルルームで横になっている。

結局、そうまでして追いかけたドクターウエルには、ノイズを当たり囿にされて逃げられてしまった。私も全部のノイズを倒し切った頃には体力が底を尽きて、倒れてしまった。

余談だが私を運んでくれたのはレーちゃんらしい。…あれ？私の意識なくても動けるんだ？

それはさておき。

メデイカルルームには病院のようにカーテンの仕切りがある。そして、その向こうには加賀美さん、更に向こうには立花さんが眠っている筈だ。

…加賀美さんと立花さんの会話が聞こえる。けど、私はそれを聞くとはしない。

「志乃ちゃん」

レーちゃんも頑張ってくれているのに、私は何もできない。長所はこの声ぐらい。心も体も弱いままだ。

力が、力が欲しい。私とレーちゃんだけじゃない。お母さんみたいな犠牲者が出ないように、もっと皆を守る力が――

「志乃ちゃん」

「わぷっ」

突然、レーちゃんが抱きしめてきてくれた。

嬉しいけど大丈夫かなこれ？点滴とか圧迫されてる感覚するんすけど…。あ、大丈夫だった。

「顔、怖いよ？」

「…ごめん、ありがとうね」

直ぐに謝る癖が出てしまったけど、直ぐに感謝の言葉を伝える。

小さい頃、緊張でうまく喋れないし、すぐに失神していて、一時期登校拒否していた私を、お母さんもこうやって抱きしめてくれた。

他人の体温は、落ち着く。誰のでもいい。イキモノの体温っていうのは、とても暖かくて、落ち着く。

「…大丈夫？」

「…うん、大丈夫、な、筈」

確信が、持てない。私は普段とは違うベクトルで、メンタルがボロボロなのかもしれない。

皆に、レーちゃんにも、加賀美さんにも、立花さんにも、司令や二課の皆に迷惑を掛けながら戦ってる。

「ねえ、レーちゃん」

「んー？どうしたの？」

「…強くなるには、どうしたらいいのかな？」

すると、少しレーちゃんの顔が険しくなってしまった。私のことをジツと見つめてる。

初めて見る顔かもしれない。わ、私なんか地雷踏んじやいましたかね…？（震）

「志乃ちゃん」

「…うん」

「強さを手に入れる為に手を伸ばしちゃだめだよ。それが真の意味で手に入るときっていうのは、きつとセカイが必要だと思ったときなんだよ」

「…もし、自分から手を伸ばしたら？」

「どうにも、こうにも、どうにもならない。そんなときに、偶々、力を手に入れる為じゃなくて、生きる為、誰かの為に咄嗟に手を伸ばす。それならいいんだよ。」

でも、そうじゃなくて、力を求めて手を伸ばす。そうして手に入れたものが導いてくれるのは、破滅だよ」

そう語ったときのレーちゃんは、私じゃなくてきつと別の何かを見ていた。

まだこのレーヴァティンというギアを手に入れたばかりの頃、レーヴァティン周りの神話について調べたことがある。

レーヴァティン、という聖遺物は、北欧神話において世界を丸ごと焼き尽くす究極の武器として、スルトが振るった。

スルトはそれを己の欲がままに振るった。とどのつまり、悪事の為に使われたのだ。結果、スルトは大爆発。世界は焼き尽くされ、ラグナロクは終焉した。

なるほど。大きな力は災いを呼ぶ。それを振るう為には、それに見合う力量。そしてセカイがそれに振るうに値すると認められなければならぬ。

「……じゃあ、私、もっと努力しなきゃかな？」

「頑張るのはいいけど、最近頑張りすぎだよ？ちゃんと休んで！」

レーちゃんがニコツと笑う。その笑みは今まで何度も見て、心の支えの支柱を担っていた。

けど、今は少し違うように見える。

レーちゃんも、頑張っているんだ。自分が世界を一度滅ささことできるほどの潜在能力があるから。

私はレーヴァティン、レーヴァティンは私。そう言い続けたからには、私もレーちゃんと一緒に頑張らなきゃ。いや、頑張りたい。



詩が、聞こえる。何度も聞いた、加賀美さんの、おりんの歌声。

感情が、伝わる。希望、願望、そして覚悟。

覚悟を決める為に謳う。その発想に、私も倣いたい。

「…手を握ってくれる？」

「うん」

レーちゃんの手をゆっくり、ギュツと握ると、優しく握り返してくれた。

—— 吾は世界を滅ぼす紅き炎 紅き炎は型取り、吾の姿を取る

—— 吾その身にチカラを宿し、チカラは器に納められん

—— 吾その力を振るわん 願望は己の救済、されど欲深く更に多くを願う

——その願いこそは世界の救済 願いを承り、世界を滅ぼすチカラは世界を救うチカラに成らんと願う

——チカラと器 器はチカラを想い、人の身を捨てん

——人の身はチカラと成る 同じくして、チカラは人の身と成る

——交わり、溶け、混ざり合う やがて分かつは2つの身

——其は2つの器に納められた2つのチカラ 2つは高め合い、やがて願いを叶えんと手を取る

——汝らの名はレーヴァテイン かつて世界を滅ぼし、やがて世界を救わん

それは詩。しかし詩というには感情はなかった。例えるならばそれは呪文。しかし呪いは授けず、祝福を、授けてくれた。

「……詩乃^{レー}ちゃん^{ちゃん}」

「……志乃^{レー}ちゃん^{ちゃん}」

レーちゃんの姿が、変わっていた。

いつの間にかギアを纏い、そして、完全に体が私と同じになっていた。

体が熱い。けど不快感は一切感じない。まるでそうであったかのように感じる。

「……………」

目を、ジツと合わせる。そして、ギアを解く。レーちゃんの目は紅かったのに、私と同じように、黒くなっている。

思い出したかのように、周りの声が聞こえてくる。

どうやら、加賀美さんにも何かあつたらしい。

「…加賀美さん」

「織田さん」

加賀美さんの姿は、変わっていないなかった。しかし、絶対に変わっていた。

ギアを纏っていて、周りが蠟塗れになっている。処理が大変そう

(小並)

それは確かにおりんだ、けどおりんじやない。不思議な感覚がす

る。

「…どうしたんですか、それ」

「——捨てました。今の私にとっては、要らなかつたので」

捨てた。恐らくそれは、体を全部聖遺物に変えた、というだと思う。文句の一つでもいいものだけど、私も人のことを言えない。

「…多分、そっちが織田さん…ですよね？」

「そうですよ」

私の方を見てそう言う。多分、そういうことなんだろう。

私とレーちゃんが同じ姿になっている。外だけじゃなくて、中も。

「髪伸びました？」

「え、伸びてます？」

「ええ、多少」

髪の毛を弄る。…本当だ。肩甲骨辺りまで伸びてる。

「加賀美くん！織田くん！」

「ヒイツ!？」

突然メデイカルルームに司令が入ってきた。未だにこの人になれねえ…。なんとかしなくちゃ…。(震)

「織田くん…どっちが織田くんだ？」

「た、多分私の方です…よね？」カタカタ

震えが止まんねえ。あーやばい、緊張が止まんない。

「織田くん、君は——」

「私はレーヴァテイン、レーヴァテインは私。そこに変わりはありません」

レーちゃんと手を繋いで、司令にそう言った。ほんの少しだけだが、緊張が和らいだ…。

「…ツわかった。だが、これからは一言必ず言ってくれ」

「わかりました」

司令は、諦めたようにそう言って。加賀美さんの方を向いた。

「織田さん…」

立花さんが、私の方を心配そうな目で見ている。

「大丈夫ですよ、立花さん」

そう、確信を持って言った。

融解、結合

「—————♪」

自室でレーちゃんも2人、歌を歌う。私達の喉からは全く同じ声が
発せられ、重なり、部屋の中に響く。

全く同じ声。だけど、私には違いがわかる。ほんの僅かな差だけ
ど、確かに違いはある。

あの後、めちやくちや検査された。体の隅々まで。いやあ恥ずかし
かった。ああいうしつかりしたところでやる検査って緊張して気を
失いそうになる…。

まあこのうら若き2人の乙女の検査をしてもらった。

結果、やつぱり私とレーちゃんは、全く同じ存在になっていた。D
NAからアウフヴァアツヘン波まで、全く一緒。最早適合率なんても
じやない。

人でもあり、聖遺物でもある。それが今の私達。レーちゃんは人
なつて、私は聖遺物になった。

…ぶつちやけ、自覚は殆どない。

こうなる前から私達は同じ存在だと思って接し続けてきた。だか
ら、これを機に何かが変わるといふこともなかった。

けど身体の方は違う。確かに変化はあった。レーちゃんと私の見
た目が一緒になったり髪が伸びたり。…今更ながら、なんでおりん
と司令は私とレーちゃんを見分けれたんだろう？雰囲気が違うのか
な？

「—————♪」

こうして2人で歌っているのも、この変化が関係している。

ただ歌っているわけではない。私達はただ歌っているようにしか
思っていないけど。日課だし。

それはさてとき、歌っているのは、フォニックゲインを生み出して
いるから。こうしていないと、有り体に言えば体調が悪くなる。

メデイカルルームにいたら血圧が低下し始めたんだよね。めちやく
ちや焦って緊張で気絶しました。

直ぐにレーちゃんに叩き起こされて

「志乃ちゃん！歌うよ！」

と突然言われ歌うとあら不思議、機器は静まり体調は良くなりました。司令が駆けつけてきたときは怒られると思って気絶し掛けました。

「—————♪……………」

「ふう、楽しかった」

「次志乃ちゃんが男パートね！」

「はい」

また、レーちゃんと歌を歌い始める。

私達は謹慎を命じられた。謹慎なんて初めてされたせいでびっくりした。T〇Cの北〇も最初はびっくりしたのかな？そんなあ（…ω・…）ってなつてたし。

そういえば加賀美さんも謹慎だったっけかな。私はレーちゃんと一緒にいるけど、おりんはどうなんだろう？

「あ、志乃ちゃん。おりんが配信しているよ」

「えっマジ!?ゲリラとかsyれにならんでしょ…」

急いでパソコンの前に座る。そういえば椅子をもう一つ買ったよ。今まで私の膝の上に座らせてたけど出来なくなっちゃったから。……うう、膝の上が涼しい……。

『はい、ゲーム配信です。ゲリラです』

「告知しないなんて珍しい！」

「うわ！おりんだ！」

「しばらくぶりのおりんだ！」

「大丈夫？」

うわ、平日の昼間なのに結構ダンゴムシがワラワラと……。

確かに久しぶりの配信だ。配信ないからずっとアーカイブウロウロしてたから気づくのが遅れちゃった。

『今日はストライクファイターのネット対戦やります、パスはかけません、好きにどうぞ』

ストライクファイター…ストファイ、世界的に有名な格ゲーだね。

海外の大会もかなり盛り上がってるし。

「レーちゃんやる?」

「んー…後で入ろうかな」

『じゃあキャラはザンで行きます』

そう言つて部屋を作る。するとすぐに対戦相手が入ってきた。

『なんでの確にメタリに来るんですか!』

「イキりん失敗」

「おまたせ」

「いつもの」

「20年変わらぬ戦術」

「伝統芸能」

「ノルマ達成」

相手のキャラはガイ。簡単に言うとおりんのザンとの相性は剣と弓矢ぐらい悪い。

『ええい、やってやりますよ。今日の私は阿修羅すら凌駕しますから見ててくださいいよ!』

阿修羅とは仏教、インド神話に於ける戦闘神。一説では正義側でもあるらしいが一般的には悪者の認識らしい(雑学)

Ready Fight!の文字と共に対戦が開始される。

なんとしてでも近づいて押し切りたい盤面。近距離に持ち込まなければ話にはならないんだけど……?」

『なんでえ!今技出たじゃん!』

「判定負け」

「やっぱりな(レ)」

「キャラ相性の差は……」

「イキり失敗配信者」

「ク ソ ザ コ プ リ ン」

草。

「なんかいつもより遅いね」

「んー…そうかも。入力がなんか遅いかな?」

『飛び道具やめえや!起き上がりに重ねてくるな!』

「入力遅すぎイ！」

「あつ（察し）」

「そら（起き上がるのが遅いと）そうなるわ」

「ダメみたいですね」

入力遅くて狩られてる…アワレおりんは爆発四散！ラウンドを落とすとしたのだった…。

『ぐっ……ストライクファイターやめてドンパチやります』

「ええ…（困惑）」

「諦めが肝心」

「格闘で勝てないから射撃で勝とうとする女」

「CPUにしかマウントを取れない女」

そうだね、誰にでも向き不向きはあるもんね！

「…そう、向き不向きは誰にでも…」

「志乃ちゃーん。緊張に弱いのは仕方ないから戻ってきて〜」

『ドンパチ2周目指します』

「果たしてイキれるのかおりん」

「おりんの腕なら二周は出来るでしょう」

「ノーミスで一周はいくと見た」

ドンパチの2週目かあ…。「死ぬがよい。」されるのが目に見える見える…。

…危ないかな？あ、反応が良くなった。本気出したのかな？

『はい、一周目アイテム取得、1ミスでクリアです』

「イキりん」

「序盤の動きが悪かった様だが」

「慣れてなかったんでしよう」

さてここからが本番…。ドンパチの最新版ってノーミスクリアまだ出てないよね…司令ならクリアできる…？

『え、二周目こんなに弾幕濃いのか？』

「即堕ちイキり配信者」

「あつ（察し）」

「これは…ダメみたいですね」

『えっあっあっ……終わった……』

「クソザコナメクジ」

「やっぱりおりん」

「所詮はおりん」

「機械にもマウントを取られる女」

これはしょうがない……うん、しょうがない……。二周目出すのに苦労した記憶が……う……。

「志乃ちゃん、私もこれやりたい」

「はいはい、また貸してあげる」

……レーちゃん、天才肌だから簡単に二周目出せるんじゃない……むむむ……。

『じゃあ残った時間、空中散歩と行きましようか』

は？

「えっ」

「えっ」

「マ!？」

「うせやろ?」

「まさか!」

あー! 困りますおりん様こまりますあーっ!

……やったわ。おりん。謹慎中なのに簡単に空を飛んだ……。

普通の人間は空を食べますか? NO、飛べません。つまりはギアを使ってるわけで……。

「…同じ広告としてなんか言われたり…しないかなあ…」

ぽんぽんぺいん。

『そーらはきれいだなー皆さんもそう思いますよね』

「いかんいかん危ない危ない……」

「やばいて!」

「高所はやめてクレメンス…」

「志乃ちゃんって高所大丈夫?」

「あー…画面越しなら大丈夫だよ。まあ、有事の際は言ってもらえないけど」

…なんかフラグ建てた気がするけど、まあ、気にしない方がいいよね。

おりんは画面に向かってピースしたり指さししてりする。どうやってカメラ持ってんだろう？

…ああ、そういえば、おりんも全身聖遺物なんだっけ。イカロス：蠟でできた偽物の羽…か。じゃあ蠟で何かを作って持ってるのかな。

…おりん、後で始末書書かされたりするのかな…。

「おりん！スカイタワーから煙でてる！」

「マジだ！」

「出番出番！」

「仕事の時間だぞ！」

……え？マジ？

急いで窓を開けてスカイタワーを見る。昼間だから黒い煙がよく目立つ。一目で確認できた。

しかもあれは…ノイズ！

……どうする？行くか？行かないか？The answer is……

「行くよ！レーちゃん！」

「がってんてん！」

レーちゃんと手を繋ぎ、窓から外に飛び出す。そして……

「—————」

聖詠を詠う。2人のフォニックゲインが交わり、溶け、混ざり合う。姿が、重なり合う。

「…シッ！」

上手く着地した私達は、急いで駆け出した。

強襲

「……シッ！」

私の私服が分解され、代わりにギアを身に纏っていく。…いや、既に私はレーヴァテインな訳であるから、これは装着よりも変形に近い。

黒を省き、黄色が足されたインナー。蒸気噴射口が追加され、繋がるコードの数が多くなった機械部分のギア。

つまるところ、平成な変身から昭和的な変身になり、ガ○ア的なパワーアップをした。わかりやすい。

『志乃ちゃんどうする?』

頭の中にレーちゃんが語りかけてくる。ここは全く変わっていない。故に、非常に安心感を感じる。

「んく……あそうだ」

『どうしたの?』

「おりの配信のメモ読み上げて」

おりの視点からの情報が欲しい。今私の持つてる情報皆無に近いから。

『え、っ、今?どうやって?』

そう聞かれると思いましたが。ヘッヘッヘ、シンパイスルコトハナイ。

私はちやつかり持ち出した自分のスマホを、ギアのヘッドフォン部分を変形させたところにガツシヤットオウ!

これでよし。

「あい、任せた」

『えく…危なくなったら止めるからね?』

「ありがとう、レーちゃん」

そういうと読み上げを開始するレーちゃん。後でジュースを奢ってやろう。

『9本でいいよ』

流石レーちゃん。謙虚だなー憧れちゃうなー。

御託はここまで、ここからは真剣に気合を入れていこう。
現在絶賛全力ダッシュ中。さて、どうするか…。

スカイタワーの煙が出ているところはかなり高めの場所。けど、このギアに飛ぶ方法は…

……あつた。

「そうと決まればツ!!」

両腕両脚のギアをそれぞれ直列に。角度を調整すれば…

「これでよしッ! いざいざいざあッ!!」

全力ダッシュ、からのく…1、2の3ツツ!!

全力の跳躍。多分10メートル上ぐらい、上に跳んだところで、両腕両脚のギアから最大出力で蒸気を吹き出させる。

「おおおおおおああ!?!」

Gが凄いいいッ!?!だがしかし、まるで全然ツ!!問題なしッ!!

スカイタワーとの距離が段々縮まってきた。加賀美さんがレーザーで外にいるノイズを落としていくのが見える。

『おおお!!』

『ノイズがどんどん落ちていくウー!』

『ほう、(ドンパチの) 経験が生きたな』

流石レーちゃん。適度な速度でコメントを読んでもくれる。あ、加賀美さんが突っ込んでいった。

よし、あともうちよつとで…って!?

「後もうちよいなのにッ!」

ノイズが私に向かって遅い掛かってくる。

急いで腕の蒸気噴射を停止。脚から噴き出す蒸気を調節してホバリングしながら大剣で斬り落としていく。

「あああああッしやああああ!!」

『ん?』

『誰の声だ?』

『これ織田志乃ちゃんじゃない? おりんと同じ広告の』

『レアキャラk t k r!』

『声が完全にバーサーカーのそれなんです…』

誰がバーサーカーだ!?!そこまで荒れてるわけじゃ…

…この前戦闘映像見せてもらったとき、自分にそこそこ引いた気が…?
…?

…アツアツアツ

『志乃ちゃんここで気絶はダメだからね!?!』

「ああごめんごめん」

わざわざレーちゃんがコメ読みを中止して言葉で喝を入れてくれた。

よし、外にいるやつらはこれで…

「全ツツ!滅ツツ!!だああっしやい!!」

よしっ!外に浮いてる邪魔なノイズは消えた。加賀美さんに追いつかなければ…!

両腕の蒸気噴射再稼働。出力全開。突っ込むツツ!!

「お お お お お !!」

開いていた穴から中に突撃。大剣は…狭いからしまっておこう。

「うううう…しよおう!!」

床で減速しながら着地。なんか多少挟れてるけど気にしたら負け!

「早く避難しなさい!」

あれは…ファイネ?じゃあ、この騒動もファイネの仕業…?にしては避難を促すのはおかしくない?

「ファイネ、どういうつもりですか」

居た!加賀美さんだ!

…?なんだあいつら…ツツツ!?

「……………どうもこうも無いわ、ただ私は私の…………」

「居たぞ!撃て!」

おおおおおおお!!ううう撃ってきたよおおおお!!

『めちやくちや撃ってきたが!?!』

『おりんSUGEEEEEEEE!!』

『銃撃読んでえ!』

『まだ防ぐう!』

『おいあそこ普通に人いるぞ!!』

ツ！民間人!?逃げ遅れてる!?

「うわあああああ!」

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝ!!」

民間人の人を庇うように前に出る。咄嗟に反応して動いたからか、
防御と何もしてない。

「織田さん!」

『志乃ちゃん!?』

加賀美さんとレーちゃんが私に心配の声をかけてくれる。めっちゃ
くちや痛い。けど、多分大丈夫。

「ツツ…大丈夫ですか?」

「は、はい!あ、あなたは…?」

「私は大丈夫です。早く逃げてください」

そう私が言うのと、民間人の人は逃げていった。

『おおおおおおおお!!』

『何事かと思ったら織田志乃ちゃん!志乃ちゃんじゃないか!』

『ナイス志乃ちゃん!』

コメントもナイス。私の判断に間違いはなかった。

「その集団、私は日本政府の——」

加賀美さんは銃撃してきた集団に対して対話を選択。加賀美さん
から話しかけた。

「構わん撃て!!」

が、集団を対話を拒否。再び銃撃する。

弾丸が加賀美さんの体を貫通…つてええええええええええ!?

「加賀美さんッ!」

腹に5発、頭に2発、胸に4発に命中。被弾して、貫通したところ
からはドロリと蟻が垂れてきている。

『おりん!』

『ええええええええええ!!』

『※一部ショッキングな映像が含まれています』

『おせーよ!!』

コメントも混乱している。

絶対に許さんぞ。

「うおおおおお!!」

私は蒸気を噴かせて地面を滑るように移動。銃撃にも当たるが我慢する！

勢いのままパンチ。とりあえず1人は気絶。

「は、あ、ツツ!!」

回し蹴り。1人の横っ腹に打ち当たり、そのまま膝を曲げてから蹴り飛ばす。複数人が巻き込まれた。

「ら、あッしッ!!」

すぐに近くにいるやつを蹴り上げる。脳震盪で気絶してくれただから両手で掴んでバッドみたいにスイングしてやった。

「状況終了。あ、加賀美さん。拘束お願いします」

「あ、はい」

加賀美さんがネットで纏めてくれた。これで起きてもどうもならぬいでしょ。

『?????』

『あ、外からの咆哮は志乃ちゃんかあ（白目）』

『信じられるか？この子が生放送で噛んでたんだぜ？』

『正にバーサーカー』

「マリア・カデンツァヴナ・イヴ、どういう状況か。教えてもらいましょうか」

「……マリア、屋上から脱出を」

フィーネに担がれていた女性が、声を発した。フィーネはそれに従って、逃げてしまった。

「待ってください……!」

加賀美さんが追いかけてようとしたが、床が崩壊してしまった。このままじゃ折角捕まえたやつらが死んでしまう。

「加賀美さん、この人達どうします?」

「…回収して脱出しましょう。後は二課の方々が回収してくれる筈です」

「わかりました」

私はネットを掴んで加賀美さんと一緒に脱出する。

ドオオオオオン!!

「おおう!」

スカイタワーの上部が大きな爆発を起こす。…誰も巻き込まれて
ないよね…?

「あ、っ」

「?加賀美さんどうしました?」

「…配信付けっ放しでした…」

ええ…忘れてたのか…。

…………あ。

「…今、私も見られています…よね…?」

「そう…ですね…」

「……………」

『志乃ちやーん!?今更感が凄いよ!』

きききききき緊張が今になってこみ上げてててて

というかさっきの動き見られてるじゃん!?あああああ!?

『草』

『草』

『イエーイ、志乃ちゃん見てるー?』

「見えますよーだ!今までのやりとりも聞いているからなダンゴム
シーー!」

『!』

『!』

『クツソｗｗｗｗｗｗ』

『ダンゴムシ呼びは草』

『草』

読まなくていいよレーちゃん……。

後日、動画投稿サイトに私のまとめがアップされていた。コメント

が流れる方の。
一応マイリスしておいた。

精進

おりんが謹慎通り越して拘束されました。

：うん、まあ、正直な話、デスヨネー感が強い。

よくよく考えてみたら機密ダダ漏れのオンパレード配信だった…。アーカイブは広告係として責任を持って消させてもらいました。

アーカイブはちゃんと消した。けどやっぱり切り抜きとかのため映像を残してる視聴者もいるわけで…。多くの配信の切り抜き動画や画像がSNSや動画投稿サイトに投稿されたせいでパニック。

私と加賀美さんが捕まえた奴らの存在と行動は問題。そして配信に映ったフィーネの行動も予想外すぎて問題。

政府と世間の意見はバラバラで物議を醸し出してニュースでは日々討論が続く日々。あーもう滅茶苦茶だよ。

ちなみにおりんの被弾シーンはギアの機能として発表され、怪我の療養、という形で拘束を隠されている。

うう：広告係を私1人で担う羽目に…。もうキーボードに文字打つの疲れた…。

私は司令にアホほど怒られて泣きそうになっただけで済んだ。：だけで済んだんだ、うん。めっちゃくちや怖かったけど。

でもおりんは許されなかったんや：こればっかりはしょうがない。配信し続けたのは戦犯過ぎた…。

しかも更に小日向さんがこの騒動のせいで行方不明。何者かに拉致された模様。落ち込みまくった立花さんを元気付ける為に、司令も外出してる。

まあ、私も拘束までとは行かないが、暫く二課で行動を監視されることに。いざという時出動命令を出せるようにね。

とまあ、そういう訳で。家にいるわけでもないものでやることもなく。かつ二課だけでやれることはなんだろう？

「織田さん、いいですか？」

「はっはい！大丈夫です！すみません、むむ無理言って！」

「あはは、大丈夫ですよ。案外見るのも楽しいですから」

私は今、トレーニングルームにいる。久しぶりのトレーニングルームでの演習。藤堯さんに無理を言っただけで準備してもらった。本当に申し訳ないです。

みなみに頼む時めちやくちや緊張した。レーちゃんが「変わりに言おうか？」って言うてくれたけど頑張った。手は繋いでいて貰った。

「では、始めますよー」

「は、はいッ！レーちゃん、行くよ」

「うん、志乃ちゃん」

周りの景色が、だんだん変化していく。

見慣れたトレーニングルームが、別の場所へと変化していく。

それは、今まで私が演習してきた場所とは違う。

今まで私は大きく開けた市街地やそれに近い場所を演習場所にしていた。

けど、今回私が頼んだのは狭い屋内。そう、スカイタワー内でのような戦闘を想定したものだった。

「———♪」

聖詠を詠う。交わり、溶けて、混ざる。

「スウッ……ハアッ！」

ギアを纏った私は、駆け出していく。

ここを選んだ理由は、スカイタワーでの戦いの時、屋内での戦闘経験があまりないことに気づいたから。

私、室内戦って、フィーネを追って二課の更の下に行ったときと、今回の二回ぐらいしかからまともに実戦で経験してない気がする。

そもそも、ノイズはあまり屋内で自然湧きすることは滅多にない。というかない。

というわけで、最近デスクワーク多めだったりしてトレーニングルームで演習出来なかったもので、ついでに屋内戦にしました。

仮想敵のノイズが、屋内に所狭しと湧いてくる。

屋内戦は狭い。だから、私の得意とする大剣は、大きすぎて使えない。

「おりやあああああ、あ、あ、あ!!」

全力ダツシユから、出会い頭の大振りパンチ。

「おわっ!」

……は、攻撃されたから、中断して回避。

「おお!?ふっ!」

数が多いせいで次々と攻撃がやってくる。攻撃したいけど、攻撃する前に致命的な攻撃が飛んでくる!

やっぱり、今までよりリーチが短いからやり辛いッ!やっぱり剣が欲しい……!

「そうかッ!」

『志乃ちゃんどうしたの?』

大きいなら、分ければいいんだ!

私はいつものように大剣を呼び出す。イメージ:イメージするんだ……いい感じのイメージ:あ!!

「宮本武蔵イ!!」

私はそう叫びながら、目の前のノイズを斬りつけた。私の手には、いつの間にか、両手にいつも握ってる大剣が小さくなったような剣が二振り、握られていた。

「レーちゃん!」

『あいあいさー!』

私が叫ぶと、私の動きの残像のように、もう1人の私、レーちゃんが現れる。

シンフォギアも変化する。それは、あの時、私が完全にレーヴァアテインになる前の、ギア。レーちゃんも同じく、その時と同じデザインだった。

見た目が全く一緒の2人。肩を寄り添って、ノイズ達を睨み付ける。

「レーちゃん、いける?」

「うんッ!いくよ、志乃ちゃん!」

「うおおおおおおあ!!」

「ふ、藤堯さん、あ、ありがとうございます！」

「いえ、いいですよ。これ、あったかいものです」

「あ、ありがとうございます」

演習も終わり、藤堯さんにお礼を言いに来た。めちやくちや汗かいたたのを気遣ってからあったかいお茶くれました。優しい。

「むく…」

「えっえっ、レーちゃんどうしたの？」

突然レーちゃんが抱きついてきた。えっ、どうしたのどうしたの？

「…私も、あったかいよ」

「えっっっっっ」

うゝッッッッッ!!これは…可愛すぎるッ…!こんなの…可愛すぎて…罪ッッ!

「あ、あの〜」

「ハッ!すすすすみません!あ、ありがとうございますッ!」

「う、うん。お疲れ様」

ああああああああ!!見られてたあああ!イチヤイチャしてる見られてたああああああ!!

「か、加賀美さん、調子はどどうですか?」

「むしろいつもより好調ですよ、織田さん」

私は加賀美さんのいる反省室に来ている。ある意味私も共犯なのに、流石に何もしないっていうのも悪いから…。

「レーヴァテインちゃんは今日はいないんですね」

「れ、レーちゃんは寝ちゃいました。さっきまでトレーニングルームにいました」

「…織田さんって、よくトレーニングルームにいませんか?」

「エッ、そ、そうですね?あ、でも最近はデスクワーク多めで行けてなかったんですよ」

ちなみにデスクワークの内容だが、SNSの更新や公式用の動画編

集とかである。だから割と機密情報とかも入ってくる。広告係である以上、間違った情報は持たないで欲しいらしい。

「…加賀美さん」

「どうしました？織田さん」

「あ、あの、あまり、無茶ばかりはしないでくださいね」

加賀美さんが、私のことを見つめる。私も勇気を出して、加賀美さんのことを見つめ返す。

「私、ずーっとおりんのことを見てきたんです。応援してきましたんです」
「……………」

「だ、だから、ダンゴムシ代表として。いなくならないで欲しいです」
おりんの配信。闇の住人にとって安住の地、心の支え。柱と家を兼ね備えたような存在なのだ。それがなくなるのは、非常に困る。

勝手な願いかもしれない。けど、これだけは言っておきたかった。

「ふふ、わかりました。じゃあ、私からも」

「エツ、な、なんかありましたっけ？」

「メディアへの露出増やしてください。広告係の片棒がほぼ空気になっってますよ」

「グハア!!」

た、確かに完全に裏方的な存在になってるけども……う、うう……。

「な、何かの形で露出するようにします…」

ぐう…何か良い方法はないかなあ…。あ、そうだVの者になればいいのでは？

「……………うう…。じゃあ、私はこれで」

「はい。また明日」

「え、明日ア!？」

「はい。暇なんですよ、こー」

「そりやそうですよ…。じ、じゃあ、また明日」

「はい、織田さん」

…もしかして、私おりんよりクソザコなのでは？（今更感）

欲望 or 後悔

歌ってというのは、自分の感情を表現する為の一つの方法。

例えば、自分が悲しい、というのを表現するには、短調を使い、そこに加え歌詞で表す。

とまあこんな風に、歌は思わずしても感情が表れる時がある。

モニター越しに映るのは、目を覆い隠すバイザーを持つ、紫が主色のギア。そしてそれを纏っているのは、立花さんにとつての「ひだまり」、小日向さんだった。

目が隠され、表情がわからない小日向さんの口から紡がれるのは、無垢にして苛烈な歌。そこからは、表情からはわからない「感情」が感じ取れる。

クリスさんはソロモンの杖によるノイズ達と、その広範囲殲滅能力で戦っている。

翼さんは、持ち前の対人戦闘能力で敵装者との戦闘を行なっている。

…え？私ですか？私はですね…

「ハア…ハア…あ、うッ…！」

「織田さんの身体に異常発生！身体の一部の機能低下！」

「対症療法を中心に！急いでください！」

「Linkerの使用も視野に——」

メディカルルームです。絶賛悶え苦しんでいます。

…いやあ、やつちやつた☆…スイヤセン…油断して派手にやられたノンノ…

私とレーちゃん、Unité状態で出撃。延々と出るノイズにクリスさんと共に対応する為に戦っていました。

選出理由は…まあ、私が対人戦よりも対ノイズ戦闘の方が経験豊富で得意だからですね。後、クリスさんの苦手な近距離戦闘をカバーする為。

そうしたらですね、出会っちゃったんですよ…小日向さんに…

勿論、小日向さんを奪還すべくして交渉は持ちかけたんですが…決

裂。

止めるべくクリスさんは継続してノイズ戦。私は小日向さんとの戦闘に赴いた。

：食らっちゃったの。ガッツリと。体の中心も中心に。小日向さんのギアのレーザーを。

説明しよう！小日向さんのギアとなった聖遺物「神獣鏡」は、呪や凶を祓い、「あるべきカタチを写し出す」というチカラを持っている。まあざっくり説明すると、シンフォギアを分解することができる：有り体に言えば、シンフォギア特攻なんですわあ。

：うん、もう一度言う。それをガッツリ喰らっちゃったの。

私はシンフォギアであると同時に、織田志乃でもある。それは体が置き換わったのではなく、100%人間と100%シンフォギアが溶けて混ざって、一つになった。

故に、咄嗟に私の側面を思い込みで強くした。それは、自分を守る為。そしてそれよりも、レーちゃんを守るため。

だから、私自身が分解されたわけではない。けど、ギアの装着は過負荷で強制解除。戦闘続行どころか重体となり緊急回収。こうしてメデイカルルームに運ばれている。

意識はギリギリ保っているけど、ぶっちゃけた話辛い。痛みと体が解されていく感覚を味わった。あと迷惑かけた緊張でも意識飛びそう。

それよりもレーちゃん。レーちゃんも同時に大ダメージで即ダウン。今は実体を保てず、体を休めている。

でも大丈夫。見えないし、聞こえないし、触れもしないけど、レーちゃんは、確かに無事だ。それがわかれば、私にとっては万々歳だ。

小日向さんは、何処かに向け移動している。

もう、それを止めることができるのは、立花さん。そして…

『あのエネルギー波を利用して未来君のギアを解除するだオ!』

『私がやります!』

念の為付けている通信機から、司令と立花さんの声が聞こえてくる。

『現在の響ちゃんの活動限界は2分41秒になります!』

2分41秒。全部秒数に直すと161秒。戦闘に置いては超が付く程の短期決戦といっても過言ではない。

『たとえ微力でも響ちゃんを私達が支える事ができれば、きつと』
支え。それは肉体の負担を軽減するだけでなく、精神をも頑強にする強固な柱。

私にとつてのレーちゃん。そしてきつと、レーちゃんにとつての私。そして、密やかな心の支え、おりん。

改めて考えてみると、私も色々なモノに支えられているなあ。

『司令、私も行きます。こういう時に支えあうのが仲間、でしょう?』
ヴェッツ!? あいだっ!

「織田さん、安静をお願いします」

「スイマセン…いつつ…」

驚いて思わず体を動かしてしまった…。非常に申し訳ない…。

『加賀美くん! 聞いていたのか!!』

『今日ばかりは、ちゃんと事前相談して、頼つて、ちゃんとやりとげますよ』

『待つて、どうやって聞いていたの?』

『まあ、その辺りは私の秘密ですよ…』

え、待つて。それで済ませるの? あからさまに何かルールの外側から干渉しているのにな?

『…それよりも、立花さんをサポートする事に徹します。それならいいですよね?』

『……勝算はあるのか、響くん! 加賀美くん!』

『思いつきを数字で語れるかよ!』

『信念を持つて、やり遂げるまでです』

ツつ……。こうしてメデイカルルームで呻きながら通信を聞いていると、何もできない自分があることが、とても悔しい。

いつもなら、レーちゃんが私のことを励ましてくれるのにな…。

加賀美さんと立花さんは、出撃の為に恐らくハッチへ向かった。

作戦の内容は小日向さんの奪還…救出といつてもいい。

映像に破壊された米軍の軍艦。そして、3人の装者の姿が。

そして、海上での交渉が始まる。通信を切っているからか、3人の会話は聞こえない。

少しすると、立花さんと加賀美さんの体に、それぞれのギアが纏われる。

そして、戦闘が、始まった。

立花さんが詰め寄る。レーザーが放たれる。それを立花さんのギアのようになった加賀美さんがレーザーを放ち、それを相殺する。

近距離になると、立花さんの拳と小日向さんの扇がぶつかり合う。2分41秒。既に戦闘が始まってから数十秒が経っている。

レーヴァテインのペンダントを見る。紅い輝きはどこか暗い。

それはレーちゃんがいることを示しているのか。それとも…私自身の気持ちなのか。

立花さんの活動限界まで…残り1分半。行動するかしないか。どちらにせよ、もう時間はない。

ああああああ!!こういうとき、レーちゃんがいてくれたら迷わないけどなあ!!

「んんんんん!!すみません!!」

「えッッ!!ちよつと織田さん!?!」

私はメデイカルルームを抜け出す。腕に刺してもらった点滴やら貼ってもらった電極やらを一思いに全部外して、走り出す。

手に持つレーヴァテインのペンダントが、とても熱くなっている。走りながら握る手が、火傷しそう。

けど、離さない。離さないって約束したから。絶対に離せない。『織田くん!一体何をしているんだ!?!』

通信機から司令の声が聞こえて来る。その声には驚きと、少しの怒りが含まれている。

「……後悔したくないんです!」

『何?』

「ここで何も出来ずに!知らないところで人が消えるのは!もう嫌なんです!!」

私は走りながら叫ぶ。脳裏にはいつも心の支えとなってくれたおりんが、消えるビジョンに、私のお母さんがいなくなったと知ったときの気持ち、リンクした。

自分の中に起こる拒絶反応。その未来だけは、阻止したいと私が、レーヴァテインが叫ぶ。

「ほんの少しだけでいい！助けになりたいんです！」

『…策はあるのか？』

「！はいッ！」

『なら行ってこいッ！そして、後でたつぷりと叱ってやるからな！』

それは出来れば勘弁してほしい。

しかし、後押しを貰った。なら、考えをキツチリと具現化させて、私が少しの支えになるんだ！

「—————♪」

聖詠を詠う。

変わる。変わっていく。

眠っているはずのレーちゃん、私の詠に覚えてくれた。

歌いながらギアの出力を上げ、全力で走り続ける。

もう少しでカタパルト。そしてその外で……3人が戦いあっている。

時間はないから、準備をとつと押し進めて行こう。

両手両脚のギアに連結されている8本のコードを右腕のギアに全接続。左手両脚のギアを分解。そのままリソースを右腕に回す。

レーヴァテインってなんだ？世界を滅ぼす炎？巨人スルトが手に持つ剣？

合っている。だがそれはあくまで同一視されていて、それが有名になっただけであるだけ。

その本質は「剣」しかり「杖」。

ならば杖ならば、私だって補助ができるッ！！

外に出た。外では立花さんと加賀美さんが苦戦を強いられている。

「ッ!?!織田さん!?!どうして!?!」

「わっ私だけが、何もしないわけにはいかないでしょう

よオオオオオオオオオオ!!」

私は地上から、右腕を前に構える。

照準機なんてものはない。何せ急ごしらえの焼き付け刃。でもこれは銃ではなく「杖」。故に

「ファイッツ!!」

右腕に作られた発射口から、複数の炎弾が放たれていく。小日向さんから光が放たれるが：打ち勝つ、までとはいかないが、相殺した。やったッ！これなら負担を軽減できるッ！

私は炎弾を撃ち続ける。狙いはかなり甘い。けど立花さんと加賀美さんの邪魔にだけはならないよう、撃ち続けた。

残り時間が30秒を切った。私の体も正直限界。見たところ立花さんも加賀美さんも限界だ。

「立花さんッツツ!!」

私は叫ぶ。それと同時に右手のギアを解除して通常通りの形態に。蒸気を限界まで噴射して、上空に上がる。体が、ギアが、レーヴァテインが、悲鳴を上げ続ける。

レーちゃんごめん：あともうちよつと、一緒に頑張ろう！

「織田さん!?!何をッ!?!」

「行ってきたくだ……さいッツツツツツ!!」

私は浮き上がりながら体を蒸気を使って全力回転。そして、全速になったタイミングで、立花さんが私のところまでくる。

—— 一閃。呼び出した大剣の腹で、立花さんに向かい剣を振る。

咄嗟の判断だろう。立花さんはそれをしっかりと踏み、剣の勢いに、自分の跳躍力をプラスしてくれた。

加賀美さんが：おりんが、ブースターを吹かし、更に加速する。

それは3種の力が合わさった、奪取の弾丸。3種の高熱を纏って、取り戻すべきものに手を伸ばす。

「未来ッ!!」

立花さんは、小日向さんに抱きつく。

「離しっー」

小日向さんはそれを拒否するように、叫んだ。

「嫌だ！」

それを拒否するように。閉ざされた茨を引きちぎるが如く、咆吼する。

「もう二度と！離さない!!」

瞬間、立花さんと小日向さんを中心とする光。それは渦を巻いて、加賀美さんを、私を巻き込んでいく。

点滅、明滅、暗転、明転。視界が想像以上の光に包まれたが故に、バグを起こす。

私は残りの力で、ペンダントを——レーちゃんを守る。

絶対に、離さないツツツツツ!!

そして、新たな光と共に、私の意識はブラックアウトした…。

そして、ペンダントには、一筋の亀裂が走った。

選択の結果

『――ノイズの発生源とされるバビロニアの宝物庫は破壊封印され、その鍵であるソロモンの杖も消失。現在の所新たなノイズの出現は確認されていません』

『マ？すげえ』

『すげえ…』

『本当に今後現れないのかな？』

『もしかしたら残党みたいなのもいるかもしれない』

『残党の可能性は低くない？』

『また月軌道は正常化、皆さんがご存知の通り。マリア・カデンツァヴナ・イヴとこの地上に住まう人々の思いが一つとなった奇跡の結果です』

『凄い光景だった…』

『神秘を感じた』

『世界に裸を晒しただけの利益はある』

『やめーやw』

『それでも彼女はテロリストとして世界に宣戦布告した身、今後国連の会議にて彼女の処遇が決まる予定です』

『報われねえなあ…』

『まあしゃあない』

『仮にも犠牲者が出た訳だし…』

『それはそれとして罪は償ってもらえないよな…』

『以上をもって、報告を終わりとさせていただきます。続きましては私の「特異災害対策機動部広報」としての活動ですが、二課の国連への編入・再編成を機に終了とさせていただきます』

『お疲れ様』

『今後はどうなるんだろ？』

『おんなじ広告の志乃ちゃんはどうなるんだろ？』

『また配信して』

『織田さんも私と同じく広告としての活動を終了します。これは本人

が1人では無理、と頼んだそうです』

『草』

『草』

『まあそりや無理か』

『志乃ちゃんに1人は荷が重かったか…』

『個人としての活動については、続けさせていただく形です』

『知ってた』

『終身萌え声配信者』

『また翼さんとコラボしろ』

『マリアさんともコラボしろ』

『それでは、ごきげんよう』

「はあく…これで終わりかあ…」

私は自室のパソコン画面から目を離し、椅子にもたれかかった。

いやあ、私の広告としての仕事もこれで終わりかあ…。流されに流されたけど、やり切った感はあるよ。

まあ、それはともかく。

私は生きています。とても危険な状態で、メイカルルームに直通特急されたけど元気です。流星に司令に怒られたといは元気じゃなかった…。

「志乃ちゃんー!」

「ごふあっ!?!」

「ああごめん!」

「い、いいいいいよ…!」

お腹に向かってレーちゃんが突っ込んできた。ダッシュ込みで…。私頑丈じゃないよお…。

あのとき、私はエネルギーの本流に流された。間違いなくギアは分解され、立花さんや加賀美さんと同じく、聖遺物との融合が消えていた筈です。

けど、2人と私の融合症例の間に違いがあるとすれば、自ら

行ったか、行わなかったか。

立花さんは完全に望んではいない。加賀美さんも、最終的には受け入れたとは言え、最初は不本意なものだった筈です。…決めつけは良くないですけど。

けど、私は、自分の意思で融合症例となった。なりたかったから、なった。

ずっと一心一体、表裏一体、そんな感じのことを言い続けた。

だから、あるとき、別の光が私達を包んだのは、きつと見間違いはなかった。

レーちゃんは再び、こうして私の横に存在していて、話しかけてくれて、抱きついてくれる。

違うとしたら、その存在の核が、レーヴァテインのペンダントになっっていることだ。

今までは、ペンダントは別で実体化していたレーちゃん。けど、あの時の戦闘でレーヴァテインという存在の核そのものに過負荷がかかったから、こうなったらしい。

ペンダントには、一筋の亀裂が入っている。それ故、レーちゃんの体には、服の下に長い亀裂のように線が走っている。

これは私も同じだ。レーちゃんと同じく亀裂が体に走っている。だから、やるべく他人と着替えるのは控えている。体育とかね。なんとか誤魔化しています。

まあ、簡単な話、私はレーちゃんとずっと一緒に居たいが故にこの判断をした。だから、唯一の融合症例になったとしても、何も後悔はない。

「志乃ちゃん」

「なあに？」

「好きだよー」

「……私もだよ」

『はい、もしもーし、うたずきんさーん聞こえますかー？』

『きこボボボボえ…てボボボボ』

『マイクおかしいですよー!?!』

草。絶対にそうはならんやろ。でもなつとるやろがい。

『草』

『おりんが来るまで緊張してたし』

『クソザコ感染してない？大丈夫？』

『現れるだけでうたずきんのマイクを破壊する女』

『後輩のマイクの破壊者おりん』

『うたずきんさーん、ちよつとー？』

『だ、大丈夫だ!!』

『あ、よかった…という訳で皆さんご存知の通りうたずきんさんの
初生放送にゲスト兼サポーターとして呼ばれた「おりん」です』

『きよ…：今日はよろしく』

『はあーいよろしく』

というわけで、私は今、「うたずきん」ことクリスさんの生放送を見てます。

レーちゃん？レーちゃんは活動時間に限界があるから今は休んでます。声は聞こえます。

『イキりおりん』

『後輩にイキるな調子にのるなよおりん』

『歌でマウントを取り合え』

『うたずきんかわいい!』

ちなみにこのうたずきんことクリスさんは、生放送が初めてなだけであつて動画投稿を主にしている。

特に歌は凄い伸びであり、既におりんを超えている。オペラ曲のクオリティが高すぎたんや…。

ちなみに編集の手伝いしました。ああ…私のやったことは…全て無駄じゃなかった…。

『キボウノハナー』

歌わんでよろし。

『というわけで今日は一緒にゲームをやっけていきたいと思います』

『今日やるゲームは「パイロット&ガンナー」二人で戦闘機を操作する、ゲームだけど大丈夫かあ？アタシ自信ないぞ……』

『うたずきんさんは撃つだけでいいんですよ、パイロットは私がやりますから』

…この状況、加賀美さんとクリスさんと一緒にノイズ退治をした時を思い出します…。思い出したくない記憶もあるけど。

『おりんの動きを信じろ』

『実質音ゲーじゃないか！』

『これガンナーの方が難しいんじゃない？』

『うたずきんのゲーム配信初めてがこれか……』

『おりんは歌いながら操縦しろ』

『はあい、じゃあおりんは歌いながら操縦します』

『はあ!』『うたずきんも歌いながら撃つって』って無茶振り……んの……そんな事言われた……退けねえじゃねえか!』

え?やるの?冗談半分で米打ったのに?やらなくてもいいんだよ?
?

『良心の呵責?』

そんなところです。

『ツンデレうたずきん良い……』

『照れずきん』

『おりんもかわいい事しろ』

『語気が強いのかわいい女』

……ここはうたずきんのチャンネル……やはりクリスさんに軍配が……だか私はおりんを推すぜ!

『じゃあ、即席デュエットしながらの「パイロット&ガンナー」皆さんお楽しみください』

『武器は……ウエポニーがワイドショット……2が機銃、3がロックオンミサイルで行くぜ』

『はい、じゃあ私はフレア・バレルロール・オブションで』

ゲームがスタートすると同時に、2人は歌い始める。

見所さん大量発生配信企画が、満を辞してスタートした。

『畜生！コンテニューだ！クソツタレ！』

『これでクリアしましょうね、うたずきんさん』

ンンンンンン惜しい！でもクリスさんも慣れてきたっぽいしこの調子なら…あ、撃墜された。

『がんばれ』

『後少しだ』

『ゲームに集中してるのに歌えるの凄すぎる』

『初プレイで4コンテニューか、まあまあだな！』

『おりんが足を引つ張りすぎる……』

『イキり失敗シリーズ』

『おりん惨敗シリーズ』

『また音程を外して撃墜されてて草』

見てるだけでも楽しい時間。レーちゃんとは会話しながら見る配信は、ようやく終わりを告げる。

画面に映るクリアの文字。コメントが歓喜の声で包まれる。

『はあくお疲れ様でした！うたずきんさん！』

『お疲れ、楽しかったな！』

『はあい、本当に……音程外したりして最初はアレでしたけど』

『けど段々とどう合わせればいいのか分かってきてからは爽快だった！
またこういうのやろう』

『ありがとうございます、では私は今日の辺りで』

『お……おつおりん！』

『おつおりん！』

『かわいい（確信）』

『この後おりんもう一回放送あるんだよな……』

『過労死しない程度に配信し続ける』

配信が、終了する。

「ああ〜！面白かったあ〜！」

椅子にもたれかかりながら、余韻に浸って声を上げる。

「レーちゃん。レーちゃん?…寝たのかな?」

多分レーちゃん寝ちゃった。珍しい…。やっぱりまだちよつと辛いのかな…?

私の目の前には配信が終わり、先程の配信のアーカイブが表示された液晶画面があった。

「…やろ」

私はアーカイブと編集アプリケーションを、開き始めた。

ノリだけで作った切り抜き動画は、結構伸びてしまった。

今後

「……………」

「……………」

「……………はい、これで終わりです」

「すつすすみません、ありがとうございますごつごつございます」

「いえいえ。数値は概ね正常値です。『レーヴァテイン』も安定してま
す。が、ギアの装着は今しばらく控えてください」

「はっはい！わかりましたアツ」

「……………まだ、緊張します？」

「ち、ちよつと…」

医療スタッフさんは、それを聞いて苦笑いを浮かべた。

私はメディカルルームに來ています。理由は、私の体と、レーヴァ
テインの検査です。

小日向さんのギアの光に、ペンダントに走った亀裂…。未だ融合症
例である私にどんな影響があるかは、誰にもわからない。私にもわか
らん（無能並感）

私もそうですが、立花さんに小日向さん…それに、加賀美さんも私
と同じように検査を受けてます。ギアの検査は私だけですが。

そう考えていると思うのは、あの戦いで、一気に2つのギアが失わ
れ、1つのギアが大ダメージを受けた。結果だけ見ると、凄惨なのが
わかります。

…まあ、立花さんはフ…マリアさんの GANG ニールを身に纏うよう
になったそうだけど。

メディカルルームのあるこの場所も、二課のものではなくなった。
二課が再編された「国連タスクフォース S・O・N・G」、その基地
の中のメディカルルームに私はいる。

故に、私と加賀美さんは広告を解任されたし、加賀美さんに至って
は S・O・N・G 所属ではなく、協力者という形になった。

……私？私は S・O・N・G 所属です。ギアが無くなったわけ
ではないし、纏えないわけでもない。

「志乃ちゃん！」

「おぶえっはッ!？」

検査から戻ってきたレーちゃんが、私目掛けてタツクル（AP80）してきた。タツクルが…当たった!?

というかレーちゃん体の大きさ私と一緒にだからダメージがが…。

「…あつ…志乃ちゃん、大丈夫？」

「大丈夫大丈夫!じゃあ、帰ろうか」

「うんッ！」

ノイズももう出現しないようになった。ギアが半壊した私が、装者として出撃することは、もうないかもしれない。

お母さんが亡くなってから、ここまで本当に大変だった。よくわかんないうちに二課に連れて来られて、ギアを纏って、レーちゃんとお会って…。実際におりんとも出会って…。

凄く怖いこともあったし、痛いこともあった。

けど…楽しかった。なにより耐久Eの自分の心が、強くなったのが嬉しい。

…気絶回数は減ったから…たぶん…。

『おはりーん』

「ウワッ!おりんだ!」

「おはりーん」

「タスクフォースから追い出された女」

おりんの配信見えます。まだレーちゃんは寝ています。

おりんがS・O・N・G再編の際に外されたことは公表されてしまい、今ではダンゴムシに弄られます。偶に私も弄ります。

直?無理無理カタツムリ。メンタルクソザコナメクジだから。カタツムリだけに…。

ちなみにあだ名は

「タスクフォースに入れなかった女」

「国連が最も恐れた女」

「終身名誉装者」

「世界の萌え声配信者」

「下克上を果たした女」

「ダンゴムシを率いるナメクジ」

「おばか」

「足すその他。酷い言われようである。私については聞くな……。『バーサーカー』とか「聖なる泉枯れ果てた女」とか「アマゾン」とか言われてないから！本当だから！

「……………おっと意識が。」

『今日は耐久雑談配信、つまり私が飽きるまでやる』

「許して。」

「俺達を拘束するな」

「俺達を解放しろ」

「お前に逮捕権はもうないんだぞ！」

「自慢の拘束武器を乱用するな」

「なんで君たちそんなネタが出てくるの？怖いよ？偶に掲示板見るとアホみたいになタが出てくるのはズルい。裏山…いやなんでも。『まず最初の話題だけど、私の将来の話。政府のおかげで顔が売れたけど私自身、将来の夢とかがなくてどうしようかなーって思ってるんですよ』」

「歌え」

「配信で生きていけ」

「芸能界に行け」

「カフェを開け」

「サバゲーやろうぜ」

「頑張って国連に就職しろ」

「広報に返り咲け」

「一生翼さんと配信しろ」

「国を作れ」

「うちでは養いたくない」

まともな意見どころ……うん……？

主は恐らく立川でゴロゴロしています。祈るからもつとお金出してあげて。

『現実的な答えを求めてるんですよおーいくら財産が多少あるとはいえ、目減りしてやがては尽きるだけですよお』

「そらそうよ」

「国からせびれ」

「元は女子高生」

「親の脛をかじ……ダメだ、おりんの親は借金こさえるようなダメ親だったね……」

「聖遺物専攻で科学者になれ」

「おりんに科学者になれるだけの知能があるわけないだろ！」

「やっぱアイドルだよアイドル。……いや、普通に配信してる方が面白いな……。やっぱ炎上系アイドルだったか……。今盛り上がってるもんね。」

『まだ時間はあるとはいえ、悩ましいですねえ』

「そうだ、学生生活に戻れ」

「勉強をしろ」

「勉強してやりたい事をみつけろ」

「進路相談室を使い！」

まともな案 k t k r ……ん？でもうちの学校って…

『復学ですかあ……めっちゃ陽キヤだらけなんですよね……うちの学校……』

「そうでした（白目）私は多分これのせいで気絶の再発が……うん？違う？…あれえ……？」

「なんでそんな所に進学したんだ（呆れ）」

「元は陰キヤ」

「たしかおりん女子高って言ってたから……あつ（察し）」

「女子校は辛いよ。ネットよりガールズトークの下ネタのキツさがダンチ。」

私はびつくりしたね。驚いたよ。

……別に会話に混じってるわけじゃないですよ？聞こえてくるの！
！（半ギレ）

…おりんの顔が暗い。そういえば、立花さんとかクリスマスさんいるけど、翼さんはもうあまり来ないんだよね。来るとしたら卒業式ですか…。

「しよげた顔をするな」

「翼さんの海外進出を思っている顔だ！」

「おりんの表情がわかり安すぎる」

「夢を応援してるといっても友達との距離が開くのは寂しいからな……」

なんだよ…結構みんな優しいじゃないか…！

騙されんぞ。いざとなったら掌ギガドリルブレイクな奴らだ。

学校で思い出した。立花さんとクリスマスさんはいいんです。だけど調さんと切歌さんが来るんですよ…後輩ですけど。

グツ…意識が…（ハザード並感）

「あつ！おりんの顔が死んでゆく……」

「陰キヤに戻るな」

「草」

「草」

「草」

「今にも死にそうな顔をしておられる……」

草。おりんも色々あるんやなって…（他人事）

『世の中、ままならない事ばかりですねえ』

「わかった気になるな」

「知ってる」

「でもそれだけじゃないだろう」

「それだけじゃない事をおりんは証明しただろう」

そうだよ（便乗）。おりんは世界に名を轟かせたし（不本意）、また何かを変えることぐらいできるよ。

『戦います……か』

頼む。頼むから主語をくれ。

「何を思いついた」

「間違いねえ碌でもねえ事だ」

「おりん、やるのか」

「嫌な予感しかしねえ」

『私、有名配信者として世界のトップを取ります』

なんで？（純粹な疑問）

「草」

「草」

「草」

「そうはならんやろ」

「なつとるやろがい！」

「ようゆうた！」

「それでこそおりんや」

「英語を鍛えろ」

「英語だ！英語を覚えろ」

「変な声と変な叫びを出せ」

「歌とゲーム配信で世界を取りに行く女」

ええ…。

……まあ、いいか。それでも、私はついていくよ、おりん。

どれだけ遠くなっても。

G X

液晶越しの偶像

「ふんふん♪」

お母さんのお気に入りだったコップに牛乳を注ぐ。そして、それを電子レンジの中に入れる。

ダイヤルを回して時間をを設定して、スイッチ押す。すると表示された時間が、カウントダウンを始める。

ふふふ……なんやかんやで休みがあんまりなかったけど、今日の私は非常にフリーダム。実体のない炎である私を止められるものなどそうそう…。

「志乃ちゃん上機嫌だね」

「あつ、レーちゃん」

レーちゃんが隣に現れる。

「大丈夫なの？制限の方は」

「うん！大丈夫、本当に少しずつだけど時間まで長くなってきたから」
「…うん、そうだね」

神獣鏡の光と膨大なエネルギーを喰らい、ペンダントを軸にしないと実体となれなくなったレーちゃん。

しかし、そんなレーちゃんも着実に元に戻ってきていることが、とても嬉しい。

故に、棚から砂糖を取り出す手も自然と踊るものよ。

「そろそろ時間近づいてきてるけど大丈夫なの？」

「大丈夫大丈夫、その為にわざわざホットミルクなんて嗜好品を作ってるからね」

パソコンの画面には、数分前に作られたおりんの配信の待機所が表示され、コメントが待機コメントが流れていく。

今日の私はホットミルクの気分。普段は配信見ながら飲み物を飲んだりあんまりしないけど今日はたまたまそういう気分

耐久配信のときは流石に用意するよ？本当にいつ終わるかわかん

ないからね。めちやくちや序盤で終わるとちよつとずっこけるけど。

「んふふ♪」

「……えっ、なに?レーちゃん」

「ううん、楽しそうだなって」

楽しそう…そう、そっか。

まあ、ようやく、お母さんがいなくなる前ぐらいまでには、テンションは戻ってきたかな。

顔を少し、レーちゃんから逸らす。

そこには、仏壇。そしてその仏壇に置いてあるお母さんの写真は、とてもにこやかに笑っていた。

この前ようやく買ってあげた。突然消えてしまったお母さんが、ここにいたという証拠を残すために。

それに、お盆の時に帰って来れる場所が必要だからね。

ちなみにクリスさんと一緒にいった。司令には非常に申し訳ないことをした。しかし全く後悔はしておりません。

さて、ようやく配信が始まる。

『おりんり?!ん』

ファッ?!アッ つつツツ、ツつ?!ア。ーッ?!ホットミルクこぼしたアーツ?!?!

「はい!志乃ちゃんタオル!」

「レーちゃんサンキュー!」

私はいそいそと溢したホットミルクを拭く。うう…折角淹れたのに…。

パソコンの画面。そこに映るのはいつものおりんの服装ではない。聖遺物「イカロス」のインナーに、アームドギア。

かつての二課所属の加賀美詩織が、そこに蠟の翼を以て舞い戻ってきていた。

「えっ?!」

「シンフォギア着てる!?!」

「ファツ!？」

「まずいですよ!」

「なんだこれは…たまげたなあ…」

「なんで? (レ)」

「なんで?なんで?なんで?なんで?くあwせdrftgyふじこ
lp?」

『正義の装者、イカロスが今日は戦争を止めて見せますからねえ』

「正義 (独善)」

「正義 (暴力)」

「正義 (個人の感想)」

「正義 (独断と偏見)」

ひどい言われようで草。(やったことを振り返ってみると) しょうがないね (レ)。

ちなみに纏っていたギアはオーダーメイドで作ったものだと言明。あとで絶対に文句言ってる。

今回おりんがプレイするゲームは「War Rider 4」のストーリーモード。

ざっくり説明。FPS、ストーリーはテロリストからの兵器奪還。

これでいいんだよこれで!こまけえことはいいいんだよ!要は撃つて斬って最終的に屍の山の上で立っていたやつ勝ち。

『平和の為に作った技術がこうやって兵器利用されるのってやっぱ嫌ですねえ……』

「おりんが言うのと重みがやばい」

「シンフォギア纏いながら言う和不吉だからやめろ」

「道具は使い手と使い用だなあ…」

「やはり拳では?」

「どうかそれコスプレか!今来てびっくりしたわ!」

そういうえば今同接どれくらいなんだろう。

……うわ、結構いるなあ。やっぱりおりんも有名になったなあ。

確かに、シンフォギアもそういう「利用される兵器」に類いされる

んだよね。今は二課が管理してるけど、F・I・Sとかみたいにテロ行為に使われた経緯もあるし…。

そういう意味では、この「対隕石迎撃システム」と同じようなものだよね。

「でも、私は志乃ちゃんにしか使えないよ!」

「はいはい、ありがたいけど貴重な時間だから大事にしてね?」

「これは大事なことから!」

やはり(自明の理)レーちゃんは可愛い。

『さて、ゲームスタートです。初期武器はアサルトライフルで行きます』

私は普段凸砂です。反射神経の精度を上げるためにはもってこいだよ!

まあ、調子悪い日だと本当に戦犯になるけど…。

『序盤の敵なんてねえ、大体的なんでここは強行突破して後ろから殲滅します』

迷いなく、障害物に隠れてやり過ぎしながら、隙を見逃さず針を刺すように銃の引き金を引く。

やっぱりおりんはこういうゲームはうまいなあ。私?私は音ゲーが得意だよ。

『フロア制圧、まあこんなものでしょう』

「イキりん」

「おりんのエイムが相変わらず早い」

「そらおりん歴戦だし…。」

「+歴戦のおりん+」

「つよそう(小並感)」

『次のフロアは、シールド持って死んでる奴いますねあれ貰いましょうか』

「容赦なく追剥」

「バンデット」

「グロ死体に動じない女」

「追い剥ぎおりん」

「戦場を駆け抜けた女だ：心構えが違う」

羅生門かな？おりんは羅生門出身だったのか：ギリギリスいるかな？

『階段の上取られてますね、シールド投げて直接キルしましょう』

「容赦ねえ！」

「使えるものはなんでも使うのか：」

「冷徹女」

「見ろ、この冷静さを。これが本物の戦場を歩いた女だ」

「戦場を歩いてもそうそうそうはならん」

加賀美さんは確かに使えるものはなんでも使う戦い方でしたね。

「志乃ちゃんは剣をフリーダムに使いすぎだよ」

「えっ、あれ氣にしたの？」

だってリーチが足りないならケーブルでリーチ伸ばしてぶん回すしかないじゃん。その方が早いし。

『さて、通信が入りましたけどこれボス戦ですよ。作業重機が乗っ取られてるって』

「そっだよ」

「操縦席を狙うんやで」

「うそつけ無人機やぞ」

「ボスのアームは即死やぞ」

「コメ欄の民度悪くなあい？まあ気持ちはわからんでもない。

こういうのはやはりW○k i先輩なんだよなあ…。ソシヤゲ攻略でお世話になりました。

『なんですかあの虚弱な足の付け根は、狙ってくださいっていつてるようなものじゃないですか』

「草」

「(ノム?)」

「雰囲気比べて脚部が貧弱すぎんだろ…」

「もう弱そう」

「多分雑魚だと思っんですけど」

「強敵やぞ」

「いやそうでもないです……」

あれ大剣で一気に折れそうじゃない？またシュミレーションで似たようなの出してもらおうかな？

「そんなシュミレーションデータあるう？」

「信じるのが大事」

多脚ロボとかドヒヤドヒヤ動きながら超高熱複数チエーンソーとかあったしいけるいける。むしろなんであれあったんだろう…別に頼んでないのに…。

『とにかくアーム怖いので、懐入りまして……ってこれ格闘押せって出て……あっ』

「容赦無く破壊して草」

「たかが歩兵一人に破壊される重機の屑」

「味方の予算と資源を壊すための兵器かよお！」

「鉄屑」

「がらくた」

…これほんとに作る必要あった？図体のせいで隠密できないし歩兵1人に破壊されるしでクソ雑魚すぎるだろ…あほくさ。

しかしロマンは捨ててはいけない。故に高出力のビーム砲…作るうね！

『道中の歩兵とドローンの方が強かったですね……今日はこの辺りにしましょう』

「実際こんな事件が起きてもおりんがシンフォギア纏ってたら何とかなりそうですね……」

「おりんを対テロ部隊に編入しろ」

「ダメだろ、おりんは独断先行するタイプだ」

「つまりワンマンアーミーなら……？」

ちよつと言われすぎなんうちやう？まあ多少はね？しようがないね？

だって何も嘘は言われてないんだもん…私だって確かにそう思う。『確かに私は独断先行するので、本当にこういった事件とかを解決す

るのには向いてないかもしれないね……こういうのはやっぱり専門家がいますので……』

「まあ元気だして」

「タスクフォースにはぶられた女」

「そのうちいい事あるって」

「どうかそのシンフォギアのコスプレは許可貰ってるの……？」

あつ。

『はあい、では今日はこの辺りで配信終わり！閉店！』

おりんが逃げた!? くつそお卑怯な！

〜この後通話にて〜

「加賀美さん」

『はい』

「許可は出たんです。ええ、わざわざ私に取りました。気絶しかけながら」

『はい』

「けど真面目に許可は取ってください……普通に心臓に悪いです……」

『すみません……』

ちなみにおりに電話かけるのにそこそこに勇気がある為、コールするのはレーちゃんがやった。